

大阪新聞

自第百四十一号
至第百六十六号

三

1寧8

69

3止

0 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9

門 69
第 3
卷



明治五年五月二十七日
西曆一千八百八十一年
六月六日
本日
寒暖計
五上度

隔日
發兌

大阪新聞 第四十二號

○ 報知

神山縣管下山奥郡下桐村農夫横山林左エ門妻懷妊シ
追々月重ナレドモ胎兒唯一小塊ヲナセシノミテ躰具
セシ様子モナク然レ共時々動靜ヲナシテ尤モ怪シケ
レバ医家エ之ヲ問フニ診察シテ血塊ナリト云之ニ因
テ夫婦トモ心ヲ苦シメ何卒墮胎ノ薬劑ヲ投シ吳レヨト
乞ヘトモ醫師制シテ婦ノ躰ニ障ラン事ヲ示シ更ニ容
サズ然ルニ心痛ノ余リ終ニ医エ知ラサズシテ自己ニ

明治五年五月

大阪新聞第四十二號

〇一

藥店工赴キ右ノ子細ヲ談シ一服ノ茶ヲ求メ用ヒシニ
其夜出産セリ是レ四寸計リノ怪虫ナリ暫時アリテ蠱
動静マリ後又ヨク見ルニ全ク麻苧ノ集リ寄テ虫形
ヲナセシナリ因テ各思慮スルニ此婦農業ノ暇苧ヲ紡
績スル事ヲ平常ノ職トス不断ニ指ニ唾ヲ濕シ苧ヲ撫
シ又其苧屑アルノ節ハコレヲ口中ニ投シテ嚙切杯スル
事朝夕積リテ其苧屑自然ト服中ニ入滞リ終ニ一塊虫
ヲナセシナラント謂エリ婦ハ産後間ナク死セリト云
或云前年又一婦人綿ヲ嚙ノ一癖アリテ自然咽ヲ降リ
一虫ニ変シ服中ヲ惱マセシニ名医アリテ下劑ヲ投シ之

ヲ治セシト云即チ同論ナリ男婦共平素心得可キ事也
是當春ノ事件ナレドモ一奇良ニテ且ツ心得ノ端ナレバ爰ニ記載ス

○ 投書

報知新聞第七号ニ三重縣ニ於テ柴山何某贖札ノ事件
ニテ屠服セシ由ヲ記シ引續キ同文ニ全縣服部某ナル
人モ自殺セシ趣ヲ記載セリ其事實ヲ知ラサルモノ此
新聞紙ヲ見ハ服部氏モ贖札一件ニ因テ自殺セシモノト
思ヒ認ムル歎ヒナカルヘシ又親族ノ之ヲ聞クニ至リテハ
幾干カ遺憾愁歎限り無キ想像ス可シ又爰ニ實蹟ヲ奉
クレバ猶更重嘆ヲ懷ク可シト雖モ其自殺タルヤ柴山某ト

服部氏トハ黑白ノ相違アリ豈ニ黙シテ止マンヤ此服部某ハ東京
 弟三分營徵集兵部長ノ名ヲ荷フテ三重縣ヨリ右分營
 工出張セシナリ其勤務中部下兵卒壯年ノ者共服役中
 各自欲スル処ノ學業本務ニ縛サレ今精學進步ノ秋ヲ
 空フシ生涯ノ善的ヲ失ヒ冤化ニ悖ル等苦情紛々帰郷
 ヲ好ム者過半ニ及ヒ其隊既ニ瓦解セントス當時服部
 某病ヲ療シテ閉居セシカ此舉動穩カナラサルヲ聞キ
 憤然泣血其徒ニ諭シテ徵集兵ノ肝要ナル本主意ヲ尽
 シケレバ何レモ徹底隨從セシカ同志勤勞病苦交^ミ慕リ
 テ遂ニ當四月某日拳銃^{ピストル}ニテ眉間ヲ一放シテ黃泉ノ客

トナリ又其臨終尚兵勢ヲ鼓舞スルノ一書ヲ殘セリト
 軍ク然ルニ前載實札唇腹人ノ後エニ名アレバ彷彿ト
 シテ世人誤リテ同日ノ看ヲナサバ此服部氏ニシテ千
 戈ノ醜名豈悲シマザランヤ爰ニ述ヘテ聊カ弁解ニ備フ



九月廿四日川口運上所ノ近辺ニテ神戸通航運化丸ト
 稱スル蒸氣船破ヲ上ケテ出船致サントセシ折節水
 減シテ船^{スハル}居艘シ困却セシニ因テ一層ノ火氣ヲ増シテ
 猛勢ヲ發シ以テ之ヲ馳セント石炭ヲ頻リニ燃^キシニ案
 ノ如ク漸アツテ車力^{トラカ}史ニ奮發シ船体一迴轉セシハツミ

田五 申立 九段 陸軍 第三号
傍ニ小船一艘米俵四五十俵計リ積入居シニ車羽ノ勢
ヲ以一彈スルト等シク彼小船真ニツニ剖^{サテ}テ米俵共ニ
沈没セリ蒸氣ハ烈勢止メ難ク其後出船セリトゾ

答投書

巡邏卒往來ニテ立話シ致スヲ聞クニ多クハ區長伍長
ノ悪口ヲ言フ趣ナレバ以來ハ邏卒ノ氣ニ入りタルモ
ノヲ入札シテ悪口スルモノハ御咎メ有之度云々ヲ記シ
府廳アテニテ投書アリ思フニ是ハ府廳工建言ノ為目安
箱ニ投スベキヲ誤テ當社ノ新聞函ニ投ヒシモノカ目
安箱ニハ目安箱ノ文字アリ新聞函ニハ新聞函ノ文字

ヲ記シアレバ宜シク御熟覽アツテ投シ玉フベシ因テ
右書ハ燒捨申候

和歌山縣有田界山内寛一郎ト著名シ學凡ヲ論シタレ
体ノ文言ニテ末ニ不顧恐惶愚存奉獻呈候替首再拜謹
言ト記シタル投書アリ是モ前件同断ト見エタルニ付燒
捨申候請フ是等ハ政府ニ進呈アリタシ

○ 弟卅七号附録ニ記載セシ

天長節奉祝市街賑報拾遺

前ニ記ス本日堂嶋連中被髮ニテ住吉社ニ參詣スルモノ
凡百二十三人計リノヨシ

本日城内拜見 番場松島等工群集ノ男女夥敷敢テ莫計ノ及ブ所ニアラズ

角ノ芝居技藝者共一座残ラズ一様ノ装ヒヲナシ頭ニ「シヤツポ」ヲ戴キ祝賀ヲ謡フテ街道ヲ群行セリ
西横堀筋ニハ陶器ヲ以テ種々細工ヲナシ各戸美巧ヲ競エリ
其中傳信機燈明臺ノ細工尤精ユニシテ傳信機ハ長ヶ教町ニ及ヒ近傍中ノ冠タルモノト稱賛セリ

運上所輸出十七日

- 白蠟ニ万九千百斤 ○葉タバコ四千三百斤 ○切昆布二万四千百斤
- 空油樽二百八ツ六十二弗四十セント 陳皮二万八千斤 武百廿四弗
- 同日輸入 ○茶種四万四千斤 ト三百卒弗 ○紅花千斤 八百弗

○ 東京靈岸嶋絞油渡世松川庄兵衛召仕庄助ナルモノ先月廿九日主人ノ大金持去リ夕顔艦工乗込タル由依之庄兵エヨリ電信ヲ以大坂工捕縛ノ儀頼越セリ即千羅卒二名天保山沖マテ出浮本月二日同艦ノ着港ヲ待受彼庄助ヲ召捕タリ不開化ノ人間々長線高柱ノ無益ヲ冷笑スルモノアリ是等ノ便ヲ觀テ陋眼ノ暈ヲ拭フベシ

物價表

米	堂嶋濱	開商社商品時價	黑砂糖	四兩四十七
振津	三系廿四	酒拾駄	綿	金毛兩
肥後	同九十七	塩百俵	糸綿	四十二系
筑前	同六十五	茶百斤	生糸	廿三兩
水油	世系十セ	蝦鱈百斤	昆布	八百系
		地廻十六兩	寒天	六百系
		登十五兩二ア		

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞ヲシハ
 本局及ヒ撰集所ト寄ヒシ中、素志ヲ助ク王ハ事ヲ任シ
 投書ハ必ス顯名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得迄テ出板後ハ
 煉棄可申候。○望ニヨッテ出板スル件、△諸君賣買△新店開キ
 △觀セモノ集會等引札、△他世間ニ披露事件、統テ應其望
 函版一行并三字ニ付定價ハ續續ニテ別冊可申候

本局 本署
 撰集所 長堀并池濱東
 取入所 青湖堂
 次 東京 村上出店
 大阪 村上出店
 京都 村上出店

隔日發兌 大阪新聞 第四十二號

○投書

半髮ハ健康ノ害タルヨシ御諭アルニ付被髮ニ化マル
 人日ヲ追テ相増ス然ニ口髭ハ何ノ心付モナク誰モ剃
 去ル事ナリ口髭迎モ無用ニ天賦ハアラジ試ニ推考ス
 ルニ飛埃揚塵ノ口中へ飄入スルヲ遮ル為ノミニハア
 ラジ抑モ齒ナルモノ食物ヲ小成シ消化ノ下夕ゴシラ
 ヘシテ腹中ニ送り込ム生活第一ノ要具ナルニ兔角風
 氣ニ感シ易キモノニシテ熱血掀衝ノ餘ヤ、モスレバ

明治五年八月十日 壬申年七月十八日
 西曆一千八百七十二年八月十八日
 本日公 寒暖計 五十八度

明治五年八月十日 大阪新聞第四十二號

未夕老境ニモ及ハザルニ謝去脱落スル多シ借口髭アリテ寒風ヲ遮リ發氣ヲ止メ齒ノ為ニ大ニ防禦ヲナス去レバ頂髪同様是ヲ蓄ヘ置ハ理ノ必然ナリ或ル人此比口髭ヲ頂毛ノ如ク短ク鑷ミ切り鬚ノザン切り吾ニ始ルトイヘリ

因ニ云古人詩ヲ思ヒ句ヲ探ル時ニアタリ長鬚ヲ燃リ廻シ是ヲ以高致トナス事アリ又アマリ思ヲコラセシ時ハ竟ニ鬚ヲ燃リ断ツ事モアルヨシサレバ鬚ノザン切りハ詩人ニ鼻祖アルベシ畢竟長キ鬚ハ邪ナルモノ開化ノ今日ハザン切りスルコソ輕便ニ

シテ害ニ遠ル術トイフベシ

從伊勢報知

松坂紺屋町ニ菓子類ヲ鬻キ渡世セシ丹生松兵衛ト云者アリ元來仏門信仰ノ者ナルカ當年妻ヲ亡ヒ其身一人トナリシ故此世ノアシキナキヲ歎シ朝夕瑩々商業ヲモ心掛ケス唯彌陀ノ來迎往生ヲ希ヒ居タルカ此度神宮教會相開ケ數日ノ説教ヲ聽聞シ大ニ敬神愛國ノ良心ヲ撼發シ從來ノ惑ヒヲ悔悟シ親族又ハ近隣ニ申シケルハ是迄ハ極樂淨土ヲ此上モナキ好世界ト聞キ一日モ早く往生シタク思タルニ今般 神教ヲ聞テ始

テ 皇太神ノ御徳ノ有難ク 御國ハ世界中ノ最上樂
 土タルヲ知タリ此上ハ死タキトノ念ハ断然相止メ新
 ニ妻ヲ迎ヘ子ヲモ産シ永ク職業ヲ勉勵スヘシト云ヘ
 斗嗚呼古人有言一人之心千万人之心也此某ノ悔悟説
 ヲ以テ見レハ 神教ノ振起スル目ヲ弑テ待ツヘシ
 右松坂ノ續キ久居ニテ七日ヨリ九日ニテ説教所ヲ開
 キシニ松阪同様ニ庶民羣參聽聞セリ又志州鳥羽ヘモ
 同日ヨリ説教所ヲ開キ盛ニ説教ス右久居鳥羽兩所モ
 毎月式日ヲ立教職巡回説教スヘシト云

○當市中大川筋ヲハジメ枝流ヲイテ奮米漁者石垣際

ヲ圍ミ置キ（糞）莖ノ煮汁ニ石灰ヲ加味シ圍ミノ内ヘ流
 シ込ミ（鰻鱺）其餘ノ雜魚夫カ為ニ毒醉シテ苦シミ浮ム
 ヲ得テ店舎ヘ價換ヘ毒汁ハ其儘下流シ縦ヘ大海ノ一
 滴トハ雖モ眼前毒汁ノ下流ヲ飲食スルト又苦醉ノ魚
 物ヲ喰用スルハ實ニ可禁カ清潔ノ活水ヘ塵芥腐敗ヲ
 棄流スルトハ當今ノ御趣意ニ難的ナリ右ノ如ク（顯露）
 ニ毒汁ノ下流ヲ憚カラズ殊ニ苦醉ノ魚物ヲ賣買スル
 ノ所業ハ速ニ嚴禁ノ頒布アリタキト云
 右投書ノ儘記ス

○道修町何某ノ妻用向アリテ南辺工至リ猶堂島辺工

廻ル用事アリテ途中ニテ人力車ヲ雇ヒ乗行キ先方エ
 至リ車ヲ返シテ後不斗心付シニ車ノ内ニ西洋傘取忌
 レタリ最早時刻モ移リ且ツ街傍ニテ相對ヲ以テ雇ヒ
 シ車ナル故住所モ知レズ四五圓金ノ價ナル品ナレト
 モ是非ナクシテ帰りシニ留主中宿元エ車力ノ者洋金
 持参シテ今日御内室ノ乗ラレシ車ノ内ニコノ傘残り
 居シト言捨傘ヲ渡シ置テ帰レリトゾ世間多ク忘レモ
 ノ拾ヒモノ杯ヲ押隠シ私有物トナシ後發覺シテ咎メ
 ヲ蒙ルモノアリ然ルニ此車丁通掛リノ客ニ對シ如此
 取計ノ正直且信切ナル其業ハ僅車ヲ牽テ生活スル賤

モノナレト其心ノ潔白ハ不正ヲ事トシ巨萬ノ財ヲ蓄
 フ豪商ヨリ貴キ幾千ソ唯其姓名ノ分ラサルヲ遺憾ト
 ス

○或官員ノ話ニ府廳内當春敷疊ヲ廢シ總テ板敷ニシ
 テターフルイス等相用ヒラレ猶ノ儘升降相成ルハ誠
 ニ便利ナレ共官員ノ中ニハ今日ニ至ル迄大袖ノ服ヲ
 着シ大幅ノ袴ヲ用ユルモノアリ是ハ公事ヲ取扱フ際
 誤ツテイスニ袖ヲフクロバシターフルニ袴ヲ破ルノ
 患アレバ悉皆改マリタシ加之玄關ノ上ニハ高木履足
 駄等ヲ乱雜シ誠ニ見苦布コト限りナシ仮令ヒ公然違

シハ之レ無クトモ銘々注意イタシタキコトナリト云ヘリ
 ○壬申九月廿六日西京西本願寺ニ於テ博覽會觀客殊
 ノ外多人數ニテ且此日島原ノ遊妓モ場ニ望ミ一層ノ
 賑ヒヲ増セリト云其妓名ヲ擧レハ左ノ如シ
 行翠樓 太夫末廣 同初扇 同綠木 同光扇 同轉進
 安井 大井樓 太夫相生 同轉進玉琴 同玉ノ井
 光春 井上 太夫相生 同轉進玉琴 同玉ノ井
 映碧樓 轉進八重浦 同八重紫 同紅梅 向栄樓 轉進
 佐久間 梅里 養老樓 太夫花紫 同薄雲 同花園 同朝妻
 高橋 同大井 同花窓 同花琴 同八重雲 同轉進綾里
 同通路 占廿二名

○造幣寮御雇極印機械方英人フレッチャールトハ去ル辰ノ
 十月ヨリ御雇ニ相成リ来ル酉ノ三月迄勤ムレハ謝儀
 トシテ一々年ノ月給三千圓外ニ歸國ノ旅費等迄賜ハ
 ルノ處元来同人酒癖アリテ長官キンドル氏ヨリモ屢異
 見ヲ加ヘラレ漸ク悔悟誓テ禁酒ニテ暮セシニ八月下
 旬開業ノ節旧癖再ヒ發シ職務ヲ怠リシニ付一紗ノ取
 リ締リニモ關係シ此上ハ差免シ難シトテ終ニ御雇御
 免ニ相成シヨシ嗚呼一杯ノ麥酒金三千圓ニ値スト云
 トモ可ナリ謹テ世間ノ酒癖家ニ示告スルモノナリ

月六五申年

明治五年壬申十月十日
西曆一千八百七十二年十月十日
本日公
寒暖計
六十度

隔日發兌 大阪新聞 第四十三號

○富國強兵ノ據テ起ル所以ハ學校ノ設構及學課ノ良能ニ關涉スルト聽ク果シテ然リ今耶我國文明之流ニイミ開化ノ純水ヲ吞ミ殆ト歡樂界ニ進行シ國家ノ美稱ヲ擴ク六大洲中ニ振示セントスルノ勢是各々人ノ人タル道ヲ明瞭ニシ知識ヲ研磨シテ光澤ヲ増附スルニ適良ノ學課ヲ以テシ不日勉勵ノ功績完成ノウエ初テ源泉ノ良域ニ膝坐シテ德澤ヲ蒙ルト云ンカ故ニ今農工商ノ區業ヲ係論セズ擧テ爰ニ着眼シ因循姑息怠

月名正年三

物價表

米	堂鳩濱	開商社商品時價	黑砂糖	四兩四十七
櫻津	八日三系四十五	酒拾畝	綿	阪上七百七十目
肥後	同同五十五	塩百俵	小綿	京丹八百目
筑前	同同七十七	茶百斤	純綿	四十二系
水油	同並糸十セ	鷄	生糸	三十四系
		晒鱈百斤	寒天	九三兩
		地廻十六兩	本局	八百系
		登十五兩二ア	撰集所	三系五十系
			入阪	六系
			西京	
			東京	
			下	

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ本局及ヒ撰集所ニ寄セシテ素志ヲ助ケテ王ハ事ヲ任セ投書ハ必ス顯名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得近ラ出版後ハ燒棄可申候 ○望ニヨラ出版スル件ニ諸品賣買△新店開△觀セモ集會等引札 其他班間工被露事件總テ應其望 再版一行外三字再定價は續ニテ別冊可申候

本局 本局四丁目 書籍會社
撰集所 長堀川濱東 青湖堂
入阪 村上勘次街
西京 本橋川瀨石丁角
東京 村上出店
下

惰ノ惡弊ヲ棄テ疾行及ヒ勉勵ニ推移シ頑固偏倚ノ舊癖ヲ翻換シテ德益新事ノ良法ニ從事シ陋習醜靡ノ舊疆ヲ去テ良風德化ノ新疆ニ赴キ痴鈍ノ短見変シテ知哲ノ遠意ニ遷リ長ヲ得テ短ヲ補シ萬般善良ノ鴻益ヲ起サン為メ各々所獲ノ産業ヲ講究勤力シテ我國ノ富國強兵タラントヲ冀望スルハ今日國民ノ急務タラニ然ルニ 朝旨ヲ奉休セズシテ却而政府ヲ恨ミ將現今天ノ然カラシムル時勢ヲ不悟國ノ開化ニ赴行スルニ從ヒ各自ノ無智ヨリ活業ヲ失シ生存ニ困苦スルノ患ヲ不知シテ瀨蕩ニ泥弱シ自己ノ職務ヲ舍憇シテ終日

虚語小見セ講釈 筭ニ時刻ヲ消費シ亦ハ娼樓ニ姪耽シ無益ニ若干金ヲ擲投シ頗ル狹客ノ風ヲ慕行身ノ安然ヲ保守スベキ經濟ノ適限ヲ過シ依然茫乎トシテ舊風ヲ存シテ故處ヲ不離徒族ノ流下ニ住泥スル輩殘居セリ實ニ捧腹ニ不堪又憾歎ス併シ政府憎怒ノ酬ヲ施與ナク是等ノ輩ヲシテ懇ニ教諭アリテ漸々開化ノ善旅ニ赴カシメンタメ盡力尤著大タリ然ルニ猶悔悟セザル彼等ノ類一ハ當人ノ愚ニ依リ一ハ區長以下ノ評議吏朝意ヲ宣揚スルノ姿只其皮面而已ニシテ真ニ奉遵之實ヲ失シ到底教示ノ殘隅粗漏ニモ係ルモノト洞

察ス冀ハ偏ニ美善ノ政体ヲ遵奉シ萬物ノ長タル所以
ヲ昭明ニセバ造化神ノ聖意ニ徹直シ各人ノ本懐ヲ達
シ僥倖是ニ過ギン 川西住賤賈 謙松房次郎

右投書ノ儘記ス 梅澤信次郎

○去世四日夜二字頃澱川登リ三拾石船網牽ノ者一人
淀城ノ近辺ニテ過キテ堤ヲ踏外シ没セリ兼テ水練ノ
心得モアラニ如何シケン沈ミシ儘ニテ再ヒ浮キ揚
ラス船子共哦ニ立騒キ呼ヒ掛ケ或ハ水中ニ入此彼尋
探レドモ敢テ知レズ竟ニハ死骸ダモ得ズ終リケルト
ゾ

○皇太神宮大麻ノ惡説モト街説也或ハ云フ此發起人ハ元
土彘藩士ニテ夫ニ甲乙數人加リ官ニビイシテ奸謀ヲ
企タリ且其發起人ト重役一人ハ此企テ海内一般ニ行
レザルヲ知り其割部ヲ取テ早ク此仲間ヲ脱セリ杯ト
説トリ々々ナリ是全ク風来子ノ如キナマ者知等ノ惡
評ナラン依之衆人半信半疑シテ我宅ニ祭リナガラ信
仰セザル者マ、有由也願クハ是等ノ浮説ニ惑ハスシ
テ崇敬スル様今一應諭告アリ度モノナリ

右投書ノ儘記ス
○ 從伊勢ノ報告

向河崎町高橋権工門ト云者倭町教會ノ周旋掛ヲ申付
ラレシカ七ケ日ノ説教終會ノ後同町ノ中ニテ無虚日
拜聽ニ出タリシ者數十人ヲ自宅ヘ招待シ教會ニテ拜
戴セシ神饌ヘ更ニ酒肴ヲ指加ヘ共ニ之ヲ戴キ猶此後
モ無懈怠拜聽ニ參會スヘキ旨互ニ相約シタリ元來右
権工門ハ搗米渡世ノ者平日ハ家事質素ヲ主トシ萬事
省略ヲ旨トセシカ神恩ヲ報スルハ明倫ノ急務ナルヲ
會得シ同町中ノ者ト云ヒ合セ神供米若干ヲ寄附シ猶
教會ノ式日急雨ノ為ニ聽衆ノ困却スルヲ救ハントテ
傘數十本ヲ寄附セント申出タリ

〇終夜各町ニオイテ時刻ヲ報スルノ太鼓連々トシテ
聞ユル中ニ或ハ彼レニハハツトシ是ニハ七ツトシ其
相違スルモノ甚キハ一時半ナルアリ更ニ何レヲ是ト
スルヲ不知今ヤ事物ノ理明ラカニ日ニ新ナルノ際カ
、ル不平ノ旧習ハ除キ去リ府下同一ノ報刻アラハ公
私ノ便大ナルヘシ宜シク改正アリタキコトナリ

〇 投書

世号投書淫風謡歌廢スヘキ旨實ニ可也併文中淨留璃
本等迄燒捨スベキ事是不可也今是ヲ廢スル時ハ芝居
ハ勿論是ニ類スル技藝等悉ク廢セズンバ有ベカラズ

明治五十年申年九月九日

是ヨリ外ニ禁ズベキハ人情本ナリ早ク是ヲ禁ジタキ
者也是人情本ノ乱情タル事序文ニハ勸善止惡ヲシメ
シ貞操孝道ノ教書トアレトモ其實ハ婦女子ヲシテ乱
情淫風ニ導引ノ甚シキタリ

東大組第十三區小學校生徒入負表

大坂府 御管下
句讀生 男百九十四人 習字生 男二百十九人 算術生 男二百九人
徒檢計 女百二人 徒檢計 女百八人 徒檢計 女九十八人

○ 揭示拾物

松材壹本 十月三日木津川ニテ拾取
小船壹艘 十月五日湊町九十九番屋鋪浦濱ニテ拾取
脇差二本 十月四日朝鐘屋町人家格子ノ上ニ置有

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ總テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ
旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓スレドモ私ノ遺恨等ヲ以テ人ヲ謗リ或
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書節シ且無根ノ流説等ニテ人ノ損害ニ
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フベシ尤社中心得道ニテ紙上ニ其名ヲ
記セズ上梓ノ上エハ悉ク燒棄可申候若文中齟齬ノ事アラバ公明
ノ討論ヲ述べ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ付テ議論
相互ニハトモ當社ニハ關係致サス候

社中敬白

明治五年申年 大阪新聞第...号

物價表

米	堂嶋濱	開商社商品時價	黒砂糖	四兩四十七
振津	銘 四十五兩	酒拾駄	綿	阪上七百七十目
肥後	地廻り四十兩	塩百俵	水綿	京丹八百目
筑前	無田十二系半	茶百斤	純銀	三十四系
元商社	アコ二十系	干鰯	生糸	北三兩
水油	大頭洋	羽鰯	昆布	八百系
石	上 五十六枚	鮭	別京	三系五十枚
	四十五枚	鮭	寒天	四系ヨリ
	九十	鮭	本局	六系
	地廻り十六兩	鮭	撰集所	書籍會社
	登十五兩二ア	鮭	入阪	長春井池濱東
		鮭	曲京	青湖堂
		鮭	次	村上勘兵衛
		鮭	下	村上出店

伏テ貴方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ
本局及ヒ撰集所上寄ヒ社中 素志ヲ助ク至ハン事ヲ任
投書ハ心ス顯名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得並テ出版後ハ
燒棄可申候 ○望ニツテ出版スル件 △諸品賣買△新店開キ
△觀セモ集會等引札 其他世間工披露事件統テ應其望
出版一行中三守ニ付定價ハ變遷ニテ引續可申候

本局 本号四丁目
撰集所 長春井池濱東
入阪 村上勘兵衛
曲京 村上勘兵衛
次 村上勘兵衛
下 村上勘兵衛

隔日 發兌 大阪新聞 第四十四號

投書

文明開化ノ國ニテハ各人無益ニ時間ノ消靡ヲ吝ムハ
衆人ノ能ク知ル所ニシテ今更爰ニ記載ヲ不待然ルニ
尚我國ニテ旧習ノ惡弊依然トシテ存セルモノアリ從
來此地及他府ノ各商諸國ニ取引スルヤ數多ノ荷貨ヲ
各地ニ輸送シ壹年間之内三度乃至五度懸金取集トシ
テ手代ノ者ヲ遣ス其都度若干金及數日間ヲ消費スル
而已ナラズ旅費ノ餘リ遊蕩ニ耽リ主人ノ財本ヲ没消

明治五年申年五月十日 西曆一千八百八十七年二月十日
本日 寒暖計 五十度

明治五年 大阪新聞第...号

シテ損害ヲ醸シ又帳表齟齬ノ愁アリ己レハ惡症ヲ請
テ体ヲ毀傷シ再ヒ健康ヲ得ル不能一生廢物ニ終ルモ
ノアリ真ニ國費ノ最大ナルモノト云ツベシ將各地ノ
各商一種ノ惡弊アリテ荷物入店ノ後品位ノ善惡ヲ唱
表シテ減價セシムルノ癖アリ亦或ハ約束直價ヲ減少
サスルノ弊アリ故ニ賣商ニ價ノ虛直アリ頗ル不便ニ
流弊シテ然モ勘定不拂ツタリ漸々當所諸商之内不得止
貸金ノ膨増セン事將若干金ノ雜費ヲ捨棄シ手代遣ヒ
込ノ難アラニコトヲ恐レ商事縮撓セバ亦歎憾ノ一端
タリ到底衆人信義ノ情實ヲ失セル故也誠ニ現今皇國

ノ勢各々勉強シテ國益ヲ隆立シ國家ヲ盛富ノ岳嶺ニ
置カンニトヲ冀望スルハ衆庶ノ急務ニシテ今各々不
羈獨立ノ權ヲ得商業自在ニ廣ク振示スルノ時ニ在リ
偏ニ冀ハ一家同祖ノ論ニ基キ信實ノ事情ヲ顯通シ各
人舉テ富ヲ起ス事ヲ今更ニ旧習ヲ除洗シテ歐例ニ倣
ヒ爾來互ニ信書ヲ以テ諸事ヲ便送シ亦仕切勘定モ同
様タラバ無益ノ費ヲ簡略スル數件アリテ真ニ便利ノ
美事タラン實ニ旧弊ヲ存セバ壹年間其費ノ莫大タル
筭スル不能皆十國家ノ疲弊タリ

○

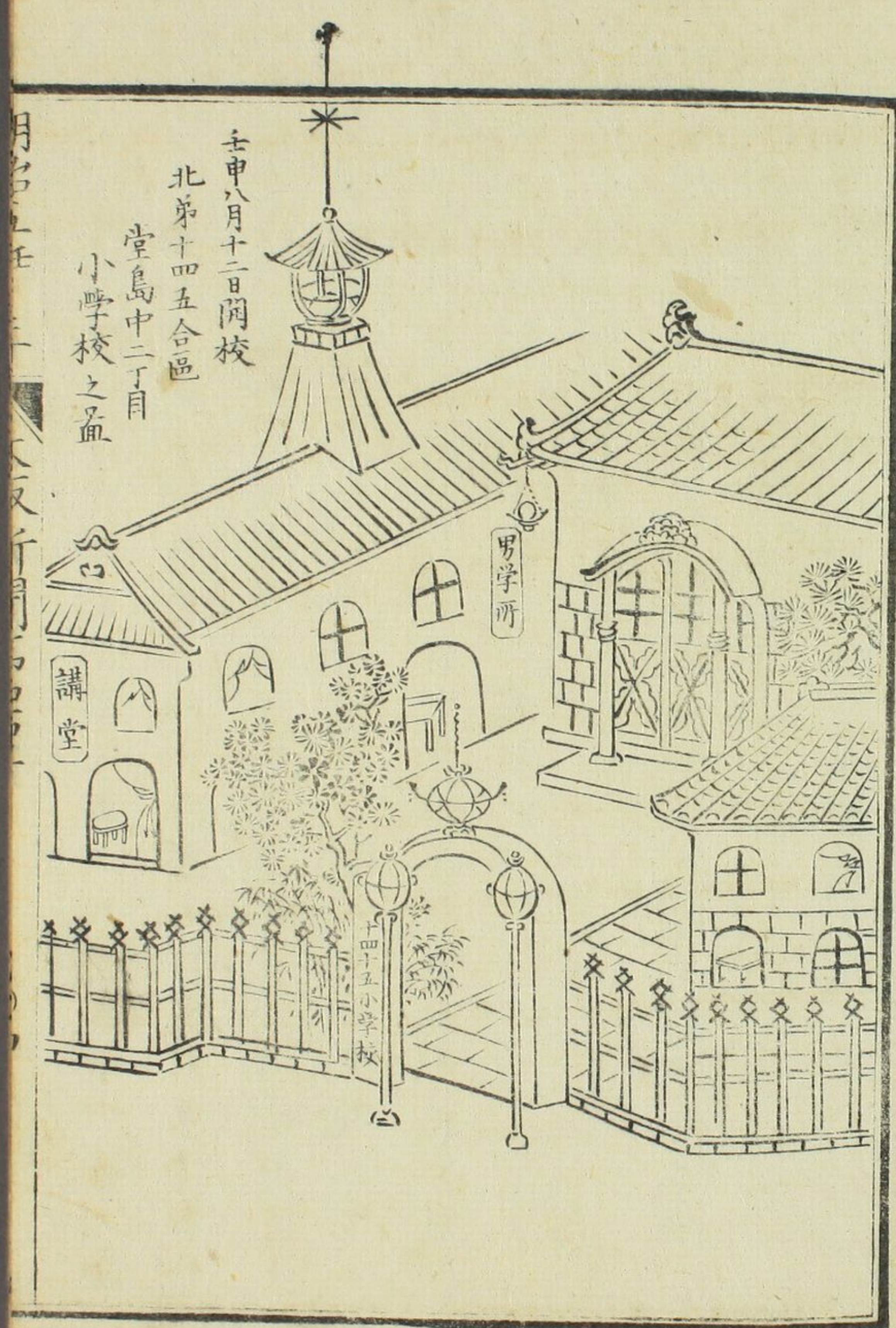
此度府廳ヲ江ノ子嶋ニ新築アル由ニテ既ニ同所住居ノ者モ昨今居ヲ移シ近日ヨリ取り掛リニ相成ル由也

○

本町四丁目ニテ當九月十日ヨリ西京本願寺別院順興寺ノ開帳アリテ嫁ヲトシノ面トイウモノ法物ノ内ニ有テ殊ノ外市中群参ス此開帳ノ席ニ添テ揖掛ノ名號ト稱スル親鸞上人真筆ノ一軸モ出スベシト噂アリシニ其品ハ開帳ノ席ニ見エス街説ニハ其持主ハ子細十ケレド中途ニ立入シモノ貸賃ヲ貪リ高謝ヲ可申受旨言掛ケシエヘ別院ノ世話方不得心ニテ此揖掛ケノ名

号ハ止メニナリシト聞ク嗚呼人心ノ末長是カ為利ヲ貪ラントスルモノアレハ又傍ラニハ財ヲ投シ涙ヲ垂レテ三拜九拜スルモノアリ怪シイ哉

○吾邦古昔大学ノ設アリ降テ州縣ノ学アリト雖モ其事終ニ寥々付ス今維新ノ時ニ際シ文運大ニ興リ各府縣ニ令ヲ布キ新ニ大中小ノ学校ヲ置玉ヘシ中ニ阪府ハ已ニ土地人口ノ模様ヲ計リ市中七十九區區毎ニ一小学校ヲ置キ其距離不遠不近造製ハ渾テ歐洲ニ擬シ学業ノ紀律ヲ正シ入費ノ繁冗ヲ省キタルカ故ニ殊之外神速ニ竣ヲ告ケ已ニ開校ニ至レル者ハ東第五區同業



壬申八月十二日開校
北弟十四五合區
堂島中二丁目
小学校之通

明治五年



十三區同第廿二區南弟七區同第十二區北弟四區同第
九區同第十三區同第十四五區同第十六區同第十七八
區西弟十區其開校式ハ知參事學務官員之二臨ムコト
前ニ記セル如シト謂フ其校ノ結構ハ左ニ其圖ヲ擧テ
其壯宏ノ概略ヲ見セシム實ニ此一舉ハ海外ニモ愧ハシサ
ル希代ノ盛業トモ謂ヘキナリ

明治五年 申年 大陽新聞第... 号

○河州牧方近村ニ豕ヲ飼養フ者アリテ此頃一疋ノ豕子ヲ産メリ然ルニ此豕兎頭ハ人面ニシテ且ツ肩胸及両手ハ人ノ如シ半躰後身ハ尾足共ニ全ク豕也甚タ奇怪ナル形容ナリシニ無間死セリトゾ此事件牧方ヨリ報知ナレドモ其村名且飼主ノ姓名ヲ詳カニセズ猶明細寫生ノ畚ヲ得テ後号ニ載セン

○揭示 拾物
奉書小紋袷羽織 博多男帶 木綿鼠紺立横縞袷
木綿紺脚半 同股引
右風呂敷包十月四日阿波堀幸橋北詰ニテ拾取届出

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ總テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓ムレドモ私ノ遺恨等ヲ以人ヲ謗リ或ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書飾シ且無根ノ流説等ニテ人ノ損害ニ關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フベシ尤社中心得道ニ紙上ニ其名ヲ記セズ上梓ノ上立ハ悉ク燒棄可申候若文中齟齬ノ事アラバ公明ノ討論ヲ速ニ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ付テ議論相生ヌルトモ當社ニハ關係致サス候

社中敬白

明治五年申年 大阪新聞 第四十五號

物價表

米	堂嶋濱	開商社商品時價	黑砂糖	四兩四十セシ
振津	十二日三系廿七セシ	酒拾駄	綿	阪上七百七十目
肥後	同日同八十五セシ	塩百俵	綿	京州八百目
筑前	同日同六十セシ	茶百斤	純銅	四十二系
水油	同日廿一系廿七セシ	鱒鱒	生糸	三十四系
		鱒鱒	昆布	八百系
		鱒鱒	寒天	三系五十セシ
		鱒鱒	本局	六百系
		鱒鱒	撰集所	
		鱒鱒	取	
		鱒鱒	次	

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ本局及ヒ撰集所ニ寄ヒ社ノ素志ヲ助ケ玉ハ事ヲ任セテ投書ハ必ス顯名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得追テ出版後ハ燒棄可申候 ○望ニヨツテ出版スル件 △詳品賣買△新店開キ △觀セモノ集會等引札 其他雅間工被露車件總テ應其望 大阪一行所ニ寄ヒ定價極廉ニテ引續可申候

隔日發兌 大阪新聞 第四十五號

明治五年申年 西曆一千八百八十七年二月十日 本月廿六日 寒暖計 五十度

○魯國皇子本月九日上官士官凡三十許人ヲ從ヒ神戸ヨリ運貨丸ニテ大坂來着朝八字比川口ヨリ上陸坂府知參事其他官負本朝服ヲ着ケ一同騎馬旅館西本願寺工誘引ナリ入門之時伶人奏樂晝十二字比出館城内ヲ一覽晡後歸館薄暮ヨリ知參事招伴饗應始ル松嶋自由亭ノ割烹ナリ其善美ヲ盡セシハ中々筆ニ尽シ難シ皇子ヲ始メ快醉淋漓大ニ調理ノ妙ヲ悦バレタルヨシ晝夜八字比ヨリ本堂ニオイテマイ手ヅマ一覽アリ堂内

月名 壬午 大阪新聞 第四十五號

黄黒又ハ紅白ニ染メ分ケタル挑燈ヲ數千懸並ヘ光輝
 彩祭所謂不夜城モ是ニ過ジ皇子隨官知參事榻ヲ連子
 東向シテ並ベリ南妓ハ北面北妓ハ南面眩装倩服左右
 ニ臚列ス既ニシテ南妓場ニ進ミ雛妓ハ舞ヒ大妓ハ歌
 フ舞フ袂ハ翩遷花ヲ飄シ歌フ曲ハ綿蠻鶯ヲ囀ズ魯人
 手ヲ打テ賞嘆セリ次ニ手ヅマ師其次ニ北妓トコレヨ
 リ代ル々々奏藝就中柳川一蝶齋小卵中ヨリ長線ヲ操
 出シ線頭ヨリ花火ヲ出ス又一卵ヨリハ双旗ヲ出シ續
 テ二生鳩ヲ出ス此時魯人又鳴掌感嘆ス結末南北ノ花
 併舞同歌壯觀爰ニ至テ極マレリ時刻ハ已ニ十一字十

リ翌十日九字出館皇子隨官知參事一齊ニ人力車ニ乘
 リ游歩ス車引ハ坂府印付ノ法皮ヲ着シ黄木綿ノ綱ヲ
 付ケ一車ヲ兩丁ニテ牽ク其迅速馬車ノ走ルカ如シ辻
 ヲハ邏卒警固取締長官馬ヲ飛シ前驅ス植木屋吉助ノ
 園ヲ踰エ高津ニ登リ天王寺ニ至リ終ニ車ヲ進メ住吉
 ニ參詣ス裏門ヨリ入り本門エ帰ルソリ橋ヲ渡ルニ及
 ンデ各々偃身膝行橋ヲ下リ相顧テ大笑ス伊丹ヤニ小
 憇アリ二字比歸館夫レヨリ角力一覽ナリ一番勝負十
 レバ忽チ了局セリ一同直ニ人力車ニ乗移リ堂前エ
 車ヲ立並ヘ寫真ヲ取ラセタリ尤隨官數人ハ騎馬ナリ

明治五年 九防新開館

四字比旅館ヲ退去川口ヨリ運貨丸ニテ神戸帰港知事
ハ神戸マテ送り行レタリ翌十一日坂府諸官員一族引
纏ヒ旅館ヲ參觀スル事ヲ許ルサレ其跡四日四大區人
民エモ拜見ヲ許サレ萬衆雜沓餘程賑々鋪キ様子ナリ
付言九日十日ハ市中檐挑灯ヲ出シ御堂近辺ハ別而
店向美々鋪飾リ立タリ

此頃京師エ行テ帰ル人ノ談ニ洛中當節僧侶ニアラズ
シテ圓顛ナル人街頭坊間ニ填滿ス驚而其故ヲ尋ルニ
是ハ此般大坂ニテ布告相成タル被髮ノ令ヲ傳覽區長

戸長等大ニ賞嘆奮起シ發令ヲ待ズ下ニオイテ申合セ
町々エ深ク説諭ニ及ヒタルニ同意ノモノ夥ク我勝ニ
ト緑髮ヲ截断スル事敝履ヲ棄ルガ如シ偕洋品店ニハ
帽ヲ山ノ如ク積ミ重子是ヲ買ヒ求ルモノ市ヲ十セリ
トイフ全体京人ハ一種速ニ善ニ遷ノ美質アリ大坂ハ
此ニ反シテ懇摯ニオサトシアリテモ被髮ヲ好マザル
モノ多シ中ニ巧黠ナルモノハ月代ヲ少シ延ベ其長ズ
ルニ随ヒ鑷ミ去リ鬚ヲ依然トシテ存シ置ケリ其心
ヲ問ハ斯ク摸稜曖昧ニ而暫ク世上ノ様子ヲ見ルナド
イフモノアリ或人はクアダナシテ被髮見ノ順慶ナリ

明治五年 九防新開館

明治五年
申年
大正新聞
第...号

後吉備州投書

小田縣支廳備中國上房郡高梁第二區加治町市民草間
屋某ト申者年来不幸ニシテ貧窶ニ打過キ日夜万苦千
辛ヨリ毎々親子夫婦喧嘩ノ声無隔断然ル処或ル日竈
上釜鳴動セシ事再三ニ及ブ是ゾ吉兆ナリト蒙昧ノ愚
民羣集シ昼夜竈前ニ於テ祝賀ト唱エ酒晏ヲ催シ三絃
歌舞ノ声喧々タリカ、ル親子夫婦不和ナル者エ天災
ゾ吉祥ノ兆ヲ賜フノ謂アラシヤ早ク一迅ノ化風吹来
ツテカ、ル頑愚等ノ面ヲ撲バ無明ノ醉モ醒テント希
望ス

後東京来信ノ抄寫

當地人力車ノ税金一月ニ一輛銀八匁ナリシガ車數日
ニ増加スルカ為メニ其税ノ總額毎月一万金ノ多ニ至
ル此税金ヲ以テ橋梁修繕ノ費ニ供シ既ニ日本橋ハ西
洋風ニ換架スヘク乃チ其橋容ハ幅ヲ廣クシ中央ニ二
條ノ欄ヲ設ケ以テ三道ト為シ其中道ハ馬車及ヒ人力
車等ヲ通シ左右ノ兩道ハ往人ト來人ヲ定ムベキノ奉
アリ右成功ニ及ヘハ通行千稠萬密タルトモ敢テ困難
セサルヘシ又江戸橋ハ東京橋ト改稱ニ為リ其橋欄ハ
日本橋ノ欄干玉簪ヲ移置スヘキノ奉アリ

ラシカシギボシ

明治五年五月廿五日
大阪新聞第百四十五号

物價表	
米	堂鳩濱
津	肥後
築前	休日
開商社商品時價	
酒拾歌	銘 四十五兩 地廻り 四十二兩
塩百俵	飛田十二系 五十五兩 アコニ系 五十二兩
茶百斤	大頭 六十五兩 上頭 五十五兩 一系 二十兩 同 二十五兩 九系 十兩
干鰯	同 二十五兩 九系 十兩
晒鱈百斤	地廻り 十六兩 登十五兩二ア
黑砂糖	山西 四十七兩
綿	金卷 四十二兩 三友 四十二兩 三十四兩
水綿	三十四兩
純銀百斤	北三兩
生糸	長布 八百系 三系 五百系
寒天	千本 六系
本局	本号 四目 書籍會社
撰集所	長堀 池濱東 青湖 堂
取	入阪 村 上 勘兵衛 西京 村 上 勘兵衛 本橋 村 上 勘兵衛 瀬石 村 上 勘兵衛 下 勘兵衛

伏テ黄ッ四万同好ノ君子何事ニコラス新説異聞ヲハ
本局及ヒ撰集明ト寄リ付テ素志ヲ助ケ玉ハ事ヲ但ニ
投書ハ心ス顯名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得也テ出版後ハ
併乘可申候 ○望ニソツテ出版スル件△諸品賣買△新店開キ
△觀セモノ集會等引札 其他世間工被露事伴結テ應其望
海版一行外三宇ニ有定價以觀處ニテ別報可申候

隔日發兌 大阪新聞 第四十六號

布令

道路修繕溝浚土地開墾其他右ニ類シ候働之爲メ懲
役人雇入差許候条雇入度者ハ左之規則承知之上其
趣徒刑場、可申出事

規則

- 一 働刻限六字ヨリ午後四字迄之事
- 一 但酷暑之節ハ四字ヨリ十二字迄
- 一 懲役人差出候節ハ為取締役員付添ハセ候事
- 一 但鋤並鋤簾等ハ持參候条用意ニ不及候事
- 一 働賃壹人分 五錢

明治五年五月二十日
西曆一千八百八十七年十月十八日
本日ハ
寒暖計
平均三度

月廿五日 大阪新聞第百四十五号

但外ニ食事之節用候湯之外食物亦都テ差出候ニ
不及候事

一懲役人共不作法之義ハ勿論品物乞請候義亦無之筈
ニ候得共万一心得違之者有之候ハ、早速付添之者
ハ可申立候事

一働方之義ニ候共懲役人ハ直々應對不相成候条用事
有之節ハ付添之者ハ可申立事

一懲役人共ハ聊之品タリトモ差遣或ハ貸與候儀決テ
不相成候事

一拾人以下之人員ハ申出候共不聞届候事

右之趣市中并市中接近之郡村ハ相達スルモノ也

壬申九月

大阪府

○當月九日魯國ノ皇子當港工着同日八字川口ヨリ上
陸西御堂迄通行アリタリ知參事ハ正服用殘ラズ騎
馬ニテ御同行ナリ尤前日ヨリ令アリテ道路ハ勿論市
中一般ニ軒提灯ヲ掲ゲ實ニ壯觀ナリ就テ熟思フニ
天皇ノ臨幸アリテ平民ニモ拜見ヲ許サレ今又魯ノ皇
子ノ通行ヲモ見ルコトヲ許サル是ヲシテ十年前ニア
ラシメバ小民駭愕シテ種々ノ惡説ヲナシ如何ナル乱
妨アラランモ計リ難シ又天顔ヲ拜スル事ハ婦女子等
ニテハ眼モ潰ル、程ニ思ヒシモ今日ニテハ辱クモ親
シク御行装ヲ拜シ亦幾日ヲモ經スシテ數万里外ノ

魯皇子ヲ見ル寔ニ風俗ノ遷換文明ノ上進驚ク可ク且
 ツ慶ハベシ近日学校等政府ヨリ厚ク御世話アリ未タ
 完備ニ至ラサレドモ追々人民学ヲ励ミ業ヲ勉ム加之
 遠カラズ開港ノ盛舉モ落成シタランニハ當府ノ開化
 如何ナラント満心歡喜ノ餘リ思ヒテ言テ秃筆ヲ漂シテ
 新聞紙ニ投ス

○富島町何某養子娘ニ姪情ヲ教ユレトモ敢テ應セサ
 ルノ新聞出タリ是ニ違ヒ本月二日南大組第八區附属
 西横堀御池橋東詰風呂屋渡世佐野石藏下婢姪奔ノ為
 ニ階ニテ縊死セリトソ是未タ教化ノ全滌セサルナラ

ニ乍去追々学校ノ舉開クルニ後ヒ此ウレイハナカル
 ベシ

○ 答投書

大坂ノ地ニ先生アリ平野町御堂ノ西学校ノ教師ナリ
 然ルニ御堂先生ハ酒ヲ好ミ色ニ耽リ坂府ノ屋敷ヲ出
 テ月給ヲ投テ青樓ニ上ル何ト教師ノ所業テアロフカ
 或曰ク酒ヲ好ミ色ニ耽ルハ教先生ニ有間敷ト雖モ酒
 ハ酒屋ヲ赦テ造酒シ色ハ青樓ヲ赦テ色ヲ賣レハ是皆
 朝廷ノ御法ハ外レズト云ベシ云々ヲ記載シタル無名
 ノ投書アリ且文中権門ニ誦諛シ親エ不孝ナドアリテ

未文ニ虚説ニ非ストアレド實否分明ナラス所謂人ノ
損害ニ關ハルコトナレバ社則ニ於テ上梓ヲ免サ、ル
ノ投書ニ付其儘燒捨申候

報告

夫レ寫真法ノ玄妙タルヤ萬里ノ隔居モ此ヲ寄贈シ
テ恰モ其人ニ對スルカ如シ忠孝ノ崇敬子孫遺像等
敢テ不可缺ノ法也其妙更ニ言可カラズ然ルニ精藥
、加減日光ノ晴暈ヲ以テ其姿矇焦ナルアリ予屢々
試験ノ上兩氣曇天ニ不拘鮮明ニ寫シ奉ル可ク候間
請フ四方寫生ヲ欲シモフノ君子光臨ヲ枉玉ハ、幸
甚々々

寫真所

大阪難波新地中筋二番丁

日新軒

守田來藏

廳聞

御届

一私義地銅商之者ニ御坐候処今曉ハツ時過面体墨刷
毛ニテエドリ鉢巻ヲ致黒着物ニ袴ヲ着シ刀ヲ拔持
候男傭人家内エ這入来リ申ニハ薩州藩之者ニテ路
用ニ差詰候ニ付金子可貸渡様申候ニ付色々相断候
得共一向聞入不申金子不差出又ハ立騒キ候ハ、可
殺旨申候付恐怖仕無搦手元ニ有合候金子取集相渡
候高左之通
一金六拾五兩三步斗 但數品取交有之
又銅貨八拾錢

右之通御座候跡ニテ心付候処全ク堅町大道板塀切
戸ヨリ忍入候儀ト奉存外ニ心當リ等無御座候右御
届仕候以上

壬申 九月廿九日

東第廿三區博労町三丁目
第廿一番屋敷
戸長 尾持利兵衛

大坂府

御廳

右ハ御訴之寫ニ有之尤前日廿八日夜子息工嫁取祝
言有之訊而廿九日ハ艸卧罷在候由

日曜日 十一月一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
十二月 七日 十四日 廿一日 廿八日

○ 廣報

楯懸ノ名号トテ親鸞聖人ノ真筆ニシテ顯如上人石山
合戰ノ節靈驗アリシ無比ノ名品ニテ普子ク世ニ傳ル
ナリ往年所々ニ於テ開帳拜禮等致シ来ルト雖トモ悉
皆贋物ニシテ其真ハ故長州藩兎玉某ノ家ニ所藏セリ
實ニ希世ノ重宝也依テ此度借受十月十八日ヨリ廿四
日迄七日ノ間拙寺ニ於テ開帳拜禮ヲ許ス有志ノ輩遠
近ヲ問ハズ願クハ来拜スベシ

大和 奈良浄土町

正覺寺

明治五年申年二月十七日

米 堂嶋濱

振津 十八日 三系半

肥後 同日 同九十二

肥前 同日 同六十

水油 同日 廿一系六

開商社商品時價

酒拾歌 銘 四十五兩 地廻り四十兩

塩百俵 無田十二系半 阿コ二十系

茶百斤 大頭六十六枚 上頭五十六枚

鰯 一系二十 同二十五 九十

黑砂糖 四兩 四十七

綿 重 阪上七百七十目 京丹八百目

本綿 州 四十二系 三十四系

純銅百斤 九三兩

昆布 八百系 三系五十

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニゴラス新説其聞アラハ
本局及ヒ撰集明工寄ヒ在ナリ素志ヲ助ケ玉ハ事ヲ任
投書ハ必ス願名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得並ニ出版後ハ
燒棄可申候 ○望ニヨツテ出版スル件 △諸品賣買△新店開キ
△觀セモ集會等引礼 △他世間ニ披露事伴總テ應其望
出版一行外三半符定價並觀覽ニテ別冊可申候

本局 本局四丁目 書籍會社
撰集所 長堀丹地濱東 青湖堂
取 大阪 町上勘女律
次 東京 本橋川瀬石丁角 村上出店

隔日發兌 大阪新聞 第四十七號

○ 投書

從來都下ノ風俗女子ノ父母如何間違ヒケンヤ諺ニ女
ハ氏無クシテ玉ノ輿ニ乗ト言フ古語アリシヲ實ニ一
般商法ノ世ト押移リタリト虽モ女子ノ父母金玉ノ腰
ニ乗セント幼少ヨリ讀書績紡紡織ノ教道ヲ捨置キ遊
技ノ糸竹歌舞ヲ殊トシ我子ヲ金錢ニ鬻カントスル是
等ノサマヨリ男女非有行媒不相知名ヲ非受ニ幣不交
不親ノ道ヲ失シ女子生長ニ随ヒ淫蕩ニ流レ劇場ニ身

明治五年申年二月十七日
西曆一千八百八十七年二月十七日
本日ハ
寒暖計
五十度

明治五年二月十七日 大阪新聞第四十七號

ヲ寄俳優ノ名ヲ知り具負ト欵唱エ彼等ノ似顔又ハ紋
印杯器物等ニ記シ翫弄シ甚シキニ至テハ密通ノ徒ア
リ誠ニ淺間敷醜態禽獸ニモ劣リシ有様方今文明開化
ノ形勢右等ノ所業萬國ニ對シ可恥ノ第一改ムヘキノ
急タリ女子ノ父母タル者此辺ヲ能々辨別シ女ノ道績
紡ハ云ニ不及素讀算筆ヲモ習ハシ玉觸ノ云シ如ク烈
女ハ不更ニ夫ノ道ヲ守ラセ真ノ玉ノ輿ニ乘ラスベト
社父母ノ本意タリ必シモ輿ト腰トノ違エ無キ様能々
注意有リタキ事トモナリ

○泉州百舌鳥耳原大山陵 仁徳天皇御陵近傍地中ヨ

リ宝劔一振黄金鑄造ノ龜一ツヲ得タリト云風聞ア
リ因テ本月五日社中ノ者大山陵尊岳ニ至リ守役池
田昇生ヨリ傳聞スル所左ノ如シ
御廟尊岡ハ方八丁ノ圓形ニシテ幅五六間ノ邕水周輪
セリ七月廿二日堺縣ノ令ニヨリ掃除ニ取カ、リ日々
取締役并人夫等登岳シ石稜杯采除ントスルニ一箇ノ
石櫃アリ怪ニテ披キ見レハ内ニハ具足類納メアリ其
余池中ヨリ劔鋒簞鏃ノ類出ル事數品ナリト云又九月
五日ニ大サ六七寸計リノ金色ナル靈龜池中ヨリ浮出
セリ人々是ヲ取揚ケ見ルニ甲ハ正ニ黄金ノ如ク光輝

月山和五社
仁徳天皇御陵近傍地中ヨ

ヲ發シ且ツ方端ハ所謂鼈甲ニテ淡黃通透セリ肚及ビ
頭尾手足ハ銀色ナリ其美麗ナル事言語ニ絶セリ因テ
衆評シカ、ル美龜ハ世ニ稀ナリ其肉ヲ拔去リ甲ヲ罾
物ニ用ヒナハ妙ナリト議シ桶ヲ以テ伏セ置キシニ暫
ラク有テ再ヒ翫弄セント桶ヲ取除ケ見ルニ有ル事ナ
シ人々不審ニ思ヒ居シニ翌旦堺縣參事登岡點檢ノ折
柄靈龜ノ噂ヲ致セシニ參事之ヲ聞テカ、ル靈龜ハ皇
國吉瑞ノ兆ナリ庶人猥ニ之ヲ翫フ勿レ再ヒ出ナハ急
キ縣廳工申出ベシ早速東京工進呈シ 天覽ニ納レ奉
ル可シト令シテ歸縣セラレシニ一字間計リ有テ池田

氏ノ膝前ニ忽然トシテ現出セリ何方ヨリ來ルヲ知ラ
ズ各奇異ノ思ヒヲナシ急キ縣廳工訴工出シニ廳ニテ
モ取敢ズ官吏出張靈龜ヲ守護シテ西京府廳迄送り同
府廳ヨリモ官吏一人守護シテ直様東京工獻呈アリシト云
又一日藤蔓ヲ伐除ント人夫四五人立懸リ居シニ忽チ
大蔓ノ如キモノ轉倒シテ人夫兩人ノ胸ニアタレリ驚
ヒテ之ヲ見ルニ其長三間計リノ蝮蛇ナリ並鱗ヲ畧ボ
見留メシニ凡三四寸許成リトゾ其余ニ又一ツノ奇談
アリ「ミサゴト云ル鳥多ク集リ栖テ時々海辺ヨリ種々
ノ生魚ヲ啄ミ來リ之ヲ岩間ニ置クコト絶エスコレ世

俗ニ所謂ルミサコノ鮓ト云エルヲ製スルナル可シ人夫等日々其魚ヲ采テ之ヲ食フカ、ル森々タル山丘ニテ鮮魚ヲ得ルモ亦奇ナリト云

○南大組第九區玉屋町吉田伊兵工倅元吉申六歳此幼童四歳ノ頃ヨリ句讀ヲ好ミ記憶聰敏衆人ヲ愕カセリ今也勸学ノ域其父母タル者愛玩ニ溺レズ早ク入学ヲサセ之ヲ励シ後年ノ美ヲ樂シムベシ

○當新聞第四十一号ニ記載セシ事件今又巨細ノ報ヲ得タリ因テ再ヒ爰ニ舉

東京靈巖嶋住居東久世内浅井情文同居松川庄兵工召仕ヒ大宮清兵工事庄助ト云フ者九月廿九日家主庄兵

工取持ノ金子三百兩盜ミ取り品川港ヨリ蒸氣夕顔艦ニ乗組ミ當地工脱走セリ庄兵工直ニ同所傳信局ニ至リ其由ヲ當地蒸氣會社ニ報ス會社ヨリ之ヲ西大區取締所ニ訴出ルニ依リ乃千邏卒ヲ使ハシ着艦スルヤ否ヤ彼賊ヲ捕縛スト云實ニ翌十月朔日午前十字也嗚呼庄助ナル者大罪ヲ犯シ一時脱走スルト虽モ天網恢々得テ遁ル可カラス然リト虽モ如此ク速カニ捕縛セシハ全ク傳信機ノ力也其機タルヤ神速ナル事弓矢ノ如ク彈丸ノ如ク電光ノ如ク響ノ声ニ應スルカ如ク然ル乎予之レヲ新聞局ニ附シ寒境ノ人ニ知ラシメントス

昨日... 申生... 大坂新開... 新開

○ 廣報

諸味^{諸味} 酒造^{酒造} 諸味の痛み直し薬

一 揚梅皮 拾分 一 上茶 廿分 一 薄荷 拾五分 一 菊花^{有甘味}

右四味木綿袋に入水壺斗二升と九升を煎し桶に移し日光灰八升入捧て

搔交^{搔交}少し休ませ上澄を濾くを汲取七八升計り諸味入能交置き廿四時

過して酒舟に掛け可然事尤舟に掛け一兩日休ませ候へ八日々段々よし

又日光灰も無之不便の地へ野山は有之候いづらの木を灰し御用ひ

可被成候酸味も取り又色も抜け日光灰より宜敷候

総て諸味よく痛有ハ諸味みて直し舟に掛り事宜一既ハ昨未年の如

造酒甘味或と酸味を醸し儘舟に掛け新酒よく直し事不宜則

新酒壯しく薬はあやかりやよく本性を失ふ也御心得有度候

今也邦内一致富強を志その際則四海兄弟也奚ぞ一法を秘して彼我

と隔く今此薬方と其業人は為知其難を救ひをけるを援けて

聊々世益の一端とん予此志多年也と雖も廣布の法を得たり

今斯く開明の域又新聞紙宇内は布散し一度此冊紙を投する時ハ

普く世に弘報を得るる開化盛進の折を得て今茲に記報す

此外くさみ抜にさみ抜さみ抜 灰抜 桶留

御執心の御方様へ遠國ふてと郵便よく御申越し可被成聊も

傳授料杯申受り候尤名所々々御認可有之候詳細書以

返紙可致候

大坂勘助嶋船津町
松島千代崎橋五丁南

官浪新七

蒙酒澄藥
開業所

月... 日... 大坂...

明治五年壬申十月廿二日
西曆一千八百七十七年十一月廿五日
本日多寒 暖計五十度

隔日發兌 大阪新聞 第四十八號

京都六十四小學校記

今上踐祚之初 聖斷出自天衷 恢復大權於一朝發 維新之政以與天下更始 訂交海外諸國 明治元年之冬 東北諸藩悉屬平定 於是 勅官司益盡其職 京都府乃僉議曰 輦轂之下 衣冠之衢 文物所萃 固為四方之表 凡施設舉行 當為天下先 令遠近有所則焉 今也 內難既定 外交日殷 使船商舶填集 港埠而強大之國 熊騰而肅視者 林然相環 方此之時 非富國何以安內 非強兵何以鎮外 兩者 國家之

月廿五日

大阪新聞

第...

見六五 申午

物價日表

米	堂鳩濱	開商社商品時價	黑砂糖	四兩 四十七
振津	廿日三系廿七	銘	四十五兩	改七 七百七十目
肥後	同日同九十二	地廻	四十四兩	京丹 八百目
筑前	同日同五十七	每田	十二系五	四十二系
水油	同日	純銅	百斤	七十三兩
茶	百斤	生糸	八百系	三系五十
鮭	百斤	昆布	三系	六十
鮫	百斤	寒天	千本	六十
鮪	百斤	本局	本局	青湖堂
鮭	百斤	撰集所	長...	村上兵衛
鮫	百斤	取	...	村上兵衛
鮪	百斤	次	...	村上兵衛

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説新聞アラハ本局及ヒ撰集所工寄ヒ社中ノ素志ヲ助ケ至ハハ事ヲ任ニ投書ハ必ス顯名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得追テ出版後ハ燒棄可申候 ○望ニヨッテ出版スル件 △諸品賣買△新店開キ △謝セモノ集會等引札 其他諸間工被露事件總テ懸美登 海版一行外三身三身定價並價並價...

本局 本局 撰集所 取 次

所急大謨也夫富國之基在厚民生強兵之本在正風俗正風俗在崇禮義厚民生在長工藝長工藝崇禮義在開智識開智識在務學術然則方今地方之務莫急於立學校部內市坊分畫六十六區宜區立一校令童男女皆入學焉且用為市民公會之所而申法宜令問苦察情及養老旌善之典賑窮貸乏之方警奸禁暴之虞以至種痘等之為亦皆於此則立一校而衆事舉甚便即具狀奏請制可二年冬校成上京第二十八區與第二十九區共之下京第二十二區與第三十三區共之共六十四校命曰小學校土木之費一校率千金官與民平分出之其屬上京第十一區第二十五

區第二十六區第二十七區者盡出於民蓋富民所損貲也學制有講師有教師童子入學者授以句讀書數及開說義理府員以春秋臨試其業學資賦於民每戶歲若干錢其他以資施行一如所議民皆便之而生徒之衆每校不下三百人挾書齋筆者絡繹巷衢誦讀之聲達于四境可謂盛矣知事長谷信篤大參事松田道之楨邨正直少叅事藤村信郷使為忠記之且曰校之立於茲僅三年今秋試業就上試者六百十餘人就特試者百三十餘人其俊秀擢入中學者七人雖就下試者亦進退有法應對有儀秩然可觀何得才之多也則百工技藝之事日進禮義廉讓之行月成小則經產

明治五年申年 大防新聞第百號

業理身家大則興公益化衆人將使天下翕然則之全美全盛超越萬國可翹足而羨也而曰盛美之原自京都始則都民不獨享幸福而已於國家富強之宏圖亦與有力焉雖然非以輦下之民而際維新之隆安能如此豈可弗感喜奮勵以成其功乎哉其書斯意為忠不辭退為之記

明治四年歲次辛未冬十一月上浣

從七位守京都府典事西尾為忠謹撰

熊谷直孝謹書

河津祐度刻時年九十三

○去ル 天長節諸區祝賀ノ賑ヒテ盡セシ中ニ西大組第拾四區上通

一丁目下通二丁目ノ少年共集議シ一戸ノ火ノ用心屯所ヲ設ケ一晝夜祝盃ヲ催シ更々其區内ヲ火用心ト發聲シテ巡廻セリトゾ是又賑祝ノ内ニモヨク布令ノ旨ヲ注意セリト謂ツベシ

○ 投書

予嘗テ聞ク神ハ心也此語至言ト謂フ可カラズ然レトモ亦見ル所アル乎今夫レ我皇國有神以テ敬セサル可ケンヤ然リト虽トモ心行不正徒ニ之ニ諂事シ僥倖ヲ求ム猶ヲ目ヲ掩フテ雀ヲ捕フニ異ナラン然ルニ當世神ヲ祭ルヤ禮敬ヲ後ニシテ私欲ヲ先キニシ一厘ノ賽錢以テ百年ノ幸福ヲ求メ両手ヲ合十以テ万金ヲ握ラ

明治五年申年 大反新聞第百號

日活五申年 大防新聞第幾号 七三

ニト欲ス若シ神ヲシテ言フ有ラ使メハ其面ニ唾シテ直
ニ喝之ノミ若シ神ヲシテ知ル無カラ使ハ誓言亦何益
ゾ况ヤ毎朝ノ塩絶^{シラ}期年ノ食絶^モ甚シキハ七圓ニ歩ノ祈
禱ニ至ル何ソ無智ノ甚シキヤ予此意ヲ述テ世ノ神ヲ
信スル人ニ告ク或ハ怫然怒ル者アリ是盛都ノ田舎翁
未夕開化ノ域ニ至ラズ所謂井蛙海ヲ語ルヘカラサル
者乎噫焉

○予過日四ッ橋茶店ニテ休憩ノ折柄誰カ家ノ小兒五六
才斗ノ者炭屋橋ノ欄干外エ這出遊ブニ其ノ危キコト
累卵ヨリモハルカナリ然ルニ橋ヲ通行ノ人々是ヲ見

ナカラニ過通ス予之ヲ見テ驚キ駈行ントスル処エ巡
邏通リ合セ急キ走り進テ忽チ小兒ヲ抱キトリ下駄ヲ
ハカセ親許エ帰ルベキ由懇口ニ申諭シ家ニ歸ヘセシ
ヲ見テ獨リ心ニ歎賞シナカラ帰宅セリ思フニ総テ浪
花ノ人ハ利ヲ覺^キフノ道ヲ知テ仁義教育ノ道ヲ知ラズ
人ノ危難ヲ見レドモ知ラ又顔スル奚ゾ心ノ浅マレキ
哉又其父母タル者モカ、ル無心ノ幼兒ヲ橋上岸端ニ
放チテ安居セルハ則仁義教育ヲ知ラサルニアラスヤ
加之取締邏卒ハ赤日寒風モ厭ナク不断巡行アルヲ省
ミズ却テ怨望スル者アル由以外ノ事ナリ前件ノ小兒

月名五五 大反折開第幾号 四

モ巡邏ノ十カツセバ忽チ黄泉ノ水ヲ吞ヨリ他ナシ故
ニ市中ノ人民一般厚キ御趣意ヲ奉戴シ早ク五常兼備
ノ府体トナラム事ヲ希望ス

○拾物揭示

- 一 雪降大羅紗合羽十月四日本町橋上ニテ
 - 一 受取帳十月五日清水町ニテ
 - 一 金壺兩十月六日鳴町ニテ
 - 一 新貨五錢十月七日難波新地ニテ
- 右拾ヒ取届出候者有之二付心當之者ハ當府工可申出
者也

大坂府

○ 從東京来信ノ寫

新橋横濱間ノ鐵道御開業ナリシ以來其蒸氣車ノ迅速
ナル事實ニ推思セシヨリモ盛ナリ其往来運輸ノ便十
ル事今更ラ言ニ及ハス就テハ大阪西京等ノ人々ヲシ
テ之ヲ觀セ之ニ乘セ且其兩所間ノ鐵道モ逐日ニ成功
アラニ事ヲ冀望ス且聞ク横濱西京間ニモ鐵道御開業
ノ御企アリ又西京ヨリ長崎マテ東京ヨリ奥州青森マ
テノ鐵道設置ノ願人アリシカ其旨御採用ナリシトゾ
○頃日来物價各下落シ衆庶大ニ喜悅セリ

明治西曆一千八百八十七年壬申年十月廿五日
 本日公
 寒暖計
 五十度

見方五申年
 大阪新聞

物價表		開商社商品時價	
米	堂嶋濱	黒砂糖	四兩 四十七
振津	廿二日 三系廿三	綿	改七 七百七十目 京八 八百目
肥後	同日 同九十七	水綿	四十二系 三十四系
筑前	同日 同五十七	純銅	百斤 九三兩
水油	同日 廿九十五	生糸	八百系 三系五十
茶	百斤 大頭 六十六 上頭 五十六 四十五	寒天	六角 六
酒	拾貳 銘 四十五兩 地廻り 四十四兩	本局	本局 長春 青湖堂
鹽	百俵 阿田 十二系 アコ 二十系	撰集所	撰集所 長春 青湖堂
蠶繭	百斤 一系 二十 同 二十五	取入	取入 長春 青湖堂
晒繭	百斤 地廻り 十六兩 登十五兩二ア	大阪	大阪 長春 青湖堂

隔日發兌 大阪新聞 第四十九號

○本月二日ヨリ各區小學校ニ於テタ第六字ヨリ第九字ニ至マテ巡講コレアリ区内ノ男女老少ハ勿論隣區ヨリモ提携輻湊シ聽聞スル者大凡千有餘人ニ及ベリ而シテ其學校ノ結構ヲ觀レハ輪奐ノ美規模ノ大疊中ノ規則童子ノ行儀流石ハ都會ノ名ヲ恥ツカシメズ講師經義ニ據テ當世ノ要務 御布令ノ旨趣ヲ明晰シ矇昧ノ徒ヲシテ開化ニ進マシムル様ニ懇々説諭ス其日用ノ急務ニ適スルヤ亦佛氏法談ノ企テ及フヘキコト

明治五年
 大阪新聞

ニ非ス參詣ノ徒皆共ニ悦服隨喜セサルハナシ彼佛氏ノ徒ニ空理ヲ説タモ尚聽聞セル者多カリシニ況テ之ニ引替ヘコノ講釋ハ一言半句ト雖皆本真ノ實理上ハ君父ニ仕ヘ下ハ子弟ヲ恤ミ身ヲ愛シ人ニ接シ人タル者ノ務ムヘキ常行ヲ説諭シ身ヲ修メ家ヲ齊ヘ坐十カラ安樂世界ニ住マシムトノ一層深キ教訓ナレハ願クハ其度毎ニ必ラス其席ニ連リタキ者也

○從吉備報知

小田縣支廳備中國上房郡高梁ニ於テ郷宿職ノ者數十戸アリ然ル処穢多平民ニ御取立ニ相成候ニ付テハ是迄之百姓尚戸長タル者ニ至ル迄悉同等ノ定宿被仰付一同迷惑ニ思ヒ色々歎出候得共御政体ニ悖リ候故御抹用無之無余儀此節郷宿一同出金ニ及ヒ別一家ノ大軒ヲ設ケ新民ノ宿開店致候由ナリ

○

神宮神号太字自今大字可相用御布告之趣致承知候右ハ近世神号宮号相混シ都テ太ノ字相用候ニ付御釐正之御儀ト存候古来ヨリ神号ニハ大神或ハ大御神ト書シ奉リ宮号ニハ太ノ字ヲ用ラル、ハ無上至尊ノ儀ニテ太上皇皇太后皇太子太政官等ノ太ノ字ト同義ニ有

明治五年 大正新聞 第五號

之候條宮号ニハ太ノ字相用神号ニハ御布告之通大ノ字相用可申候此段為念御届申候也

壬申九月廿三日

神宮少宮司浦田長民
神宮大宮司北小路隨光

嵯峨教部卿殿
完戸教部大輔殿
黒田教部少輔殿

○ 東京來信寫書

當地増上寺ノ黒佛尊開帳アリシカ大ニ其時ヲ得タリ
爰ニ賑贍ノ景况ヲ一ニ掲ルニ先ツ本堂ノ前ニハ諸街
ノ信黨者ヨリ諸種ノ装置セル殊物珍品ヲ献シテ數多

ノ鴻大ナル規標表準ヲ出シ其外山内ニハ寸地ヲ爭テ
酒肆茶店等ノ假屋ヲ建テ寺中ニハ各門ヲ撰テ馬上
優及ヒ支那ノ韓父者等種々ノ壯觀ヲ設ケリ實ニ
士女ノ群集其幾千萬ナルヲ知ルベカラス
又去月招魂社ノ大祭ニ其廿五日ニハ競馬アリ廿六七
ノ兩日ニハ角力アリシカ亦夕士女蟻集蜂群セリ

○
府内ノ小学校ハ富區ハトモアレ其建営花美盛大ニス
ギタリワスカニ一ヶ月四厘宛ノ坪掛リ入用錢サエ其
末丁ニテハ伍長ヨリ取替ル事モ有由ナリ區毎ニ小学

明治五年 大正新聞 第五號

校入費金貳千圓ヨリ三千圓余也トテ裏家住ノ其日稼ノ者ニ一圓半圓ノ出金ヲ戸長ヨリ申付ル貧民怨ンテ学校ノ廢止ヲ心ニ願フ学校結構ナリトテ学フ者上達早キニアラズ貧民ノ貨ヲ強テ出サシメ怨ノ含金ヲ以テ立派ニ建堂セヨトノ御下知モ有ルベカラズ上ハ下ヲ憐ミ玉フ事ハ云ハテモ知レタコトナリ此建堂ハ甲ノ區ハ乙ノ區ノ建堂ニ負シ乙ハ甲ニ衰シト其區ノ長同志カマケヌタマシイヲ出シテ其區々々ノ貧民有事ヲ心ニ懸ケザル仕方也今橋御靈筋ノ山片氏ノ居宅小學校ニ為リ是其區長大才ト云ベシ右様ノ富家衆合ノ

區テサヘ如此況ヤ貧區ニヲイテヲヤ

南大區十一區問屋町

泉原與兵五

右投書ノ儘記ス

○ 投書

或一書生商人ニ對シ話スヲ聞クニ近頃通信ノ便利ヲ口實トシ莫大ノ費用ヲ不顧シテ傳信機ノ設ケアリ予カ寓居ノ町ハ線路ニシテ朝夕空ヲ望ミ見ルニ未タ一篇ノ信書線路ヲ傳ヒ通リシヲ見ス是ハ畢竟官吏私利ヲ逞^{タカシム}セン為斯ル無益ノ高柱長線ヲ設ケシモノナルベシ願ハ是ヲ廢シ西洋ノ「テレカララ」ヲ設ケアラハ愈通信自在ナラント商人微笑シ返ス辞モナク黙去セリ

○ 御披露

開化日進ノ秋翻譯物ノ讀書ハ各國ノ事情ヲ知ルノ捷徑開智窮
理ノ足代タレハ涉獵セスハ有ヘカラスサレハ右ノ書類ヲ廉價ニテ貸本
ニ致シ過日開店候処追日ノ幸福怡悦ニ余リ候依テ今一層勉勵シ
近村近國迄モ相弘メント欲ス庶幾ハ四方ノ好子博ク報知ヲ助
ケタマヒ億民ト俱ニ文明ノ域ニ入玉ハン事ヲ祈

野店規則

貸本品相當ノ敷金申請候本御返シノ節
ハ速ニ返進仕候尤證券差上置候

塩町三休橋北へ入東側 三木屋事

山本與助



布令

市中夜番之報鼓刻限並ニ打數間々不都合有之無益之贅物ナ
ルノミナラス却而入ノ惑ヲ生シ候事不少全体時辰ノ報告ハ萬
人ノ信ヲ取り約ヲ躡ム肝要事件ナレバ確一ノ方法取定メ追々
可及布達差向處一先諸町無益ノ夜番相廢シ其費ヲ以て
工玻璃燈臺取設ケ候様可致通路ノ燈輝ハ第一諸人夜行之
倚頼ト相成リ且ハ巡邏諦察之便ヲ得竊盜伏匿ノ患ヲ
去ル有益不一方事ニ付於各區申合早々可致其處置事
右之趣市中無洩相達ルモノ也

壬申 十月 大阪府権知事渡邊昇

明治五年五月廿六日

米 堂嶋濱

振津

肥後

筑前

物價表

元商社
水油石

開商社商品時價

酒拾駄

塩百俵

茶百斤

干鰯

晒鱈

銘 四十五兩
地廻り四下兩

每田十二系五
ノコ二十系

大頭 六十五
頭 五十六
上 四十五

同 二十五
九十五

地廻り十六兩
登十五兩二ア

黒砂糖

綿

水綿

純綿

生糸

寒天

改し七百七十目
京丹八百目

四十二系
三十四系

九三兩

八百系
三百五十系

六系

本局 本局
書籍會社

撰集所 長野川池濱
青湖堂

取 大阪 村上勘兵衛
次 東京 村上勘兵衛

隔日發兌 大阪新聞 第五十號

布令

人身賣買嚴禁之儀別紙之通被 仰出候ニ付而ハ從來
召抱置候年季奉公人ハ速ニ夫々へ可差返ハ勿論人ノ
子女ヲ金談上ヨリ養女ノ名目ニシ娼妓藝子ノ業ヲ
十サシムル者其實際上ハ全ク人身賣買ニ相當リ候儀
ニ付從前今後堅ク令禁止候条右等ノ類娼妓藝妓之業
早速相止メ其俵養育イタシ置欵又ハ親元へ差返候欵
何分之所分イタシ年季奉公人共來ル廿五日限親元へ
引渡先方之請取證書ヲ以可届出候右ニ付兼而相渡置
候鑑札同廿日限上納可致候此般被 仰出之廉々並ニ

明治五年五月廿六日
壬申年二月十日
西曆一千八百八十七年
本月八日
寒暖計
四十度

明治五年五月廿六日

前條之趣能々相辨へ夫々可及處置不心得之者於有之
ハ嚴重咎方可申付候尚今後當人ノ望ニヨリ遊女藝
妓等ノ業相働度モノハ追而何分之規則可相達候事
右之趣諸遊所へ相達候条為心得管内無洩相達モノ也
壬申十月 大阪府推知事渡邊昇

人身ヲ賣買致シ終身又ハ年期ヲ限リ其主人ノ存意
ニ任セ虐使致シ候ハ人倫ニ背キ有マシキ事ニ付古
來制禁之處從來年期奉公等種々ノ名目ヲ以テ奉公
住為致其實賣買同様ノ所業ニ至以之外之事ニ付自
今可為嚴禁事

一農工商ノ諸業習熟ノ為メ弟子奉公為致候儀ハ勝手
ニ候へ共年限滿七年ニ過グ可カラザル事
但双方和談ヲ以テ更ニ期ヲ延ルハ勝手タルベキ事

一平常ノ奉公人ハ一ケ年宛タルヘシ尤奉公取續候者ハ
證文可相改事

一娼妓藝妓等年季奉公人一切解放可致右ニ付テノ貸借
訴訟総而不取上候事

右之通被定候条此度可相守事

壬申
十月二日

太政官

○ 投書

僕主用有テ豊前小倉工下向在留中九月下旬同國京都
郡豊津ト云所工使者ニ叅リシニ其路次濱町村ト云所
ヲ通行セシニ或ル家ノ門口ニ孝婦カツト大字ニ書シ
有ル故僕奇特ノ事ニ思ヒ直ニ其隣家ノ茶店ニ入家刀

自ニ右孝婦ノ行状ヲ尋問セシニ右カツ事効ニシテ母ニ離レ父ニ事ルコト至孝ナリ且仁慈ノ意厚ク孤獨貧民ヲ見テハ財ヲ擲テ之ヲ救助シ聊カ其身ヲ奢ラズ唯父ニ孝養スルヲ専務トス因テ旧領主小笠原侯ノ聞ニ達シ其孝ニシテ且仁ナルヲ感譽有テ褒金ヲ賜ルコト兩三度ニ及ベリ其後八ヶ年前其ノ父死去セリカツ事ハ當申五十四才ニテ益篤厚仁恤ノ聞工有リトゾ僕思フニ斯ル孝婦ニ面談セバ實地勸善ノ話モ多カラント思ヒ其意ヲ家婦ニ通シテ對面セシ事ヲ頼ミシニ折節農事ニ他出ノ由ニテ遺憾限リナシト虽モ空シク經過

セリ斯ル孝婦モ其名僻地ニ埋モレテ世ニ知ル人ノ稀ナルハ残念ナリ且方今文化ニ進歩スル時勢ニ當リ孝婦ノ名草木ト共ニ朽千果ニコトヲ惜ム且世人ノ子タル者ノ^{テホ}龜鑑トモ成ラバ僕ガ素志之ニ過ズト見聞之事實ヲ斯ニ誌シテ以新聞紙ニ投ス

○ 南大組第十一區問屋町ノ泉原與兵衛先生ニ申マス先日新聞紙ニテ一見イタシマシタガ先生ニハ府下小学建校ハ御氣ニ適ハヌト相見え出金ノコトニ頗ル下情御洞察ノ御明論至極感腹致シマシタ成程其日稼ノ者

明治五十二年 九月 陸奥 第五号

二一圓半圓ノ建校入費ヲ割付ケ花美盛大ニスルニハ
 及バヌトハ通情愚俗ノ耳ニ入り易キ尤ラシキ様ナレ
 ト乍^{ハカリ}憚^{ホシ}先生ニハ其一ヲ知テ其二ヲ知り玉ハ又真ノ下
 情ハ御存シナキ様ニ思ハレマス如何トナレハ府下ノ
 習俗^{ナラレ}トシテ裏借家住居ノ者ニテモ女兒アレハ必ス三
 味線舞曲等ノ遊藝ヲ教^ユ時トシテハヤレ月^サ浚^サエダノ
 舞^ヒ浚^エダノ^ト迎^ラ世間ニ借金シテモ花美ヲ飾^カリ又芝居
 ガハジマレバ一度ハ必ス行クコト、シ或ハ四季折々
 ノ物見遊山或ハ佛事開帳講中ノ月掛錢ナド無益ノ金
 ヲ投スルハ一圓半圓ノ費エデハコザリマスマイ此建

校ノ出金ハ右ノ如キ帝ニ世ニ益ナキノミナラズ却テ
 風俗ニ害ニ其兎ヲシテ放蕩淫惰ノ道ヲ教^ユ産ヲ失ヒ
 家ヲ破ルノ禍ヲ来クスノ種ヲ蒔^キ付ルコト、ハ天地懸
 隔ノ相違アリテ學問ノ主意ハ上ハ富強ノ一端ヲ助ク
 奉^リ下ハ一家一身ヲ修メ産ヲ興シ業ヲ盛ニスル財本
 タル、道ヲ教^ユル学校ナレバ是ヲ警^テハ他日ノ
 財ヲ得ンガ為田畠ニ種ヲ蒔^キ付ケ置モ同一理ニシテ
 自己ノ福利ヲ来タスノ財本ナレバ強テ出サシムルト
 モ左程ノ妨ケハゴザリマスマイ又学校結構ナリトテ
 学フモノ上達早キニ非ストハトノダ時代違ヒノ御論

ニテ前ニモ述ベマシク如ク学問ハ家ヲ興シ業ヲ昌ニ
 スルノ智識ヲ研キ立ル為ニ設クルモノナレバ今日ハ
 裏借家住居ノ子弟ナルモ智識ヲ研キ業ヲ精クシ他日
 ハ表通りニ於テ三階ヤ四階造リノ居宅ヲモ建築スル
 有富ノ人間ニ取立ント教ユル学校デコザルサスレバ
 花美鴻大ノ学校ナレバ自カラ学童ノ規模モ随テ鴻大
 ニ成育スルノ理ガゴザリマシテ鉢植ニ「アラフ」ノ竿ニ
 ナル水ヤ井戸ノ中ニ大魚カ育チマシタ例シハコザリ
 マセ又宝曆時代ノ学者先生ガ世人ノ戒メニ人ハ質素
 儉約ヲ旨トシ必ス花美ノ驕リヲナス勿レ家ハ雨露マ

風サヘ凌ゲハヨシ食物ハ腹一満チサヘスレハヨシ衣
 服ハ寒サヲ防ゲハヨシト先生ニハ其御流議ガ御得意
 ト思ハレマス学校モ学フ場所サヘアレバヨシ花美盛
 大ニハ及バヌトナラハ燒失跡ノ地面ニ床ヲ張り屋根
 ハ有リ合セノ藁^{ワラ}ブキニテ雨露ヲ凌キ困ハ杉ノ皮ヤ荒
 板ニテ風ヲ防グベシマダモ花美ト云コトナレバ地面
 ニハ藁^{ワラ}筵^シヲ敷キ困モ藁^{ワラ}筵^シニテ濟^ススモヨカラシサスレ
 バ二銭カ三銭ノ出金ニテ整^トフベシマダモ簡易ヲ旨ト
 セハ学校ヲ止メニスベシ一銭ノ出金ナクテ相濟^ハベシ
 右投書ノ終記ス

明治五年壬申十一月廿七日 西曆一千八百八十七年十一月廿七日
 本日 寒暖計 四十度

隔日發兌 大阪新聞 第五千號

當新聞十八号ニ記ス和蘭國水理家ワントルーン水津安
 治兩川口水利ノ得失海底ノ淺深繫泊ノ利害等精細ニ
 測量試驗シ竟ニ天保山沖ニ新港營築ヲ見居内港ヲ
 堂嶋川ニ堀蒸氣大船モ浪華橋マデ自在ニ入込マシム
 ル目論見ト云彼和蘭人ハ當節御用相濟帰京セリ此大
 業不日ニ相始ルベク成就ノ日ハ萬杓蟻来千擋蠅聚浪
 華ノ繁昌目ヲ拭フテ待ツベシ

明治五年十一月廿七日

物價表

米	堂嶋濱	開商社商品時價	黑砂糖	四兩四十文
榎津	廿五三系廿七文	酒拾貳	綿	改七百七十目 永心八百目
肥後	同日同廿七文	塩	水綿	四十二系 三十四系
筑前	同日同五十貳文	茶	純銀	九三兩
水油	同日廿壹文廿七文	鰯	昆布	八百系 二系五千文
		鰯	寒天	六系
		鰯	本局	書籍會社
		鰯	撰集所	青湖堂
		鰯	取	西京
		鰯	次	下村

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ
 本局及ヒ撰集所ニ寄リ社中ノ素志ヲ助ケ至ハハ事ヲ任
 投書ハ必ス署名ニテ可被道尤モ是社ノ心得道ヲ出後ハ
 燒棄可申候 望ニヨツテ出板スル件 諸君賣買ノ新在陸
 △觀テモ集會等引札 大他區間ニ被撰集所ニ寄リ
 大阪一行所ニ寄リ被撰集所ニ寄リ

南大組第拾區長堀橋筋一丁目
依田利兵衛倅

利助
申廿二才

其方 儀父利兵衛ハ水綿商ヒヲ以渡世イタシ居候処
十ヶ年前ヨリ眼病相煩テ商業難営終ニ盲人ト相成母
ハ多病ニテ利兵衛介抱ニ日ヲ送り其上最前類焼ニ逢
暮シ方難澁ノ処自身ハ節儉ヲ專ラニシテ商業出精平
日兩親ヲ大切ニ養育シ又或時ハ父ノ他出ニ付添鬱ヲ
慰ノ幼年ノ妹ニハ慈愛ヲ加ヘ家内睦敷終ニ家産ヲ恢
復シ始終兩親ニ仕ヘ方宜敷神妙之至ニ候為褒美金ニ
圓遣之候事

土申

十月十七日

布令

高知縣管下土州土佐郡八百屋町

藤村屋清十郎手代ニテ生國周州安藝郡

田野浦北町佐渡屋龜吉事

富崎喜兵衛

人相書

- 一年齡三十四歲計
- 一脊低ク中肉
- 一丸顔ニテ頬スボリ
- 一色赤黒ク鼻筋通り
- 一眉毛耳口常躰
- 一左右不知眼之下欬鼻之脇ニ小サキアザ欬ホク口有之

酉鬼

明治五年
大坂新開

右之者儀去ル未十二月九日大坂府下道修町羽州屋久
右工門へ葉茶賣拂之約定イタシ候ニ付同人手代和助
右代金貳千七百七十兩喜兵衛止宿先へ持參致候處同人
儀及強談終ニ右金高奪取逃去候ニ付各地方官上於テ嚴
重遂搜索可申出旨司法省ヨリ達有之候間取押へ申出ニ
於テハ此度褒美可遣候此旨管内無洩相達モノ也

壬申十月

大阪府推知事渡邊昇

○ 投書

或ル医師ノ曰密柑ガ赤フナレバ医者ガ青クナルト云
諺モ今年ハ夏ヨリ青クナリテ居ルナリト云フ其子細
ヲ尋ヌルニ當夏裸體袒裼ヲ禁スルノ御世話行届キ又
中暑豫防法ノ御施行ナトニ依リ秋ニ至リ痢疾時疫ノ
者至テ少ナキ故ナリトゾ

醫門閑寂 胾臺堆埃 藥種釀醅 生乾鼻下

又或近村ノ里長當夏怠リテ裸袒ノ者ヲ不制ヨリ其項
ハ小前ノ百姓共大キニ悦ヒ居タルヨシ當今ニ至リテ
ハ痢疫ノモノ許多ニシテ死人日ニ十ヲ以テ筭フトカ
ヤ實ニ可憫可憎ノ族十ヲスヤ市中ニ於テモ赤裸袒裼
ノ者巡邏卒ニ呵ラル、トキハ仇讐ノ如ク思ヒシモ方
今ニ至リテハ御仁政ノ厚惠ヲ發明貫徹シ難有思ヒ歎
話絶ユル無シトゾ

○ 投書

被髮有益ノ布告アリテ府下一般感悟シ逐日散髮ノ風態ト相成ル然ルニ未タ因循シテ半髮ノ舊風ヲ堅守シ居ルモノアリ其形勢壯少年輩ハ早ク剪髮洋装ノ風ニ習ハント望意盛ニナレドモ老分ノ徒ニ憚リ其指揮ヲ待事一日千秋ノ思ヒタリ又其老分ノ意中ヲ推スルニ開化日進散髮有益等ノ開悟至ラヌニハアラズト虽モ浪花ノ弊風トシテ彼レガナラバ我レモナル可シ誰レヨリ先ニ洋風トナルハ恥ツカハシ府下一般トナラバ其時ナル可シナトト思ヒ苦シ居ル風也抑散髮ハ獨リ

身體保護ノ為ノミナラズ開化注目奮發決心ノ先驅タリ一日ノ猶豫ハ一年ノ失タリ今日漸ハスシテ来日アリ今年開ケズシテ来年アリト因テ諸工商共當府下因循ノ醜稱ヲ執レリ冀クハ官コノ下情賢察ヲ玉ヒ五十才以下ハ半髮嚴禁五十才以上冠雪枯艸ヲ愧ルノ徒ハ随意タル可シノ布告アラバ衆庶ノ踟躕忽チ決心ス可シト希望ス
因ニ云散髮トイヘトモ方今一樣ナラズ是又着服諸共ニ定則アリタキナリ

月刊五 申年 第六期 附録 第五号

廣告

會社辨講釋

近刻

全二冊

加藤祐一先生口授 積玉圃主人聞書

此書と諸商社諸機械製造の商社バンク貸附會社等の取建方願立の手續取扱の定法利益の大概等西洋各國の制限方法に依て之れを刊行せられたる會社辨の講釋として加藤先生の説くは、俗談平話を以て筆記し、そのあきも兒童といふとも讀み易く會社の事と心得るゝを此書の中とす。書名

賣弘 書籍會社

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始ノ然テ世ニ益アル事ニテ自然勤善懲惡ノ旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓スレドモ私ノ遺恨等ヲ以テ人ヲ謗リ或ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書節ニ且無根ノ流説等ニテ人ノ損害ニ關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フベシ尤社中心得迄ニ紙上ニ其名ヲ記セズ上梓ノ上ニハ悉ク燒棄可申候若文中粗語ノ事ヲラバ公明ノ討論ヲ述べ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ然レテ投書ニ目一議論相生スルトモ當社ニハ關係致サズ候

社中敬白

月刊五 申年 第六期 附録 第五号

明治西曆一千八百八十七年十一月廿三日
 壬申年十月廿三日
 本日本日
 寒暖計
 三六度

明治五年十一月廿三日

米 堂鳩澹 関商社商品時價

振津 廿日三系廿一セ 酒 拾駄
 地廻り四一 向
 糸 七百七十目
 糸心 八百目

肥後 同 同九十七セ
 塩 百俵
 糸 四十二系
 糸 二十四系

筑前 同 同平二セ
 茶 百斤
 糸 五十六枚
 糸 四十五枚
 純銀 百斤 九三兩

永油 同 廿一系十セ
 晒 百斤
 地廻り十六兩
 登十五兩二ア
 寒天 六角
 糸 八百系
 糸 五百系

伏ヲ冀フ四方同好ノ君子何事ニコラス新説新聞ヲハ
 本局及ヒ撰集所ト寄ヒ付テ素志ヲ助ケ玉ハハ事ヲ進メ
 投票ハ心入顯名ニテ可被遣尤是社ノ心得道ニ出被候ハ
 殊棄可申候 ○望ニヨリ出被スル件 △諸君賣買△新店開キ
 △觀セモ集會等引礼 △此世間ニ被露者何れニ應其宜
 本局 幸三丁目
 撰集所 長坂池濱東
 取 八坂 明
 次 四京 村上 勘兵衛
 下 村 上 出 店

隔日 發兌 大阪新聞 第五十二號

布令

琉球藩王尚泰自今一等官ノ取扱タルベキ旨被 仰出
 候条此旨相達候事

壬申 九月廿九日 太政官

右之通被 仰出候条管内無洩相達ルモノ也
 壬申 十月 大阪府推知事渡邊昇

○魯國ノ皇子當府解纜ノ後四民ニ旅館拜見差許サレ

月台五十五号 大反新聞第五十三号

ル処諸人群集シ門前蟻附蠅聚髮ヲ容ル、ノ間モナク
出張ノ巡邏卒是ヲ制スト雖トモ混乱治リ難ク門扉ヲ
鎖サントスレバ押破ラントノ勢ナリ老幼殆ント困難
ノ折柄大區長某出張此有様ヲ見ヤ否直ニ繩數筋ヲ以
隔分拆木合番順次繰込ノ指揮アリシニ瞬息ノ間ニ靜
リ各蹂躪ノ憂ナク拜見スル事ヲ得タリト云

○ 先般司法推判事玉乃氏エ疵為負タル服部喜平次ナル
モノ此般斬罪ニ處セラレタル旨新聞雜誌ニ記載セリ

玉造リ真田山ノ辺ニ主夜神ト云アリ此神ヲ信仰スレ
バ盜難ヲ免カル、トテ月ノ朔望ヲ祭日トナシ參詣ノ
者群ヲ十セリ然ルニ此神如何ナルニヤ漸々廢亡スル
事五更ノ燈火ニ似タリ其所以ヲ尋ルニ方今邏卒ト云
エル神使廢民ノ信仰ヲ待タス自ラ市街ヲ巡廻シ以テ
人心ノ善惡ヲタ、シ勉テ盜賊其他ノ暴害ヲ除ケリ因
テ謂フニ主夜神ノ廢衰スル事言ヲ不待明ナリ所謂正
法ニ不思儀無シノ一語ハ古人我ヲ欺サルモノナル乎
○ 當節人力車ニテ通行人怪我過ナセシ由所々ニ噂サア

明治二十二年六月廿四日

リ其一ニヲ奉ルニ九月廿九日西大組梅本町ニテ一輛ノ人ク車飛走セシニ不審同丁鍵屋某ノ小兒七八才計リナルニ突當リ轉倒セシ上ニ牽懸ケシ故忽チ絶入セリ乗車セシハ士屬体ノ者ナルカ車丁ノ周章ヲ勵シ苦シカラズ迅速ニ馳スベシト指令スルニ車力モ是幸ヒト一丁計リ駈抜去ントセシ折柄邏卒駈來リテ此騷キヲ間直様追掛ケ行クニ士屬体ノ者ハコレヲ見ルヨリ車ヲ飛出何所トモナク逃失セリ因テ車丁ヲ捕エシニ富島町ノ車ナリ即チ取締所へ連レ行ケリ又本月九日南大組道頓堀戎橋南ニテ備後町辺ノ車ナル由通行人

ノ足指ヲ敷潰シ暫ク鬪論アリテ後治藥料トシテ金一兩車主ヨリ償金出セシ由

○當地川口神戸行蒸氣船乗場ニテ各艦ノ客引頗ル雜沓セルニ付余リ不体裁ナレハ近頃客ヲ捕へ無体ニ誘引致ス等ノ事ヲ禁セラレシヨリ方圓丸ト云フ外國人持ノ船ハ至テ人望ナキヲ以テ船賃一人ニ付貳朱ニ減セリ然レトモ猶人氣集リ兼殆ト困却ニ及ヒ政府ノ令ニ戾リ同船へ雇入ノ日本人ヲ以テ客引ヲ致サセ其他種々ノ奸策ヲ設クルト雖トモ次第ニ衰微ニ至レリ船ノ姿ハ方圓ニシテ之ヲ視ルニ外船ヨリハルカニ美麗ナリト雖

明治五十年九月廿九日

明治三十二年九月五日
大正新聞 第五三三號

岩才モ起スベキ故ニ此名アリ今此贈ハ全ク彼童ヲ耐
忍セシメ学カヲ積テ岩才モ起ス大カトナリ行々ハ大
坂ノ名物ト呼ハレ度トノ祝意ナラム世ニ謂ヘル鉄ノ
棒モ久シクスレバ針トナリ人モ勉強スレハ英才トナ
ル義ト同事ナリ

廳聞

當府下壬申三月ヨリ同九月迄送入入籍ノ人負左ノ通
リナル由

入籍 四千二百八十四人
送籍 二千百七人

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ總テ世ニ益アル事ニテ自然勤善懲惡ノ
旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓ムレドモ私ノ遺恨等ヲ以人ヲ謗リ或
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書節シ且無根ノ流説等ニテ人ノ損害ニ
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フベシ尤社中心得違ニテ紙上ニハ其名ヲ
記セズ上梓ノ上立ハ悉ク燒棄可申候若文中齟齬ノ事アラバ公明
ノ討論ヲ述べ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ付テ議論
相生スルトモ當社ニハ關係致サス候

社中敬白

明治三十二年九月五日
大正新聞 第五三三號

米	堂嶋澹	關商社商品時價	黑砂糖	四兩四十七
榎津	廿九百三十八七	酒拾貳	綿	改七百七十目
肥後	同日同八十七	鹽百俵	本綿	四十二
筑前	同日同四十五	茶百斤	純錫	七三兩
水油	同日三十五	干鰯	昆布	八百
		晒蠟	寒天	三十五
				六

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニラス新説異聞アラハ
 本局及ヒ撰集明ノ寄リハ小素志ヲ助ケ玉ハハ事ヲ但シ
 投書ハ必ス顯名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得進テ出版後ハ
 燒棄可申候 ○望ニヨツテ出版スル件ハ請屆買買△新店開キ
 △○モモノ集會等引札 其他社間ニ被買事ハ社ノ意ニ
 為一社一社ニ寄リ候事ニ被買事ハ社ノ意ニ

隔日發兌 大阪新聞 第五十三號

布令

明治五十年五月二十七日 壬申年二月二十二日 本日雨 寒暖 大度

牢囚或ハ徒刑人身寄ノ宅へ立越掛役負ノ定附杯卜偽
 リ称シ贖罪ノ取扱致シ可遣或ハ金錢書狀品物等當人
 へ届方取次致シ可遣或ハ當人病氣ニ付篤ク世話致シ
 遣候杯申聞ケ金錢品物等欺取候者共有之趣相聞候ニ
 付今般召捕へ取糾候処都テ罪人處置濟出牢ノ者或ハ
 徒刑限滿出場ノ者共ノ名ヲ借リ全クノ偽ヲ以金銀ヲ
 掠メ候次第ニ付夫々嚴料申付候条向後右様之者共如

明治五十年五月二十七日 大阪新聞 第五十三號

何様ノ儀申聞候共一切取合ヒ申間敷ハ勿論其者取押
へ置早々最寄取締所へ可申出候事

右之趣管内無洩相達スルモノ也

壬申十月 大阪府權知事渡邊昇

○ 本月十日夕七字頃四ツ橋ヨリ出船致セシ淀川登リ三
拾石船乗衆三拾人計リニテ守口ヨリ半里程川上迄登
リ行シニ不畱杭木ニ乗カケ破船沈没セリ事不意ニ出
テ船中混動セシニ幸ナルハ岸際ニ間近ケレバ一人モ
溺死ナク人又人ニ取縋リテ漸ク這上リケルトゾ

○ 備中國上房郡高梁郵便取扱所加次町赤水寅平ト云
エル門外ニ郵便箱掲ケ有リ然ルニ過日一人ノ少婦賽
錢ヲナケ頻リニ合掌信仰スル体ニ見受シニ付主人走
リ出何故ナルヤト問答云或人アレナルハ縁結ノ神賽
錢箱ト教ヘシ故早ク良縁ヲ得ンヌヲ欲シ斯ク日參致
シ候ト答フルニゾ亭主モ憫レテ暫ク口ヲ閉サリシトゾ

○ 報示

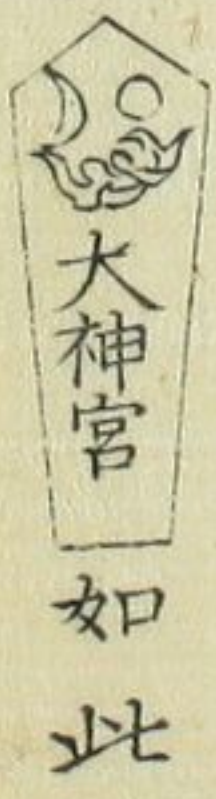
前件ハ吉備ヨリノ報知ナリ然ルニ當府下高麗橋新聞
函ニ郵便ノ書状投入シ有ル事數度ナリ其状面悉ク至
急ノ傍書アレバ當社ノ小使ナル者ヲシテ近傍ノ郵便

明治三十四年十月十日

箱工投シ或ハ其主一返シ中ニモ高槻ヨリノ來書南大
 組坂町へ當名ノ書狀アリ是等ハ郵便飛脚ノ者奔走ノ勞
 ヲ偷ムナラン大至急ト書シアレバ新聞局ヨリ使ヲ以
 早速坂町へ達シ遣ハセリ都テ新聞函ハ四尺ノ高サナ
 レバ三尺ノ童子ノ誤リシニモアルマシ又方今ハ乳臭
 ノ小兒モ學校ニ入り文字ノ辨別アレハ是等ハ所謂
 ト云字ハ柄杓ト讀ミ中ト云字ハ挾ミ箱トヨミシ類ノ
 人ナル可シ今後ハ学童ノ通行ヲ待テ箱ノ文字ヲ尋
 子テノ午投入ル可シ

○後吉備報知

廣島縣管内備後御調郡十大區内尾道西在三軒ヤト申
 処折鶴十吉方エ紀州日ノ熊皇大神宮ノ
 御神札數千枚豆千マキ二千計降臨有之候夫ヨリ十月
 十日頃迄尾道市中へ諸所ノ神札大千マキ或ハ木神像
 十ト降申候先年ノ降臨ニテモ如此奇妙ハ無之候此段
 御知セ申上候



○京都新聞第四十四号ヲ閱スルニ區戸長ノ説諭ニヨ
 リ昨今散髪ノ風頗ニ行ハレ日ヲ追テ開化ニ進ミシ事
 ヲ記シ又十月三十日限町毎ニカラス燈ヲ建ツベシ然
 レハ十一月朔日ヨリ無提灯ニテ夜行苦シカラザル旨

ノ御達シアリシ事ヲ記セリ此件ニ引續キ清淨生掛蠟
 燭鬢付油卸シ小賣開店生輝堂ノ披露アリ思フニ生輝
 堂ノ号ハ何事モ物ニ陰リナク見通シ明ラカニシテ冬
 ニ帷子ヲ賣リ夏ニ綿入ヲ賣ルカ如キ時候外レノ迂遠
 ナル業ハナサヌトノ意ナランニ散髮盛ニ行ハレ鬢付
 ハ花ノ露ト変シ市街ニハカラス燈ノ設ケアリテ諸人
 ノ通行ヲ辨シ提灯ハ鳥驚シノ具トナルノ光景現ニ眼
 前其令其舉ヲ見ル時ニ當リ蠟燭鬢付ノ開店ハ些生輝
 ノ号ニ背キシ所置ト云ベシ願ハ明盲堂ト改号シタラ
 ハ相當ナラン

右投書ノ終記ス

○東京來書ノ終ヲ出ス

十月八日飛鳥山 行幸供奉ハ騎兵一小隊朝九字
 出御夕四字過 還幸 皇太后様 皇后様馬車ニテ
 御同行飛鳥山ノ紅葉其辺ノ菊花王子ノ稻荷 御廻覽
 此日快晴ニテ 御路筋拜見ノ人々群ヲナシタル由
 但御路筋ノ町々家業平日ノ如シ脇町見込ニテ人カ車ニ
 乗タル人モ其俛乘馬ノ人モ御構ヒナシ諸人ノ下座モナシ併
 心アル者ハ下座致サヌハ一人モナク平伏シテ 天顔ヲ拜シ奉レリ
 翌九日午后三字寮ヨリ退出俄ニ官負四五輩飛鳥山へ

人力車ヲ馳セ風景一覽候処眺望宜シク紅葉モ色十分
ニ付一首御一笑可被下候

~~~~~地獄系の色を以てあまのけしり 思ふに

夫ヨリ王子ニ到リ稻荷社参詣セシニ流水ノ模様恰モ  
西京上加茂ノ風光ニ似タリ同所扇屋ト号ス酒樓ニテ  
一酌宴上ノ酌ニ立千シハ梅トヤラ花トヤラ或ハ秋艸  
ノ其名ハ艶ナレ共頗ルソヒン也夜十二字飯宅致候  
○陸軍兵学寮幼年学校生徒七名佛朗西へ留学生徒被  
仰付去ル九日横濱へ出立有之凡七ヶ年ノ間往来共官  
費ニテ勤学ノ事

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ終テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ  
旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓ムレドモ私ノ遺恨等ヲ以テ人ヲ謗リ或  
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書飾シ且無根ノ流説等ニテ人ノ損害ニ  
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フベシ尤社中心得道ニテ紙上エハ其名ヲ  
記セズ上梓ノ上エハ悉ク燒棄可申候若文中粗野ノ事アラバ公明  
ハ討論ヲ述べ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ付テ議論  
相生マハトモ當社ニハ關係致サズ候

社中敬白

明治五年五月廿二日 大阪新聞第百五十四號

物價表

|     |     |         |     |        |
|-----|-----|---------|-----|--------|
| 米   | 堂鳩濱 | 開商社商品時價 | 黑砂糖 | 四兩四十七  |
| 津   | 肥後  | 酒拾畝     | 綿   | 以七百七十目 |
| 筑前  | 休日  | 鹽百俵     | 水綿  | 以八百目   |
| 元商社 |     | 茶百斤     | 純錫  | 以一百兩   |
| 水油  |     | 干鰯      | 昆布  | 八百系    |
|     |     | 晒蠟      | 寒天  | 三百五十系  |

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニヨラハ新説異聞アラハ  
 本局及ヒ撰集所ニ寄リテハ素志ヲ助ケ至ハハ事ヲ出シ  
 投書ハ必ス顯名ニテ可被遺尤モ是村ノ心得進テ出候後ハ  
 燒棄可申候 ○望ニヨツテ出候スル件 △雜品賣買△新店開業  
 △觀テモ集會等引札 △他無間ニ被書事ハ總テ廢去ス  
 大阪一村伊豆守海濱定價並價並價並價並價並價並價並價

本局 長野川池原東  
 撰集所 青湖堂  
 取 西京 村上 堀兵衛  
 以 東京 下村 上出 店

隔日發兌

大阪新聞 第百五十四號

南第七區大寶寺町西三丁

黒田利助

明治五年五月廿二日 西曆一千八百八十七年壬申年五月廿二日 本日晴 寒暖計 五十度

右縁者十ル境屋某去ル未九月阿州名東郡矢三村笠原  
 某ナル者ニ欺カレ同國那賀郡中島浦鈴木某當府下北  
 堀江二番丁播ノ屋某ト共ニ塩ヲ以樟腦偽造イ夕シ支  
 那人ニ可賣渡詐謀ヲ企候処右利助コレヲ推察致シ以  
 ノ外ノ惡業且外國へ關シ事故此度異見ヲ加へ改心為  
 致度ト存即刻出金シテ樟腦ヲ取揚真偽撰分偽造ノ分

明治五年五月廿二日 大阪新聞第百五十四號

ハ損亡ニ不抱取捨懲戒ニ及候ヨリ忽悔悟シ笠原モ手  
段空敷相成自然ト悪業差止リ候次第ニ立至ルモ全利  
助ノ配慮行届神妙ノ至リ十リトテ於御府廳モ金壹圓  
為御褒美被下其上右一条ニ相携リ候者利助ノ功ニ寄  
テ罪一紗御免有之本月八日事濟ニ相成候實ニ奇特ノ  
取計イ衆庶善誘ノ至リ也ト人々稱譽セリ

布令

市街途上ニ而人力車馬車其他諸車行違ヒ候節大ニ混  
雜ヲ生ジ通路人之妨ヲ十スノミナラス小兒老人等ハ  
狼狽ノ餘怪我致候モノモ不少依之以來諸車往返トモ

都而路ノ右側ヲ取り混雜不致様可致万一行當リ候節  
ハ右側ニヨラザルモノ可為越度候条此旨堅可相守事  
但奉公人末々ニ至迄戸主、ヨリ此度可示置事  
右之趣市中并市中接近之郡村無洩相達スルモノ也

壬申 十月 大阪府推知事渡邊昇

○此頃或普請場ノ傍ニ無用ノ者不可入ト記シ又真中  
ニ迄如此大書セリ如何ナル譯ナルヤト按考スルニコレハ  
用事アラバ通ル可シ用事ナクハ通ル可カラズトノ判  
字十リトゾ戲十レ共亦文字ノ智略聊カ一笑ニ備工リ  
○東京來書ノ中ニ云

山階宮十月十一日夕顔艦ニテ御無難ニ御上京被為在タリ  
○東京府卒族被廢尽ク士族ニ被仰付タリ但シ是迄卒族六  
千人ト云今度士族ニトリテモ家祿是迄ノ通ト云由

○ 投書

僕主用有テ豊前小倉工下向在留中夜分散歩セシニ市  
中多ク瓦斯燈ヲ點セリ夫瓦斯ハ西洋各國ノ重用ニシ  
テ其光輝諸油ノ及ブ可キニ非ズ且其費モ油ヨリ儉易  
ニシテ其上蒸烟ノ壺中ニ石炭ノ油自然ト溜ル依テ之  
ヲ賣ル時ハ其瓦斯ノ入費ヲ償フニ足レリ然ラハ費十  
フシテ暗夜ヲ照ス其益斯ノ如シ之ニ仍テ當府下ノ大

商數十ノ行燈燭等ヲ點ズル家ハ必ズ之ヲ用ヒテ燈油  
ニ代エバ其費些カラシ事顯然タリ又中ニハ右ノ利ヲ  
明ラカニスル者有ト虽モ其臭氣強ク且失火アラシ事  
ヲ恐レテ未ダ府下ニ用ユル事希也僕熟思フニ瓦斯ノ  
得ク大ナリト虽ドモ其臭氣ヲ悪ニテ之レヲ用ヒズ依  
テ臭氣ヲ除ク法アラバ人爭ソフテ是ヲ用ヒン事必セ  
リ正ニ其方ヲ得ント工夫ヲ凝ス事數月ニシテ不及然  
ル処小倉在留中或ル家ノ瓦斯燈ヲ見ルニ其瓦斯ニ限  
リ臭氣少シモナシ余リ不審ニ思ヒ其火ヲ吹消シ良暫  
臭ヲ聞ト虽ドモ更ニ臭氣ナクシテ常燈油ニ異ルコト

ナシ斯ニ於テ其戸主ニ對面シテ其所以ヲ問フ主云秘  
藥ヲ以テ滅スト吾レ理ヲ盡シテ其傳ヲ請フト虽トモ  
他言ヲ厭フテ免サズ依テ誓詞ヲ致シ漸ク其傳ヲ得タ  
リ而シテ之ヲ試ルニ殆ント臭氣ナシ嗚呼斯ル妙法ヲ  
得知シナガラ秘シテ世ニ弘メサル事豈小量ナラズヤ  
我一旦誓詞ヲ以テ其秘傳ヲ受タリト虽モ當今文明ノ  
時勢僅ニ秘フルハ大器之愧ル所トス且ハ世益ノ為ニ  
私誓ヲ背ヒテ其傳ヲ廣メントス若シ瓦斯ニ有志ノ輩  
ハ吾傳ヲ受テ以天下ノ大益ニセンコトヲ希フ

高木内僕貞助

○牛ノ急病ヲ治スル良法

一 鯨ノ油

右ヲ煎シ能々サマシ一匹ニ付九ソ五勺程竹ノ筒ニテ飲スベシ

又法

一 茯苓 一 芍藥 二 味細末ニシテ飲スベシ

右法ハ大阪府推大属上田氏ノ現實經檢セララル、所ニ  
テ其功驗鮮カラズ然ルニ當節牛豚ノ病頻ニ流行シ大  
ニ諸人ノ損害アルヲ防グ一助ノ為當新聞紙ニ記載シ  
廣ク世上ニ知ラシメ呉レヨトノ厚志ヲ繼テ爰ニ出ス

○安治川北通二丁目辺ヲ邏卒毎日巡廻スルニ十二字頃

近辺、幼童手習師匠ノ宅ヨリ退クニ必ス行遇エリ幼  
童等毎モ容テ正シ禮節ヲ為スコト嚴重ニシテ日々  
多人數ニ禮ヲ返スニ殆ント遷卒困却セル由此辺ハ新  
堀ト唱エシ下等ノ遊所ニテ諸國ノ船乗り輻湊雜沓ノ  
場所ナルニ斯ク幼童ノ行議ヨロシキハ全ク教師ノ示方  
行届キタルルベシ殊ニ當區々長澤田仁兵衛ハ至極篤志  
ノ人ニシテ每區ニ小学建校ノ主旨ヲ奉シ斯ル場末ノ  
貧町十カラモ種々尽力區中ノ有志ト相謀リ小前ノ者  
ノ難澁ナラサル様ノ方法ヲ設ケ三階造リナル巨大ノ学  
校ヲ建築シ近々落成ノ趣也彼是以テ一美事ト云ベシ

○本月朔日曉四時比西横堀筋六丁目失火左ノ軒數類  
燒セリ此出火始メ河岸ノ材木小屋ヨリ燃上リタル由  
ニテ一時ハ近隣ノ者モ熟睡シテ知ラサリシ故忽チ左  
右ニ延燒シ近傍騒キ立チシ比ハ餘程猛烈トナリ消防  
人數馳付ケノ間モナケレハ如何ナル大火トナルベキヤモ難圖勢  
ヒ各憂慮セシ折柄區々取締出張所ヨリ邏卒<sup>ポン</sup>隊  
ヲ引卒シ連々四方ヨリ馳付ケ阪府官員出張相成リ消  
防人數ヲ指揮シ取締長官振ツテポン<sup>ポン</sup>掛ヲ指令シ上  
下カヲ極メ盡力ノ功ニヨツテ八字比漸々鎮火セリ先  
達テ此ポン<sup>ポン</sup>御備エアリシ以來ハ去ル夏造兵司出火

明治五年壬申十一月十六日  
西曆一千八百七十二年十二月十六日  
本日  
寒暖計  
四十度

明治五年壬申十一月十六日  
大阪新聞第百五號

ノ節唯一挺試ミアリシ而已ノ所此節始テ捻數十五挺  
ヲ用ヒラレシニ其功全ク効ルシク總テ是迄延焼ヲ防  
クニハ建家ヲ断切シタルモノナルニ此度ノ消口ヲ見  
ルニ多クハ建家ノ佟防禦セリ加フルニ邏卒奮勉死力  
ヲ盡シ中ニハ川中エ飛入りボンブヲ仕用シタルモア  
リテ液皆其働キヲ賞セリ  
類焼 七十一戸

本局 本甲通四丁目  
書籍會社  
撰集所  
取次三府及諸國

隔日發兌

# 大阪新聞 第百五號

布令

米大豆其他雜穀ノ類ヲ以テ油製造之儀差許候条總テ  
絞油規則ニ照準シ可致取扱事

壬申 十月七日 太政官

右之通被 仰出候間管内無洩相達スルモノ也  
壬申 十月 大阪府権知事渡邊昇

○ 天満橋一丁目辺ニ賣藥ヲ渡世トスル某成者ノ妻テイ

明治五年壬申十一月十六日  
大阪新聞第百五號



ハ元北新地ノ藝妓ナリシカ十二三年前身受致シ夫婦  
時間敷暮シ今ハ何不足ナキ身上ナルカ去年ノ頃ヨリ  
下女ノマツト通シ終ニ男子出生シケレバ其ヨロコビ  
一方ナラズマツハ其機ニノリ本妻氣取ニテ妻ノテイ  
ハ自然トウトマレ下女同様ノ扱ヒ多ケレバ今ハ手寄  
ベキ方モナクナゲキニ暮レ終ニ當月二十日ノ夜江ノ  
子島崎吉橋ヨリ身投シケルヲ教部省ノ官負小栗某十  
ル人ニ助ケラレ其家ニ返サレケルトゾ古人云糟糠ノ  
妻ハ堂ヨリ下サズト此テイハ則糟糠ノ妻ナルニ妾マ  
ソノ愛ニ溺レ終ニ其妻ヲシテ死ニ至ラシメントス謹

マザルベケンヤコハ世間兩婦ヲ愛スル人ノ為メコ、  
ニ記シテ以テ後車ノ戒メトス

○ 投書

人ノ精神ハ全ク頭部ニ寓スルノ趣意ニテ人皆髮ヲ殺  
キ帽ヲ戴キ自重セスンハアル可カラサルノ令アリト  
聞ク實ニ上ヨリ下ヲ愛セラル、コト頂ヨリ踵ニ至ル  
吁教化ノ磅礴此時ニアラン近闔街ノ景況ヲ察スルニ  
五尺ノ卵童ハ却テ時勢ニ遷リ易ク且上ノ御趣意ヲ奉  
遵シ断然髮ヲ殺キ洋装ヲナシ頗ル歐洲ノ風采ヲ歆慕  
スルノ意外ニアラハル然ルニ年強ニ千カキモノハ依

遇此文明開  
化辰只應革  
舊且追新歐  
洲風采君看  
取半髮長存  
不似人  
即今不断俟  
何辰散髮看  
看髮率瀆取  
浴就眠無不  
妙寄聲天保  
後前人

本詩措辭生  
淺未夕世ヲ  
弄ヒ時ヲ嘲  
ルノ意ヲ暢  
ルニ足ラザ  
ルニ似リ或  
入ノ二首ヲ  
以テ増補  
ト云

明治五年 申年 大阪新聞 第三頁

然數百年荒鴻ノ陋習ヲ帶ヒ頭ハ半髮ヲ剃シ鬚ハ蜻蜒ノ容ヲナシ開化ノ美風ニ浸潤スル事ヲ嫌ヒ口ニ天保年間ノ事蹟ヲ吟ズ誠ニ其愚可憫ノ至リ十ラズヤ庶幾ハ上ノ御趣意ヲ奉導シ速ニ髮ヲ殺キ洋装ニ変スヘシ是亦開化ノ一助ナラン

文運隆盛及此辰 應看開化遍溪濱  
堪嗤半髮紈袴子 知得葛天時代人

○ 東京來書中ニ云

時ニ珍談アリ或ル縣ニテ新地御受取ノ節旧庄屋一同呼出シ村名讀上ケ候処持村ト幾度呼候テモ庄屋出ズ

其内溜ヨリセリ立ラレ老人一人罷出候処御役人曰ク持村庄屋ハ其方ニヤ老人曰ク私村ハ峠村ト申候センズリ村ト申ハ新地内ニ無之御役人曰ク然レバ山ヘント手ヘンノ書損ナリ山村不文明書損トハ申ナガラ上ヘ對シ鄙陋ノ至リ也老人曰恐入候次第何分御宥免可被下以後學校取立此様ノ事無之様可仕候御役人曰ク過ニ付文明ノ本心付候得ハ宜敷候乍去此書付ハ其方カキチガヘ候ヤ老人曰イヤ左様ニハ無之持ノカキチガヘハ五人組打寄仕候トテ笑ニテ事濟候由  
○ 或人ノ云大阪東十二區ノ内辻々橋詰等ニ玻璃燈ヲ

明治五年 大阪新聞 第三頁

建往来人ノ幸ヒナル事新聞三十九号ニモ出ス如ク是全ク文明開化府治ノ盛大ナル所以ナリ然ルニ流行ノ時計人々携エ或ハ家々ニ掛置キ自己ノ便利而已ニシテ未タ万人ノ為メ少裨アルヲ聞ス依テ是ヲ府下近年設ケ置カレタル町々御布令揭示場ニ掛ケ備エテハ衆庶ヲシテ時間ヲ計リ寛々御布告拜閱シ自然御趣意貫徹シ開化進歩ノ捷徑ナラン且玻璃燈臺モ同所ニ設ケ照輝セバ家業寸障ナキ小民ハ營畢テ夜分寛々拜閱ノ便ヲナシ是亦開化進歩ノ一助ナラン掛時計ハ價四五圓計リノ品モアリ僅ワカノ器物ニシテ万人ノ便利ヲ得ル

幾許ゾヤ瑣々タル小事ニ取リテハ近年時計流行ヨリシテ下男下婢ヲ遣フニ寸刻ヲ争ヒ使フニ往復ノ限ヲナス等ノ事アレハ袖時計所持スル能ハサル婢僕等ノ便利トモナリ其大ナルニ至リテハ皇國中普ク在来人ノ為メニ建シ道シルベノ如ク市在トモ一般ニ掛置カバ高價ノ袖時計贅物トナリ其價幾万金海外ニ輸出ノ費ヲ減セン是國家富贍ノ一端ナリ有志ノ輩ハ官許ヲ乞ヒ不日ニ此企テアラムコトヲ希望ス是予ガ老婆心ナリト

附言時計遅速ノ違過モ計リ難ク却而人ノ惑ヲ生ス

ルコトアリ故ニ町々又ハ有志ノ靈先ニテモ繁々掛  
置コトヲ希望ス尤<sup>カ子</sup>鉄網ニテモ懸ケ其余如何トモナ  
シ盜妨アリタキコトナリト

○ 東京來書中ニ云

去月廿二日 天長節ニ付貴地大賑ノ由且其會社別  
段ニフラフ御立夜ハ數多ノ提灯ニテ美ナル饒リ誠ニ  
天長節ノ御趣意ニ相叶上下共感服致シ候新費百圓モ  
幾億方圓ニ向フ可シ來年ヨリハ會社ノ入口并窓口ニ  
常盤水ノ青葉ノ枝ヲ窓ノマハリニ結ヒ付其処ニ紅白  
ノ提灯ヲ裝ヒ付有之度はハ西洋ノ佳節ノ饒ナリ

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ總テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ  
旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓ムレドモ私ノ遺恨等ヲ以テ人ヲ謗リ或  
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書飾シ且無根ノ流説等一テハ損害ニ  
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フベシ尤社中心得道ニテ紙上モ其名ヲ  
記セズ上梓ノ上ニハ悉ク燒棄可申候若文中齟齬ノ事アラバ公明  
ノ討論ヲ遂ベ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統ニ投書ニ付テ議論  
相互ヌルトモ當社ニハ關係致サス候

社中敬白



信時限表

午前八字ヨリ午後八字迄

東京 兩國 淺艸 本郷 四ッ谷 赤羽根 沼津

靜岡 名護屋 岐阜 彦根 高麗橋

但東京ハ兩國淺艸本郷四ッ谷赤羽根大坂ハ高麗橋局ヲ除外非常御用向ハ此限ニアラス

右之通當分相定候事

壬申十月朔日改 電信 察

東成郡第二區

中道村

島谷次郎兵衛

妻幾奴

其方儀夫次郎兵衛先年來病ニ罹リ家業ヲ抛テ候ニ付  
 女ノ身ヲ以テ青物小魚等買請賣鬻イタシ右儲錢ニテ  
 夫並幼年ノ小兒四人ヲ愛育シ病夫ノ介抱深切ニシテ  
 怠ラズ良藥ヲ求メ服用セシメ前後夫ニ對シ貞操ノ道  
 二叶ヒ神妙ノ事ニ候依之爲褒美金一圓遣之事

壬申十月十七日

○ 未曾有ノ御盛舉ヲ以テ貨幣改鑄ノ御大典ヲ被爲興内  
 外人民感喜ニ不堪竊ニ宇内萬國ノ貨幣ヲ歷視ス凡ニ  
 合衆政治ノ國制ヲ除クノ外必ズ其國主ノ肖像ヲ模刻

スルヲ以テ常套トス退テ其職由于原ルニ其國帝王ハ  
貨幣ヲ制スルノ權アリテ其國民ヲ保護スルノ主職夕  
ルヲ以テ親シク其肖像ヲ印スルハ君視民如子仁恤撫  
愛ヲ示ス儀ニテ民亦視君如父所謂ニ可有之且其國民  
其帝王ノ肖像ヲ拜シ苟モ尊愛貴重スベキノ感情之十  
キ者アラシ哉故ニ貨幣ノ愈尊ク愈重スベク國君ノ最  
以テ景慕スヘキノ情ヲ尽サシム抑肖像ノ模樣其骨角  
肥瘠毫毛ノ差違十ク微妙明瞭ニ其真ヲ摸スルヲ得ヘ  
シ故ニ貨幣ニ肖像ヲ印スルハ豫シメ贋造ヲ防クニ足  
ベシ昔羅馬ノ法王下民ニ親臨スルヲ嫌ヒ國中王ノ尊

容ヲ知ル者ナシ然ルトモ國民保護ノ職ニ對シ遂ニ貨  
幣ニ其肖像ヲ印セリ夫貨幣ハ國ノ至寶ナリ鄭重ニ注  
意セズンバ有ベカラズ某シテ古昔賢哲理ヲ推シテ情  
ヲ素ルト雖トモ決シテ肖像ヲ印スル常憲ヲ免ルヲ得  
サルヲ知ベシ是ニ因テ此ヲ思フニ皇國新貨幣ノ形容  
全ク右ニ反シ其模形緻密精巧ヲ尽セシト雖トモ君民  
相親ムノ大義ヲ缺キ貨幣ノ位價ヲ削キ且器械摩滅ノ  
煩ヲ招ク今ヤ百度御更張ノ折柄凡テノ舊染ヲ除キ去  
リ今茲恐多クモ御巡幸ノ勞ヲ不被爲厭萬民ノ疾苦  
ヲ被爲間候御盛代ノ秋ニ丁リ獨リ闔國最大ニ貴重ス

へキ貨幣ノ模形ニ至テハ全ク以テ宇内ノ通義ヲ缺ク  
ハ誠ニ以テ可惜ヲクシ遺典ト奉存候既ニ米國ノ造幣寮ニテ  
モ皇國ノ新貨ヲ評シ 皇上ノ御尊像ナキヲ愛惜セシ  
趣私儀辱クモ貨幣鑄造ノ義ニ付大任ヲ蒙リ前文ノ事  
情ヲ耳食シ黙止可致儀ニ無之何卒一日モ早ク貨幣ノ  
模形ヲ御改正相成後來再ヒ改鑄ノ御手数無之様致度  
奉存候

右ハ吾友造幣權頭益田氏ヨリ建言セシ書面ナリ我  
新貨幣ハ精密良巧聊カ云分ナシ此上右建言ノ如ク  
聖上ノ御影相ヲ模刻セバ實ニ善美ヲ尽シ世界第一ノ

貨幣ト相成ベシ

某

○從備中報知

備中國小坂部ノ舊領主元旗下水谷家之老臣中島某先  
般廢藩以來早クモ形勢ヲサトリ同國上房郡高梁ニ寄  
留牛肉開店セシニ連日來客數十人ニ及ヒ主人ハ斷髮  
洋服ニテ來客毎ニ貴賤ヲ不論親敷ク相接ル故追日大  
ニ繁榮ヲ極メリ方當自食ノ域ヲ悟リス九業ヲ營ム事  
感スベキ事ナラズヤト云々

○投書

或人ノ云西京西本願寺ノ博覽會ヲ一閱セシニ賣物ノ



價珍器ハ格別其餘ノ常品ハ不斷市店ニ贖アケユリハ直貴  
シト思ハシタリ常品ノ分ハ市店ニ鬻ウグ同様ニ減シナ  
バ此上盛大ニ行ハル、哉ト思ヘリ

○東京來書中ニ云

十月九日夜ヨリ大風ニテ十日夜迄ニ工部省御造營ノ  
雨掩屋根並通り銀座練瓦ノ石屋建ノカリ屋根等過半吹  
倒シ申候其外板屏吹倒ス併去七月廿二日大風雨ノ様  
ニハ無之候ナリ  
吉原ハ十月十三日ヨリ開店併下等ノミニテ上等ハ未  
タ立販ラザル由

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始ノ總テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ  
旨趣ニ適フモノハ萃テ上梓スレドモ私ノ遺恨等ヲ以人ヲ謗リ或  
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書節シ且無根ノ流説等ニテ入ノ損害ニ  
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フシ尤社中心得違テ紙上エ其名ヲ  
記セス上梓ノ上エハ悉ク燒棄可申候若文中齟齬ノ事アラバ公明  
ノ討論ヲ述べ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ付テ議論  
相生スルトモ當社ニハ關係致サズ候

社中敬白

明治五年

大坂新聞第幾号

〇五

明治五年壬申十一月十三日  
西曆一千八百七十二年十二月十三日

物價日表

|               |                         |                 |                            |                      |
|---------------|-------------------------|-----------------|----------------------------|----------------------|
| 堂嶋濱           | 撰津 七日 三匁廿七              | 肥後 同日 同八十五      | 筑前 同日 同五十五                 | 水油 石 同日 廿二匁五         |
| 開商社商品時價       | 酒 拾 貳 銘 四十五匁<br>地 卅 卅 卅 | 鹽 百 俵 存田 卅 卅 卅  | 茶 百 斤 大頭 卅 卅 卅<br>上頭 卅 卅 卅 | 于 鰯 卅 卅 卅<br>羽 卅 卅 卅 |
| 黑砂糖 三 匁 卅 卅 卅 | 綿 金 壹 兩 阪 卅 卅 卅         | 本 綿 百 斤 豫 卅 卅 卅 | 純 銅 百 斤 二十 匁               | 生 糸 百 斤 八 百 五 十 匁    |
| 昆 布 三 匁 卅 卅 卅 | 寒 天 卅 卅 卅               | 本 局 本 學 卅 卅 卅   | 分 社 長 州 卅 卅 卅              | 取 大 阪 卅 卅 卅          |

伏テ眞フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ  
本局及ヒ撰集所工寄セ社中ノ素志ヲ助ケ玉ハシテ但シ  
投書ニハ必ラス住所姓名ヲ載セ玉フベシ無根ノ説ヲ恐ル故ナリ  
○望ニヨツテ出版スル件 △諸 品賣買 △新店開キ  
△觀セモノ集會等引札 其他 世間工披露事件總テ應其望  
出版一行ハ三字ニ付 定價五錢宛ニテ引請可申候

隔日發兌 大阪新聞 第五十七號

布令

葬祭ハ人倫之大道ニ付人々其情ヲ盡サシム可キ段ハ  
兼テ相示シ置候通ニ候處死者ニ着セ遣ス衣類ヲ火葬  
場ニ於テ剥取候者又右品ヲ買取り密ニ染直シ販賣致  
シ候者有之哉ニ相聞ヘ不埒之事ニ候向後右等所業於  
有之ハ此度嚴重咎方可申付候条此旨可相心得事  
右之趣管内無洩相達ルモノ也

壬申 十一月 大阪府權知事渡邊昇

明治五年十一月

月五申年 大正新開第五十七号

長田作兵衛

廣岡久右衛門

鴻池善右衛門

其方儀新校建設子弟ヲ教育スル旨趣ノ渥ニ酬ヒ先般  
小学建校資費トシテ致献金候段神妙之事ニ候依之為褒  
賞銀蓋一具下賜候事

総區長

磯野小右衛門

其方儀巡邏之人民ヲ保護シ学校ノ子弟ヲ教育スル旨  
趣之渥キニ酬ヒ先般取締所小学建校入費ノ内へ致献  
金候段神妙之事ニ候依之為褒賞銀蓋一具下賜候事

長田作五郎

其方儀新校建設子弟ヲ教育スル旨趣ノ渥ニ酬ヒ先般  
小学建校資費トシテ致献金候段神妙之事ニ候依之為  
褒賞目錄之通下賜候事

壬申 十一月

目錄

一金拾七圓五拾錢

○ 聞説教部ノ大教正某ナル人此頃當地ニ来ラレ説教ノ  
餘暇ニ府下ノ人々ヲ聚メ御髮剃ト唱エ剃刀ヲ頭ニ當

月五申年 大正新開第五十七号

テ其冥加トシテ出ス金安キハ一方高キハ一圓ニ出ル  
由是ハ全ク其人々ヲ釋門ノ徒弟ニ加入シ後生ハ極樂  
ニ往生サシムトノ主意ナラム考フルニ僧侶蓄髮ハ勝  
手タルベキノ御沙汰アリ左スレバ頭ヲ剃ラ子カミナクバ釋門  
ノ徒弟ニナラレ又ト云譯モアルマシ又坂府ノ告諭ニ  
人ノ精神ハ頭部ニ寓スルモノナレバ剃頭ヲシテ猛烈  
ノ日光寒風ニ觸ルレバ大ニ健康ヲ害スルモノニテ自  
然毛髮ノ生育スルハ頭腦ヲ掩護スル造化天付ノ要具  
タレバ速ニ剃頭ノ陋習ヲ止ヨトアリ其ハ如何ナル人  
ゾ辱クモ三ヶ条ノ大旨ヲ奉シテ天下ニ教導スル大切

ノ職掌ナルニ頭ヲ剃リテ夢ニモ見ヌ極樂淨土ニ遣ラ  
ントノ空理ヲ示シ是ガ天理人道ヲ明ニスルノ大旨ニ  
叶ヘルヤ坂府ニハ剃頭ヲ止メ身體健康ノ覺悟セヨト  
ノ告諭アルニ其地方ニ来リ髮ヲ剃ルノ真似ヲシテ愚  
民ヲ惑ハシ是ガ 朝旨尊守ノ大旨ニ叶フベキヤ人命  
ハ 朝廷ノ尤重ニセララル、所故ニ海外ノ名醫ヲ雇ハ  
レ數万金ヲ投シテ醫生ヲ教育セラレ或ハ病院等ノ御  
設アリ然ルニ此世ハ後生々々ト言觸スハ  
人ノ短命ヲ禱ルモ同シ是モ亦 朝旨尊守ト云ハレル  
ヤ彼橋詰ノ髮結ガ鋏ヲ磨キ櫛ヲ改メ首ヲ捻リ腰ヲ屈

メ漸<sup>ユ</sup>ザンギリノ一頭ニテニ朱ノ代ヲ取ルサへ減少シ  
テ小民ノ開化ヲ助ケヨト坂府ノ告諭アリ某ハ唯一寸  
剃ル真似ノミニテ百足以上トハナント諸君子エライ  
高手間テハコガラヌカ願ハ剃刀ヲ當ルノミハ十二文  
位ニ負ケテ可ナラン  
右投書ノ儘記ス

○東京来書中ニ云

當府下開化ノ進歩實ニ盛大就中府下横濱間鐵道開業  
式ハ衆人手ヲ打テ驚キ入りタリ其后<sup>ノチ</sup>モ愈<sup>チ</sup>繁昌方今ハ  
一日平均一千二三百圓ノ御立高ナリ其他京橋ヨリ新  
橋ノ間煉化石造ノ家屋建築兩側半途迄既ニ築造未ダ

全備ニハ至ラザレドモ<sup>シヨクシ</sup>落成ノ上ハ皇國第一等ノ市  
街トナルベキ<sup>アリ</sup>景况又横濱市中ニハ去ル晩秋下旬ヨリ  
瓦斯燈發行凡三十間毎ニ一ヶ所ヅ、有之殆<sup>ト</sup>書見  
ニ足リ候程ノ照輝ナリ外國人寄留地ニハ未ダ無之不  
日ニ<sup>ヒ</sup>鍵<sup>カギ</sup>ノ様子左スルトキハ横濱一圓無夜<sup>ハ</sup>郷<sup>キ</sup>トナル  
ベシ○當府邏卒モ是迄ハ所々ニ見張所有之候處更ニ  
被為廢止陸軍歩兵同様立番ニ相ナリ殆ト横濱ノ景况  
邏卒モ是迄ハ二三圓ノ月給ニテ服食ハ官費ニ有之候  
処自今等外一等ノ月給ニ相成服食共自費ニ相成候ニ  
什衣服等ハ最モ美觀平日モ大羅紗ヲ着用ノ者ハ一人

明治五年 申年 大隈新閣第... (三)

モ無之取締向モ頗ル懇切ナリ又昨今府廳ヨリ布令有  
之道路往還ノ掃除及ビ小便桶等ノ義頗ル嚴重且脛ヲ  
顯シ往来ヲ為ス者嚴禁右ニ付一突話ハ古ヅボン并ニ  
古股引等仕入置候者ハ意外ノ利ヲ得タリト

○ 備州報知

備中國上房郡高粱第二區郵便取扱人赤木寅平ナル者  
過日大坂府ヨリノ断髮御觸ヲ見受感銘ノ餘リ諸人ニ  
断髮ノ愉快ナル事ヲ示ス得心ノ人々エハ自カラ手ヲ  
下シ断髮世話厚ク致シ遣ス事殆ト數十名ニ及フノ誠  
開化ノ扶助行届シ事賞スベキ事ナラスヤ

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ總テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ  
旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓ノレドモ私ノ遺恨等ヲ以人ヲ謗リ或  
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書飾シ且無根ノ流説等ニテ人ノ損害ニ  
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フベシ尤社中心得道ニテ紙上ニハ其名ヲ  
記セズ上梓ノ上ニハ悉ク燒棄可申候若文中艱難ノ事アラバ公明  
ノ討論ヲ遂ベ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ自テ議論  
相生ヌルトモ當社ニハ關係致サズ候

社中敬白



朕惟フニ我邦通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立  
 テ太陽ノ纏度ニ合ス故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カザ  
 ルヲ得ズ置閏ノ前後時ニ季候ノ早晚アリ終ニ推歩ノ  
 差ヲ生ズルニ至ル殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ率子  
 妄誕無稽ニ屬シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセズ蓋  
 シ太陽曆ハ太陽ノ纏度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異  
 アリト雖モ季候早晚ノ變ナク四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置  
 キ七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キズ之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ  
 精密ニシテ其便不便モ固リ論ヲ俟タザルナリ依テ自今旧曆ヲ廢シ太  
 陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメン百官有司其レ斯旨ヲ體言  
 明治五年壬申十一月九日

一 今般太陰曆ヲ廢シ太陽曆御頒行相成候ニ付來ル十二月三日ヲ以テ  
 明治六年一月一日ト被定候事

但新曆鋳板出來次第頒布候事

- 一 一ヶ年三百六十五日十二ヶ月二分ナ四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事
- 一 時刻之儀是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分ナ候處今後改テ時辰儀  
 時刻晝夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時二分ナ午前  
 幾時ト稱シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時二分ナ午後幾時ト稱候事
- 一 時鐘之儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事
- 一 但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱來候處以後何時ト可稱事
- 一 諸祭典等舊曆月日ヲ新曆月日ニ相當シ施行可致事



太陽曆 一年三百六十五日 閏年三百六十六日

|     |      |     |       |       |
|-----|------|-----|-------|-------|
| 一月大 | 三十一日 | 其一日 | 即舊曆壬申 | 十二月三日 |
| 二月小 | 二十八日 | 其一日 | 同     | 正月四日  |
| 三月大 | 三十一日 | 其一日 | 同     | 二月三日  |
| 四月小 | 三十日  | 其一日 | 同     | 三月五日  |
| 五月大 | 三十一日 | 其一日 | 同     | 四月五日  |
| 六月小 | 三十日  | 其一日 | 同     | 五月七日  |
| 七月大 | 三十一日 | 其一日 | 同     | 六月七日  |
| 八月大 | 三十一日 | 其一日 | 同     | 閏六月九日 |
| 九月小 | 三十日  | 其一日 | 同     | 七月十日  |
| 十月大 | 三十一日 | 其一日 | 同     | 八月十日  |

四年每  
三置之

|      |      |     |   |       |
|------|------|-----|---|-------|
| 十一月小 | 三十日  | 其一日 | 同 | 九月十二日 |
| 十二月大 | 三十一日 | 其一日 | 同 | 十月十二日 |

大小每年替凡一十

時刻表

午前

|     |     |                                    |    |     |     |    |    |    |     |
|-----|-----|------------------------------------|----|-----|-----|----|----|----|-----|
| 十二時 | 午刻  | 零時 <small>即午<br/>後十<br/>二字</small> | 子刻 | 一時  | 子半刻 | 二時 | 丑刻 | 三時 | 丑半刻 |
| 八時  | 辰刻  | 四時                                 | 寅刻 | 五時  | 寅半刻 | 六時 | 卯刻 | 七時 | 卯半刻 |
| 九時  | 辰半刻 | 十時                                 | 巳刻 | 十一時 | 巳半刻 |    |    |    |     |

午後

|    |     |    |    |     |     |     |    |
|----|-----|----|----|-----|-----|-----|----|
| 一時 | 午半刻 | 二時 | 未刻 | 三時  | 未半刻 | 四時  | 申刻 |
| 五時 | 申半刻 | 六時 | 酉刻 | 七時  | 酉半刻 | 八時  | 戌刻 |
| 九時 | 戌半刻 | 十時 | 亥刻 | 十一時 | 亥半刻 | 十二時 | 子刻 |

右之通被定候事

壬申

十一月九日

# 太政官

五

○大坂府権少属松本君ヨリ本府工建結ノ由  
 市街之中暗ニ娼家ニ似タル一種アリ臣未其實際ヲ不  
 踏ト雖隣ニ聞處ノ巷説ヲ挙ク其種昔ハ泊湯巻ノ名ア  
 リ今其名無クシテ東京ノ地獄ト云モノニ等シク多ク  
 ハ近隣ノ老婆是ヲ周旋シ貧家ノ娘或ハ寡婦甚敷ハ妻  
 女ヲ不論賣色ヲ事トシ凡一夜ニ金ニ方ヲ得ルモ老婆  
 其四分一ヲ私シ号シテ世話料トス又其身ヲ續モノ素  
 ヨリ甘ンジテ是ヲ成スニハ非ザレトモ賣色ノタヌ一

月台五五

二反行月台

時貧苦ヲ忘レ或ハ處女ノ情態常ニ欲シテ得ザルモノ  
 、得易キヲ歡ヒ終ニハ習ヒ性トナリ自然娼婦ノ姿情  
 ヲ備ヘ敢テ漸愧ノ譚ル色ナク衣裳ヲ翻シ往来スルニ  
 至ル遊客又其實ヲ問ハズシテ名ノ賣女ニ非ラザルニ  
 惑ヒ偽情ヲ諷トシ為ニ通客多シト也夫レ娼家ノ黷氣  
 ヲ防クヤ其法素ヨリ周密ナラズト雖主人是ヲ恐ル、  
 故又甚粗ナリトセズ然シテ娼婦猶黷ニ惱ムモノ十二  
 七八嗚呼處女ニシテ娼婦ノ行フ處ヲ行ヒ其患フル處  
 免ル、是アラコ然ラハ是遊里ト同シク偏ニ黷毒ノ一  
 淵藪ナラン是等ノ惡弊ハ 大府疾ク洞察嚴ニ禁シラ

レクレバ敢テ犯モノ不可有ト雖旧風嘗而洗除ヲ難シ  
 トス况ヤ數百ノ遊女解放ノ今日ニ於テヲヤ是等ノ種  
 類ハ黷氣アリトモ公然黷院へ治療可願出モノニ無  
 之餘毒蔓延豈些々タランヤ實是冥々暗裡ノ事業只望  
 ラクハ伺察ヲ專ニシ其巢穴ヲ探一二之犯科速ニ典刑  
 ニ處シ為ニ自他億兆ヲシテ深ク寒心セシメン事ヲ  
 附タリ處女ノ中女太夫ト唱義太夫節セキ 席ニ出ルモノヒウカク 嫖客ニ慣  
 レ密ニ娼妓ニ等シキモノアリトゾ其實在テ其名ヲ變ス遊里ノ徒豈不  
 平ナキハザラシヤ况ヤ日新美政ノ今日風俗ニ害アルモノヲヤ併而  
 明府ノ賢斷ヲ仰ク而已

春條

明治二十五年  
 大内親衛第五号  
 〇二

○造幣寮貨幣鑄造高 表

金貨之分 銀貨ノ分ハ次ノ發兌ニ讓ル

|                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 六月十六日開察ヨリ十月世百迄鑄造高 | 十月一日ヨリ廿日迄鑄造高      |
| 廿圓金九十二万九千九百二十圓    | 無之                |
| 十圓金千二百三十八万三千四百五圓  | 三百。九万。三百圓         |
| 五圓金四百八十万。五千五百八十五圓 | 十五万七千七百。五圓        |
| 二圓金四十六万。四百六十八圓    | 無之                |
| 一圓金二十二万六千百。四圓     | 一万五千六百六十九圓        |
| 此總高八百七十九万七千五百二十七圓 | 此總高三百二十五万七千六百七十四圓 |
| 總計二千二百。           | 五万二千。一圓           |

隔日發兌 大阪新聞 第五九號

布令

明治五年申年 西曆一千八百七十七年 壬申年 五月 廿二日 寒暑計 本日の

世態日ヲ逐テ開化ニ進ミ散髪ノ風大ニ世ニ行ハレ既ニ先達テ半髪ノ俗相改候様布達ニ及候ニ付散髪益々可被相行之處髮結職之者不當之髮切代ヲ貪リ小前未々ノ者共難澁不少趣ニ相聞甚以不宜事ニ候自今從來ノ結髪手間時間ト比較シ相當之髮切代請取可申若猥之儀於有之ハ此度取糺可申事

右之趣管内髮結職之者共無洩相達スルモノ也

明治五年申年 大阪新聞 第五九號

壬申 十月

大阪府権知事渡邊昇

西成郡第三區下福嶋村

川村久次郎

其方儀父去巳年重病ニ卧シ家産相傾キ候ニ付日夜苦心家業上荷舩乗相働<sup>ム</sup>キ藥用ヲ資ケ保養手ヲ尽シ候得共遂ニ死亡就テハ葬送ニ至ル迄子タルノ情ヲ尽シ以後母ヲ奉シ相稼候央兄並姉病ニ罹<sup>ル</sup>リ藥用ノ入費今一層難澁ニ及候得共家業ヲ励ミ手透ノ折ハ涉シ舟或ハ川浚人足道具仲仕其他日夜無油断相稼キ養生為致姉ヲ全快セシメ兄ヲ懇<sup>コシ</sup>葬<sup>ソウ</sup>イタシ候段前後若年ノ身ヲ以

テ孝友ノ二道ニ叶ヒ神妙ノ事ニ候依之為<sup>シ</sup>褒美金一圓五十錢遣之事

○京都府参事楨村君ヨリ大坂府参事藤村君エノ来書ヲ得夕リ因テ其儘ヲ出ス

諸ハ當表療病院之儀追々其仕法計算相立候ニ付今朝日開業式ヲ行ヒ申候右ハ當府御在勤中段々御配慮被為在候事ニ付今日ノ盛挙ニ才ヨヒ候事ト相考申候就而ハ此式ニハ前以御案内申上御光臨ヲ可願等之処此節ハ已ニ東京御發船ト相考差扣候処未夕御在坂之由唯今承之残念奉存候依テ式之物御配分仕候此式ヲ来

リ觀ル諸人群集シテ粟田知恩院辺ハ一時往來モ塞リ  
殊ニ場中ハ錐ヲ立ツヘキ寸地モナク府下豪富ヨリ此  
式ヲ祝シ催ス花園舞曲能等ハ目覺シク演技ノ所作モ  
多クハ忠臣烈婦ノ古シヘヲ摸シ人ヲシテ歡樂中ニ感  
激奮起セシムルナリ右ハ先生今日ノ此開業ノ光景ヲ  
想像シ給ハン事ヲ希望シテクタク、ミシク候ヘトモ書  
添へ申上候御推察可被成下云々

○ 療病院開業當日ノ次第

第一條 明治五年十一月朔日朝第六字知事參事七等出仕及ヒ療  
病院掛ノ諸官員總區長医業取締種痘醫用醫藥局生藥

物業取締假療病院工出頭

第二條 同第七字療病院献金人數勸諭方用達同並出頭

第三條 同第八字教師ドクトルヨンケル氏ヲ迎フ但語学教師リユ

トルフレーマン氏及ヒカルレーマン山本覺馬同伴

第四條 療病院建営ノ主意讀知參事務之

第五條 教師ヨンケル氏演說

第六條 出席ノ諸人祝賀

第七條 教師及レマン兄弟饗應會食奏任以上勸業課典事療

病院掛ノ諸官員

第八條 出頭ノ面々エ酒肴ヲ供ス

但金百圓以上献金及ヒ米五十石以上献納ノ面々此ニ列ス

第九條 金百圓以下米五十石以下献納ノ面々エ祝餅ヲ配分ス

第十條 教師出頭ヨリ讀知ヲ初ムル迄場中ニ音樂ヲ張ル但總

區長中此開業ヲ祝スル為ニ設ルナリ

第十一條 祝語終テ饗應ヲ初ムル迄前同断

第十二條 饗應終テ用達其他此開業ヲ祝スル為ニ設ケタル諸演技

ヲ初ム出頭ノ諸官員教師及レトシ氏兄弟ヲ誘フテ之ヲ觀セシム

第十三條 療病院エ金穀ヲ献納シタルモノエハ當日ヨリ前ニ兼テ

券ヲ送リテ此開業式ノ場中及前條ノ諸演技場中ニ入ルコト

ヲ許ス

第十四條 管内游女藝妓等當院助費金トシテ兼テ願ノ上若干ノ

冥加金ヲ納メ来レリ因テ開業當日休業申付開業式及

開業ノ為メニ設ケル諸演技ヲ縱觀セシム

第十五條 療病院ニ献金セザル者モ此入場券ヲ買テ所持スレバ

來觀勝手タル可シ

但此券ハ每區ノ區長ニ渡シ置ベシ依テ區長ニ往テ買取ベ

シ亦當日假療病院門前ニテモコレヲ賣可シ

第十六條 饗應終レバ随意ニ退出スヘシ

右之通候事

壬申十月

京都療病院

明治三十二年九月九日新聞第...号

○廳聞

過日御達有之候通新聞紙ヲ讀事ハ都而開化ニ鴻益アル儀ニ付先達而ヨリ當区内ニモ諸新聞一順ハ学校ニ備置一覽致シ候様末々迄相達置候得共昇校ヲ大儀ニ存候ヨリ自然志アル輩モ一覽不致様相成既ニ区内其設アリナカラ區戸長教師ノ一見耳ニテ打過且町々傳達致候ハ、時々ノ事故伍長等ヨリ唯順々看過シ候迄ニテ意義ヲ解<sup>ゲ</sup>兼可申依之御布告張出場同様更ニ学校ノ近辺ニ新聞張出シ場ヲ取設申度尤往来ノ妨ケニ不相成様可仕候此段相伺申候也  
壬申十一月  
東第拾三區  
區長 山片平右工門

汎告

浦谷義春譯述

西洋新藥方選 二篇

吐劑部、鎮嘔劑部、  
發汗劑部、利尿劑部、

此書ハ泰西各医ノ研究シタル新方ヲ抄譯シテ記載シタルモノニシテ、從來病門ヲ揚ケ方劑ヲ記スモノハ、初心ニ使用ノ如シト虽トエ、療投劑ノ際ニ當ツテ一病門毎ニ數方有テ、反テ迷誤ヲ生シ易シ、此篇ハ其劑方ヲ強壯劑、變質劑、等ニ區別ス、故ニ刀圭ノ士患者ニ遇テ其病理ヲ明察シ、而后各方劑下ノ主治ニ照準シテ摘用シ玉ハ、治病掌ヲ指スニ至ラン

三篇續出

發行書肆

大阪心齋橋通唐物町  
本林 太助  
同長堀橋南詰  
眞部 武助  
同心齋橋筋南久室寺町  
丸家 善藏

明治三十二年九月九日 大阪新聞第...号



明治五年壬申年十一月十六日  
 西曆一千八百八十七年十二月十六日  
 本日晴  
 寒暖計  
 三十度

見六五... 由上... 大阪新開... 〇三

| 物價表   |     |
|-------|-----|
| 米     | 堂鳩濱 |
| 櫻津    |     |
| 肥後    |     |
| 筑前    |     |
| 茶     | 百斤  |
| 酒     | 拾貳  |
| 鹽     | 百俵  |
| 蠶     | 百斤  |
| 蠟     | 百斤  |
| 錫     | 百斤  |
| 生糸    | 百斤  |
| 昆布    | 百斤  |
| 寒天    | 百斤  |
| 書籍會社  |     |
| 青湖堂   |     |
| 村上勘兵衛 |     |
| 村上出店  |     |

伏テ冀フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ  
 本局及ヒ撰集明ノ寄ヒ... 素志ヲ助ケ至ハハ事ヲ...  
 投書ハ必ス顯名ニテ可被遺尤ニ是社ノ心得也...  
 〇望ニヨテ出版スル内... 諸品賣買... 新店開キ  
 △關西... 會社引札... 其他諸間... 披露... 諸君...  
 本局 青湖堂 村上勘兵衛 村上出店

隔日發兌 大阪新聞 第六十號

布令

市郡壯年者共從來素人角力ト唱へ本務之業體ヲ廢シ  
 所々遊歷間々爭鬪ヲ好ミ遊蕩ヲ事トシ世ヲ渡ル者ア  
 リ右八人々有用之職業ニ就キ遊手徒食ノ徒ナカラシ  
 ムルノ今日有間敷所行ニ付自今差止候事  
 右之趣管内無洩相達ルモノ也

十一月 大阪府權知事渡邊昇

明治五年壬申年十一月十六日 大阪新開...

住吉郡第一區平野郷脊戸口町

大谷利兵衛倅

市松

其方儀父利兵衛眼病相煩<sup>ワツ</sup>ヒ家産相傾<sup>カクム</sup>キ候折柄母病死  
イタシ父之力為ニ氣鬱<sup>キカツ</sup>シ職業ヲ<sup>ナシ</sup>擱<sup>ナシ</sup>キ候ニ付兄嘉兵工  
ト共ニ專ラ農業ヲ<sup>ハタ</sup>励<sup>ハタ</sup>ミ追々田地ヲ買入レ父ノ鬱氣ヲ  
慰<sup>ナシ</sup>メ耕作ノ暇ニハ瀬戸物賣鬻<sup>ウツ</sup>シ寸陰ヲ惜<sup>オソシ</sup>ミ励精ヲ以  
相應ノ家産ヲ得候処元來酒酌ノ僻<sup>クセ</sup>アル父モ其行状ニ  
感シ至テ穩和ニ相成家内睦<sup>ムツ</sup>敷<sup>シ</sup>相暮<sup>シ</sup>候段全ク孝心ノ  
致ス處神妙ノ至ニ候依之為褒美金千足遣之候事

○或人西京ニテ粟州楯縫郡本庄村通傳寺住僧某ニ逢  
ヒシニ其僧ノ<sup>ハナレ</sup>話ニ北條縣管下作州津山住百姓馬之丞  
ト云者其性悖朴ナル者ナリシカ近來貧窮ノ餘リニヤ人  
ノ物品ヲ盜<sup>ヌ</sup>ミ其贓物ヲ他所ニ持行キ賣拂ハントセシ  
カ計ラスモ賣先ニテ露顯シ終ニ縲<sup>ハ</sup>綆<sup>ノ</sup>身トナレリ然  
ルニ其妻ト娘ト之ヲ聞キ驚<sup>オドロキ</sup>然<sup>シ</sup>寢食ヲ時ニセス唯<sup>カ</sup>哀<sup>レ</sup>嘆<sup>ク</sup>  
ニ堪<sup>ハ</sup>サリシカ相共ニ死ヲ決<sup>シ</sup>テ自ラ辜<sup>ツ</sup>人<sup>ナ</sup>リト訴<sup>ヘ</sup>馬  
之丞カ罪戾ヲ免<sup>カ</sup>レ<sup>ン</sup>コトヲ祈<sup>リ</sup>即チ遺書ヲ認<sup>メ</sup>兩  
人共ニ自害セシトソ其遺文ニ曰此文一字一點加除セ  
寫ス

一筆示しりち、馬之丞此たび御うさんにて御上  
 さぬのほくろふ、相かりおそまかふくそんし此  
 ぎハ馬之丞にてハ無御座わくくにて座々あ  
 ぐまいぶこかいとハいつそりいよくわく  
 してはざん何とぞ御上とぬの法をさけ下した  
 まそり馬の丞をこひてはめくかへくと下はふ  
 一江と法ねがひたてまつりたまここ馬の丞此き  
 んねんハちろぶとかん志やうて上はのほせり  
 何やら相まかり不申まをくおそれおふくまぢかい  
 の事ハ以とも何とぞ法めん可と下はうとがみの

ぎハ馬の丞にてハ無御座わくく馬の丞法うさんもら  
 けめくかへく可と下はびうんとの由へ志んる  
 以中こせこいとくくれはふふ御たのい中上りし  
 ままといろくと馬の丞をたまりちあるうせは  
 だん御まとりやハ御ねがみのとふり御たのみト  
 上り

馬の丞  
 つま ちう  
 むすめ あきれ

つ山御やくん中さぬ

右ノ遺書ヲ認メ置キ親子共ニ自害シ妻ふうハ即死娘  
 あさのハ九死一生ノ際<sup>キハ</sup>其苦痛ヲ堪へ前ノ遺書ヲ以テ

這ッ、隣家ニ至リシカ最早言語ヲ發スル能ハサレト  
爺ノ將來ヲ依頼スル心ニヤ自分ノ乳ヲユヒサシ隣家  
ノ人ニ向ヒ合掌シ其儘斃死セシトゾ斯ニ於テ其村人  
前ノ遺文ヲ縣廳ニ差出セシニ縣廳ニテ貞婦孝兒ノ志ヲ  
感歎セラレ馬之丞ヲ釋シ更ニ其村人ニ命シ死亡兩人  
ノ爲ニ一ノ墳墓ヲ建テ遣スベシト村人コノ命ヲ奉シ  
速ニ一ノ墳塚ヲ建立シ且又村人等相計リ兩人ノ爲ノ  
ニ彼遺書ヲ標シ四方ノ人々ニ詩歌ヲ乞ヒ集ノ之ヲ上  
木シ一冊トナシ彼ノ薰名ヲ世ニ流遺セント企テシニ  
最早前集ハ編成今ヤ後集ヲアツムルニ我モ亦周旋ス

ト云ヘリ

往昔漢文帝ノ時淳于公ト云者罪アリ刑ニ當ラレン  
トス其女緹縈上書シテ曰死者復生クヘカラス刑者  
復屬スヘカラス願クハ宦婢ト爲ツテ父ノ刑ヲ贖ハ  
ント上此意ヲ憐レシ詔シテ肉刑ヲ除クト此事諸書  
ニ載記スル所也今此ノあさの死ヲ以テ父ノ刑ニ代  
ル其事不同ト雖トモ其孝ノ道一ナリ然ルニ馬之丞  
ナル者貧窮ノ餘リトハ云ヒナカラ斯ル惡業ヲ爲シ  
終ニ妻子ヲシテ自死セシム憐ムヘク又慎ムヘキニ  
非ズヤ

○名東縣下津田浦宗二郎ト云エル船頭本月二日夜大阪ヨリ歸帆ノ節攝洲兵庫沖ト一ノ谷ノ間ニテ海賊四人小船ニテ押來リ抜刀ニテ乘移リ金子差出ス可キ由強談ニ及ハレシニ歸國ノ折柄ナル故小遣金壹兩貳分計り残シ有リシヲ奪取荷物ハ荒荷ナル故掠奪ニ及ハスニテ去レリトゾ又十月末頃同所駒ヶ林ニテ同州國藏船ト云エルニモ海賊襲フテ金子八拾兩餘リ奪ヒ取ラレシ由風聞アリ

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始ノ總テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓スレドモ私ノ遺恨等ヲ以人ヲ謗リ或ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書飾シ且無根ノ流説等ニテ入ノ損害ニ關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フシ尤社中心得迄ニ紙上ニ其名ヲ記セズ上梓ノ上エハ悉ク燒棄可申候若文中齟齬ノ事アラバ公明ノ討論ヲ遂ベ顯名ニテ報答アラハ早速出版スヘシ統テ投書ニ付テ議論相生スルトモ當社ニハ關係致サズ候

社中敬白

明治西曆一千八百九十一年十一月廿日  
 壬申年十月廿日  
 本日本日  
 寒暖計  
 二十八度

物價日表

堂嶋濱  
 授津  
 肥後  
 筑前  
 水油石

開商社商品時價

酒拾駄 銘 四十五系  
 地野 四十系  
 下野 三十系  
 塩百俵 春田十三系  
 アコ北系  
 茶百斤 大頭 五十七系  
 頭 四十二系  
 子鰯 一田二十系  
 鰯粉 九十五系  
 晒蠟百斤 地廻十六系  
 登十五系

黑砂糖三嶋 四系 廿五系  
 百斤 五系 十七系  
 綿金鹿雨 坂士七百目  
 百斤 阪丹七百目  
 木綿豫 四十二系  
 純銅百斤 二十二系  
 生糸  
 昆布 百石 八百五十系  
 三石 三系 七十五系  
 寒天 千本 四系 三十系  
 六系 七十系

伏テ眞フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ  
 本局及ヒ撰集所ニ寄セ社中ノ素志ヲ助ケ至ハンコヲ但シ  
 投書ニハ必ラス住所姓名ヲ載セ玉 フベシ無根ノ説ヲ恐ル故ナリ  
 ○望ニヨツテ出版スル件 △諸 品賣買 △新店開キ  
 △觀セモノ集會等引札 其他 世間ニ披露事件總テ應其望  
 出版一行ハ三字ニ付 定價五 銭宛ニテ引請可申候

本局 本學 四丁目 書籍會社  
 分社 長州下關 書籍會社  
 大阪 村上勘兵衛  
 西京 村上勘兵衛  
 東京 早橋川瀬石丁角  
 諸縣 村上出店

隔日發兌

大阪新聞

第六十一號

布令

當節一種ノ流行病ニ係リ四足疲水涎ヲ流シ暫時ニ斃  
 ル、犬有之由右死犬之腐敗氣動モスレバ人ニ傳染ス  
 ルノ患アリ付而ハ右等ノ犬見當候ハ、早速郊外へ持  
 出シ燒棄ベシ万一河流ニ投ジ候杯不心得之者有之ニ  
 於テハ此度答方可申付事  
 右之趣管内無洩相達ルモノ也

壬申十一月 大阪府推知事渡邊昇

西成郡第一區勝間村

浅井佐助 伴岩吉

其方儀家産兼テ不如意ノ上母拾ケ年来病ニ卧シ愈難  
澁ニ及候ニ付若年ノ頃ヨリ心ヲ遊藝ニ寄セズ青物荷  
賣ノ家業出精聊ヅ、ノ儲錢イタシ夜ハ母ヲ撫摩シテ  
其病苦ヲ療シ食物相好ミ候時ハ身ヲ漁シ或ハ儲錢ノ  
内ヲ以相辨ジ大切ニイタシ候得共終ニ死亡就テハ兼  
テ非常ノ手當トシテ貯置候金子ヲ以テ葬式ノ入費ヲ  
資ケ無滞亡母見送り猶父ニモ孝心相仕へ候段若年ノ  
身トシテ兼テ心得方宜敷可感事ニ候依之為褒美金千

足遣之候事

○東大組第十三區北濱五丁目洋医目野則義男哲之輔  
ト云ルハ當年十八歳ナルニ稚嬰ノ刺乳母ナルモノ、  
過千ニテ襁褓ノ中ヨリ瞽者トナレリシハ憐ム可キニ  
堪ヘタリ然ルニ天生ノ才質自ラ棄ズシテ歐羅ノ言語  
学ヲ志シ二三年前ヨリ勉強日夜ニ怠ラザリシカ開成  
處ノ教師グリ<sup>ン</sup>氏モ情ノ篤キト積習ノ功アルヲ感シ  
是ニ英國龍動府ノ盲院ニアル處ノ凸字書ヲ以テ讀書  
ヲ成サシメバ一層学立ヲ扶ク可シト語ラヒシカ親則  
義大ニ喜悅シ數百金ヲグリ<sup>ン</sup>氏ニ依頼シ終ニ凸字ノ

書若干部ヲ得テヨリ專此項ハ寢食ヲモ忘レテ讀書セ  
ル由實ニ後世畏ル可シトス

○投書

或ル人一日堂島緑リ橋辺ニ急用アリテ馬ヲ奔ラシ圖  
ラズ肥後橋ヲ渡ラントセシニ普請中ナレバ西へ回リ  
筑前橋ヲ過又東ニ折レ渡辺橋ヲ越ントセシニ又普請  
中ナリ依テ再ヒ西へ行キ田蓑橋ニ向ヒシニ是亦普請  
中ナレバ更ニ馬首ヲ西シテ玉江橋ヲ渡リ所用ヲ達セ  
シトゾ斯ク東西狼狽シテ時間ヲ費シ奔馬ノ驗ナキモ  
全ク其入右三橋一時普請中ナルヲ知ラザレバナリ抑

近來市中通行人ノ便宜ヲ得セシメンガ為厚キ御世話  
アリテ第一ニポリスヲ置カレ又往來ノ妨ゲトナル物  
ハ捻テ之レヲ除カシメ追々道路ヲ廣ゲ加之夜中毎街  
玻璃燈ヲ点スル等皆以テ往來ノ便利ヲ為スニアリ然  
ルニ斯ル不便ノ一事アルハ遺憾ナラズヤ何トゾ何月  
何日ヨリ何橋ハ普請中ニテ假橋アリ何橋ハ渡シ船ア  
リ何橋ハ兩ラ之レナキナト其最寄々ニ建札又ハ張  
紙ニテ其始末ヲ衆人キ告知シタキモノナリ或ハ新聞  
紙ニモ之ヲ記シナバ車馬ハ勿論通行人ノ便宜トナリ  
前條ノ如キ狼狽ハ絶テナカルベシ

明治五年申年 大阪新聞第三号



○鞞上通二丁目中島重助弟巳之助ト云モノ本月十二  
日夜面体ヲ包ミ江戸堀北通五丁目小林治兵五方工押  
入白双ヲ以テ家内ノ者ヲ威シ聊カ金子ヲ奪ヒ尚ホ二  
階ニ登ルニ隣家ノ者聞付ケ西取締第二分局エ訴フ早  
速邏卒來テ家ノ表裏ヲ囲ム賊其逃レ難キヲ知り火ヲ  
放ツ其時取締伍長井田惇直千ニ二階ニ登ル賊白双ヲ  
以テ向フト雖トモ忽千取押エ卒ヲ呼テ縛サシメ又燃  
立ツ火ヲモ鎮メタリトゾ嗚呼井田氏被創ヲモ不厭奏  
功アリシハ其任ヲ恥カシメズト云ベシ

從伊勢投書

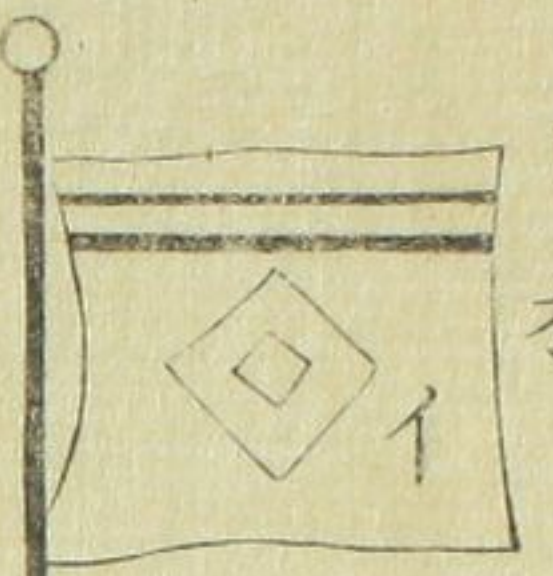
皇太神宮ヲ尊信崇奉シ各自參拜祈請スルハ全國人民  
ノ不可止ノ誠情ニ付今度神宮司廳ヨリ教部省エ届濟  
ニテ壯大ナル御神樂殿御供殿ヲ建築シ人民ノ願ニ任  
テ御神樂ヲ奏シ御供ヲ奉ルベキヨシ是敬神ノ大教ヲ  
擴充ノ御趣意ニ基キタルモノナリ今之ヲ新聞紙ニ載  
テ參拜祈請ヲ願フ者ニ告ク  
○本月四日ヨリ六日迄玉造リニテ招魂祭アリ相撲狂  
言花火等ノ催シアリテ諸人羣參セリ  
○五十二号ニ司法權判事ト記シタルハ權大判事ノ誤

明治五十二年  
大阪新聞第六十号

リナリ粗漏ノ罪ヲ斯ニ謝ス

御披露

目標



東京行郵便蒸氣乗  
船人切手賣出シ所

毎月三八ノ日

安治川沖ヨリ出港

右東京行御船客御便利御都合御乗組相成候様周旋  
仕候間多少之御人數ニ不限御用向之程偏奉希上候

十一月

大阪江戸堀北通壹丁目

猪飼九兵衛

各々様

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始ノ總テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ  
旨趣ニ適フモノハ萃テ上梓スレドモ私ノ遺恨等ヲ以人ヲ謗リ或  
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書節シ且無根ノ流説等ニテ人ノ損害ニ  
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フニ尤社中心得違テ紙上ニ其名ヲ  
記セズ上梓ノ上エハ悉ク燒棄可申候若文中齟齬ノ事ヲラバ公明  
ノ討論ヲ遂ベ顯名ニテ報答アラハ早速出版スヘシ統テ投書ニ付テ議論  
相生スルトモ當社ニハ關係致サズ候

社中敬白

明治五年

大坂新聞

五

明治西曆一千八百八十七年五月二十七日  
 申年十二月廿二日  
 本日晴  
 寒暖計  
 三十度

隔日發兌  
**大阪新聞**  
 第六十二號

布令

湯浴ハ身體ヲ健康ニスルノ一端ニ屬スベキ事ニ付浴  
 ヲ造作勉メテ清潔鮮麗ヲ主トシ第一熱度之當否ニ  
 注意シ人身ノ健康ヲ保全スル様其職業ノ者互ニ可心  
 掛之處從來ノ風習トシテ町々ニ請場ヲ設ケ新規開業  
 不相成杯株式同様ノ舊弊有之自然營業手狹ニ相成リ  
 熱度ノ當否ヲモ不問又浴室造構之美惡ニモ不拘必ス  
 湯錢ヲ一定スルヨリ人ヲシテ失度ノ湯ニ浴シ不潔之

物價日表

|     |         |       |           |
|-----|---------|-------|-----------|
| 堂嶋濱 | 開商社商品時價 | 黑砂糖三嶋 | 四角廿五錢     |
| 撰津  | 酒拾歌     | 綿     | 金吉兩       |
| 肥後  | 塩百俵     | 木綿    | 百反 雲 豫    |
| 筑前  | 茶百斤     | 純銅    | 百斤        |
| 水油石 | 于鰯 羽鰯 鮪 | 生糸    | 百石        |
|     | 晒蠟百斤    | 昆布    | 百石 三石 刺京極 |
|     |         | 寒天    | 十本        |

伏テ眞フ四方同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ  
 本局及ヒ撰集所ニ寄セ社中ノ素志ヲ助メハンコナ但シ  
 投書ニ必ラス住所姓名ヲ載セ玉フベシ無根ノ説ヲ恐ル故ナリ  
 ○望ニヨツテ出版スル件 △諸 品賣買 △新店開キ  
 △觀セモノ集會寺引札 其他 世間ニ披露事件總テ應其望  
 出版一行ハ三宇ニ付 定價五 錢宛ニテ引請可申候

本局 本學町  
 分社 長州下関 書籍會社  
 取 大阪 町々  
 次 西京 村上勘兵衛  
 東京 日本橋川瀬石丁角  
 諸縣 村上出店

室ニ入ラシムル等ノ弊害有之甚以不可然事ニ候全體  
 湯ニハ適度アリテ苦過度ノ熱湯ニ浴スル時ハ血液ヲ  
 沸騰シ種々ノ病根ヲ醸シ健康ヲ害スル事不少モノナ  
 レバ向後左ニ掲グル條件屹度相心得猶造作等不潔無  
 レ之様銘々心ヲ用ヒ營業可致事

但此條件ハ浴場ニ掲ケ湯浴人へ可相示事

浴法心得

第一浴スル時刻ハ空腹ノ時ヲ最好トス

第二食後一字間ヲ経ザレハ決シテ浴スベカラズ又浴

後直ニ寐床ニ入ルベカラス

第三尋常之浴度九十度ヨリ九十四度迄ノ温度ヲ用ユ

ベシ

第四虚弱ノ人發汗ノ爲メ浴スルニハ九十四度ヨリ百

度ニ及ブモ可ナリ

第五浴スル時間ハ二十分時ヲ度トス長クモ半字ヲ過

グベカラズ

第六浴後身體舐ク拭ヒ乾カスベシ

營業心得

一洗場其外不潔無之様掃除イタシ尿ヲルモノ等嚴重

禁止スベキ事

一男女浴所ノ區別嚴重境界可相立ハ勿論往來ヨリ見  
透スカシニ不相成様修理可致事

一向後新規開業並ニ湯錢之取極ノ銘々可為勝手事  
一私ニ仲間ヲ結ヒ人ノ生業ヲ束縛スル所行堅ク禁止  
之事

一火之元入念可致事

右之趣管内無洩相達スルモノ也

壬申 十一月 大阪府權知事渡邊昇

住吉郡九番組

戶長 福井治左工門

廳聞

其方儀勤役以來一時米價騰貴タカクナルイタシ候砌ハ數人ノ貧  
窮モノ江米穀ヲ分テ典工アタ或ハ難澁者ノ家ニ凶車等有  
之節ハ相應ノ資用ヲ典工葬式等為營イトナヒ其外道路橋梁ノ  
普請等ニハ私財ヲ以助イタシ役儀勵精神妙ノ事ニ候  
依之為褒美袴地料金ニ圓遣之候事

東大組第廿一區南久太郎町三丁目若江六兵工ト云累  
代醬油製造ヲ業トスル家アリ去月中丹波ヨリ申世ニ  
戈ナル下男ヲ召抱タルニ至極篤實ニシテ朝夕ヨク勉  
強セリ然ルニ本月十二日例ノ如ク右製造場工出沸騰

シタル醬油ヲ大桶ニ移入ントシテ誤テソノ蓋ヲ落セ  
シ故ニ自ラコレヲ執ラントシテ其身桶中ニ没ス傍人  
愕キ急ニ引揚レトモ己ニ身體湯爛シテ即死セリトゾ

○美濃大垣ヨリ郵便ヲ以投書ノ俛ヲ記ス

今般說教ニ神官ハ死後魂魄高天ノ原ニ生スト說キ僧  
侶ハ西方極樂ニ往來スト說ク然ルトキハ天ニ昇ルカ  
西方ニ往クカ方向ヲ失フベシ何レニ向テ往クトシテ  
可ナラン且ツ仏道ニテハ天ハ欲界トテ西方極樂ノ次  
ノ処トス然ルトキハ皇國ノ神々ノ在セル所ハ西方極  
樂ヨリモ劣タル所トスルカ伊弉諾尊伊弉册ノ尊ト女

神男神マシマス所ナレバ佛ノ所謂ル即欲界ナリ如此  
ニシテ敬神ノ御旨趣ニ叶エルヤ如何

○ 投書

西洋各國何事モ平均セサルナシ國中ノ人口ヲ一万里  
ニ平均シテ大略ヲ知り國債ヲ民口ニ平均シ或ハ死生  
ヲ平均シテ其繁殖ヲ知ル本邦モ此平均ニ關係スル物  
マ、アリ第一交易ノ物品ハ各國ノ有無ヲ平均シ華族  
ト平民ト婚姻ヲ許シ穢多非人ヲ平民ニ加エルハ人倫  
尊卑ヲ平均スルナリ又戸毎ニ番号ヲ記シテ丁人借家  
人ノ輕重ヲ平均シ長キ髮ヲ切テ月代ト平均スルモ亦

因循固陋ト洋風偏執ト平均スルノ意ナラン人々宜ク注意アリタシ

○<sup>オーストリア</sup>地利國博覽會ニ出ス所ノ皇國產物ノ内東京ニ聚タル分本月十九日 天覽<sup>テ</sup>日ヨリ廿二日迄各省

官員廿三日府縣官員<sup>カ</sup>残ラス并見差<sup>サシ</sup>詐<sup>ツク</sup>サル然ルニ<sup>ニ</sup>文部省六等出仕田中芳男博覽會事務官ヲ任命シ右產物ヲ

守護シテ十二月廿五日彼國工出艦セララル、ヨシ  
十四日運上所輸入品

○手拭二百五十センド ○カルペット三九 ○鉄製一箱百枚  
○西洋傘百二十拾本 ○毛織敷モノ一箱 ○首卷一箱

揭示 拾物

一 莚<sup>シ</sup>センハカタ紙入中ニ金二兩一分<sup>十錢</sup>入土月十日 菅原一番丁ニテ  
一金貨五圓 十月十四日夜江戸堀犬齋<sup>バシ</sup>ニテ  
右之品拾取訴出候者有之間心當リノ者ハ當府工可申  
出車  
大阪府

廣告

當社新聞明廿三日ヨリ同廿八日迄每日出版仕候  
當歲末來ル廿九日ヨリ休暇來明治六年ハ第一月五日  
迄休暇同六日ヨリ出版仕候

社中白

明治五年五月二十七日 西曆一千八百八十七年  
 申年二月二十三日 舊曆  
 本日晴 寒暖計 三十度

隔日發兌 大阪新聞 第六十三號

布令

病毒ノ世ニ行ハル、其種類多キ中ニ人身ノ害ヲナスハ、  
 儼毒其最タルモノニシテ甚敷ハ餘毒ヲ子孫ニ及シ  
 無量ノ患苦ヲ受ケシムルニ至ル其源由多クハ遊妓ヨ  
 リ流傳スルニヨル此患ヲ除クハ其源ヲ防ニアラサレ  
 ハ能ハズ故ニ昨十月松島ニ於テ驅儼院ヲ設ケ普ク遊  
 妓ヲ檢査シ儼氣コレアル者ハ悉ク治療イタシ遣ス處  
 昨冬癩業以來全癒ヲ得ルモノ一千三百十八人方今病  
 ニ罹リ在ルモノ其數四分ノ一ニ減セリ殆ド奏功ノ期  
 ニ近シトイヘドモ抑又世上間々此流毒ニ罹ルモノア

明治五年五月二十七日 西曆一千八百八十七年  
 申年二月二十三日 舊曆

物價表

|    |     |         |     |       |
|----|-----|---------|-----|-------|
| 米  | 堂嶋濱 | 開商社商品時價 | 黑砂糖 | 四角三十七 |
| 振津 | 酒拾貳 | 銘五兩     | 綿   | 阪上七百五 |
| 肥後 | 塩百俵 | 洋       | 水綿  | 四十二   |
| 筑前 | 茶百斤 | 大頭六十枚   | 純綿  | 二十一   |
| 昆布 | 干鰯  | 同二十     | 生糸  | 七百五   |
| 水油 | 晒鱈  | 九十七     | 昆布  | 七百五   |
|    |     |         | 寒天  | 四百    |

伏テ冀フ四万同好ノ君子何事ニヨラス新説異聞アラハ  
 本局及ヒ撰集明工寄ヒ社中、素志ヲ助ケ至ハハ事ヲ任  
 投書ハ必、顯名ニテ可被遺尤モ是社ノ心得進ニ任極後ハ  
 燒棄可申候 ○望ニヨラ出板スル件ハ請ニ買ハ新書開キ  
 本局 幸早ニ  
 撰集所 長瀬井池濱東  
 青湖堂 明々  
 村上 兵衛  
 村上 兵衛

本局 幸早ニ  
 撰集所 長瀬井池濱東  
 青湖堂 明々  
 村上 兵衛  
 村上 兵衛



リテ其子孫...又忽ニスベカラズ或ハ医藥其當ヲ得ス或ハ積用ノ乏  
 敷ヨリ治療央ニシテ瘡瘵シ又ハ一時小瘡ヲ得ルモ病  
 根全ク除キ尽サ、ルヨリ其毒再ヒ發動シ終身ノ患ヒ  
 ヲ醸ス其例少ナシトセズ此等所謂餘毒ヲ子孫ニ及ス  
 モノニシテ患苦只一身ニ止ラス子孫ヲシテ不具ノ瘡  
 人トナスニ至リ近クハ子孫ニ對シ不慈トナリ推シテ  
 ハ家ノ衰微零落ヲモ來スベシ實ニ可恐可慎事ナラス  
 ヤ依之此度更ニ治療熟達ノ医員ヲ加増シ凡儻毒ニ罹  
 ルモノハ誰彼ニ不拘相當ノ藥料而已ヲ以治療致シ遣  
 シ候條男子婦人ノ差別ナク其病ノ萌アラバ孳々忌憚  
 慙愧ノ心ヲイダカス速ニ驅儻院エ申出治療ヲ乞ヒ天  
 壽ヲ安康ニ保チ職業ヲ壯健ニ勉ル心掛肝要タルベキ

モノ也

但藥代之外別ニ謝禮等一切差出ニ不及尤身貧窮ニ  
 シテ藥代差出ス事ヲ不得モノハ詮儀ノ上事情ニヨ  
 リ無料ニテ治療イタシ可遣事

右之趣管内無洩相達ルモノ也

壬申

十二月

大阪府權知事渡邊昇

○ 聽聞

住吉郡七番組

戸長 三上治郎左門

其方儀勤役以來兼而心得方宜敷郷中貧窮ノ者有之節  
 ハ私賤ヲ以テ折々之ヲ救助シ殊ニ無告ノ窮民七十有

用治五...申立  
 大阪府...第...  
 戸長 三上治郎左門

余ノもろト申モノ工始終衣食ヲ贈リ飢寒ヲ凌カシメ  
其外郷中ニ對シ聊カ役威ヲ負フノ振舞ナク兼々其身  
ヲ謙シ萬事示方宜敷且風俗ヲ引直サンタメ小学建校  
ノ企等其行狀可感事ニ候依之爲褒義袴地料金千疋遣  
之候事

○本月十二日夜鎮臺用地玉造枚山ト云所ノ藪中ニ衣  
類數點隠レ有之趣訴エ出ルモノアリテ邏卒江口壯吉  
加藤利繼出張兩人東西ニ分レ様子ヲ窺ヒ居リシニ夜  
六時過キ賊徒竊ニ右衣類ヲ奪ヒ出サントスルヲ見テ  
江口壯吉馳付一言應答ノ間モナク組付キシニ賊ハ

案内ノ強カニテ互ニ揉合柏子ニ高サ二丈餘ノ嵩上ヨ  
リ組合シ倂轉ヒ落テ上トナリ下トナリ双方カヲ極メ  
テ辛ク折柄西手ニ張番シタル加藤利繼ト此近隣ニ住  
居スル大阪府官員森山泰モ物音聞付ケ馳來リ終ニ捕  
縛ニ及ベリ賊ハ美濃大坂農民定吉粹己之助ト云世一才  
ニ相成ルモノ、由同夜江戸堀ニテモ抜刀ノ賊ヲ召捕  
奏功セシ事件既ニ新聞第六十一号ニ出セリ一夜ニ兩  
強盜ヲ手際ヨク捕押エシハ實ニ可賞働キト云ハンカ

○  
英國ロントン府在留人ヨリ來書中ニ云當府ハ世界

明治五年 大阪府新聞第六十一号

第一ノ大都會ニテ萬事聞所ヨリハ盛大ニ有之候就中路妓ノ多キ車驚クニ堪タリ其數凡二十余万ナリト云  
 夜間少シク繁昌ノ街ヲ遊歩致候エバ必ス數名ノ凶誘ニ會ス故ニ務メテ之ヲ避ク蓋シ開化ノ進歩スルニ應  
 シテ交際ノ弊モ亦タ長スルモノ歟 同書中ニ 今日南真助  
 原ハ東伏見宮從者ニテ渡海 妻ヲ娶リ本式ニ替婚ノ禮ヲ  
 當時ハバンクノ執事ナリ 行フタリ蜂須賀小室ノ細君等其外其祝宴ニ會セリ是  
 コノ中外人民交替ノ嚆矢ナルベシ

弟九月廿一日

皇曆申八月十九日ニテ

○ 投書

從來府下ニ於テ放鳥放龜ト唱エ街頭ニテ商フ者アリ  
 近來ハ燕マテヲ捕テ賣モノアリ然ルヲ放生トテ價  
 ヲ出シテ放チ遣ルモノアリ是ヲ放ツモノアル故ニ是  
 ヲ捕フモノアリ隨テ放テハ隨テ捕フ是誠ニ何ノ心ソ  
 ヤ是ヲ放ツモノ却テ罪ヲ作ルナリ文明ノ世カ、ル無  
 慙ノ業ヲナスモノハ嚴禁アリタキ者ナリ

○南久太郎街第三丁目舊檢校菊高正雄一ナル者アリ  
 能ク方今ノ形勢時情ヲ察シ彼ノ從來淫癖ノ醜曲ヲ去  
 リ勉メテ正實ノ曲ヲ撰ヒ以テ婦女子ニ授ケシ処近頃  
 更ニ又一曲ヲ設ケ題シテ要尽シト云其歌古人ノ作ニ

明治五十四年

係ルト雖モ菊高子又コレニ増補シ始テ吟シ調ル者也  
 琴三弦ハ都テ戲弄ノ一具ト雖モ正實ノ言ヲ以テスレ  
 ハ又勸善ノ一端ナランカ菊高子ノ如キハ眼ニ物ヲ見  
 スト雖モ速カニ溜風ノ醜曲ヲ改メシハ眼能ク文明ノ  
 域ヲ見開キシモノト云ハンカ其歌左ニ云

仁の要ハ已れ不勝ニあり義の要ハ利を先とせざる  
 ニあり禮の要ハ敬を忘まざるニあり智の要ハ理を  
 窮むるニあり孝の要ハ父母の恩を思ふニあり悌の  
 要ハ順を崇ふニあり忠の要ハ人の事とせざるニ有  
 信の要ハ義ニ移りて守るニ有家の要ハ和するニ有

り和の要ハ惡まざるニ有商賣の要ハ時ヲ計るニ有  
 相談の要ハ我を離るニ有安心の要ハ足る事を知  
 る有都て物事ニ要なきハあらねど人の要ハ此要事  
 を知るが要ニあらん有ける

菊高正雄一吟調

○ 英人ノ話

一日閑ニ乘シテ衆客會話ス甲ナル者一嬰兒ノ寫真像ヲ出シ  
 ス乙ナル者之ヲ觀テ問云是兒ハ誰氏ノ子子<sub>ミトリコ</sub>甲答云是兒ノ  
 父ハ吾父ノ子也ト滿座ノ人其意ヲ解セス千思萬慮スル事一  
 ニ時間一人漸悟リ甲ニ向ヒ拍手シテ云汝ノ子欲ト此英人ノ話謎語ニ  
 似テ其意深密人材ノ銳鈍ヲ試驗スルニ足レリト因テ記焉

明治五十年  
 大正新聞  
 四



布令

府下各町内路傍ニ從來地藏妙見或ハ稻荷道祖神等種々ノ小祠ヲ軒下路次塵埃不潔ノ場所ニ置キ敬神ノ道ニ不叶ノミナラス往來運輸ノ妨ヲナシ或ハ老幼婦女晨夕羣集無用之時閑ヲ費シ時トシテハ賽會ノ爲町内ヨリ金錢取集ル儀モ有之由野鄙ノ風習甚無謂事ニ付自今禁止セシメ候條早々取除可申事

但取除ニ付賣拂之物ハ其區小學校ノ入費ニ供シ其他偶像石佛等買請候者無之類ハ最寄之社寺ニ取片付置可申事

一前條取除候跡地所見合往來ノ妨ニ不相成候場所  
一町内ニ一ヶ所宛塵捨場ヲ設ケ一區内ニ一ヶ所宛

大便所ヲ設可申事

一毎戸軒下ニ竹木ノ垣ヲ設候風習ニ候処右ハ竊盜乞食ノ立寄候防ニ可有之候得共取締向相立候上ハ無用贅物ノミナラズ往來運輸ノ妨ニモ相成候ニ付早々取除可申軒下ト雖モ畢竟道路幅ヲ犯シ候事ニ付可成文往來ノ妨ニ不相成様可致事

右之趣市中并ニ市中接近之郡村無洩相達ルモノ也

壬申十一月

大阪府權知事渡邊昇

○

先月廿日ノ事ナリシガ西成郡高律村住農萩原秀之助ト河州若江郡高井田村勝次郎兩人ニテ西成郡深江村

幸田元三郎方ニテ長大ノ立木ヲ買取り人夫ヲ雇ヒ之  
 ヲ伐ラシムルニ途傍ノ親女群集見物スレバ度々怪  
 我アラン車ヲ制シ幸シテ伐リ倒サントスル折柄同村  
 堤下久助娘をみ妹ト云テ脊負ヒ不圖モ通り掛リ右伐  
 木ノ爲ニ倒壓サレ姉をみハ即死妹をみハ疵ヲ請ケシノ  
 ミニテ命ニハ恙ナカリシトゾ因テ右秀之助勝次郎ノ  
 兩人ハ府廳ニ於テ御取調ノ上畢竟過誤ニ出ルモノナ  
 レバ贖金申付ラレタル由即死セシたみハ誠ニ可憐事  
 ナリ此誤ヲ固ヨリ伐木人ノ責ニアリト雖モ世上多ク  
 小兒ニ小兒ヲ托シ路傍ニ守遊セシムル都鄙共同シ風

習ニテ自然右をみ姉妹ノ如キ災ヲ招クニ至ル又親々  
 不注意ノ責ナキヲ免レズ此度ノ誤チノ如キハ已ニ大  
 木ノ倒レントスルニ望ミテハ人カノ支工留ムヘキ能  
 ハス眞ニ不得止事ナレバ小兒ヲ愛育スル人ハ此方ヨ  
 リ用心シテ常ニ教誨ヲ加エ斯不慮ノ災難ニ罹ラサル  
 様注意アリタキモノナリ

○ 投書

造弊寮御雇外國人ノ「ボーイ」某主人ノ買物ニ行ク毎ニ  
 ニ割或ハ三割ノ上錢ヲトリシニ此事發覺シ同寮ヨリ  
 大阪府ニ引渡サレ當時御調中ノ由外國人召使ニハ免

明治五十年 申年 大阪新聞第...号

能是等ノ惡弊アツテ得意ノ商家ハ殆<sup>ホト</sup>ント困却<sup>コト</sup>スル趣ナリ何トカ嚴重御取締ノ法不相立テハ商人ノ迷惑<sup>コト</sup>ノミナラズ第一御國民ノ外國人ニ對シ斯ク不正ノ所行アルハ御不体裁ノ一端ナランカ

○本月九日午後四字頃西大組新町通梅鉢湯トイユル洗浴室中ニ於テ七十計リノ老婆頓死セリコノ者ハ同所<sup>フロヤ</sup>牛肉店ノ老母ナリシカ其時歸宅ノ遅<sup>遅</sup>キ故小女遊<sup>ユカイ</sup>ノ為メニ出懸シニ最早右死骸湯中ニ浮<sup>ウカ</sup>ヒ居タリトゾ此噂<sup>ウザ</sup>街中ニ滿テ浴客一人モナシト云

因ニ云世間ニ浴湯中ニ於テ死ルモ、往々之レ有リ

皆過度ノ熱湯ニ浴シ血液忽チ頭腦ニ上鬱シ竟ニ死ニ至ル先般官ヨリ布令アリシ浴湯ノ温度ヲ固守シテ浴スレバコノ患アル事ナカル可シ恐ルベキ事ナラズヤ

○當府下從來寒風凜冽ノ夜毎ニ少女等打群<sup>ム</sup>レ橋上或ハ門外ニ立高ク三弦ヲ奏シ或ハ今様ヲ歌フ其形状恰<sup>アツカ</sup>モ乞巧<sup>コウキョウ</sup>ニ似タル所業ヲナス者アリ通俗コレヲ寒誓古ト称ス又淨瑠璃ヲ語ル者大男兒ニシテ往々コノ少女等ニ類スル徒アリ方今各區小學校ノ教導アレバ斯<sup>カ</sup>ル陋習ハ追々相止ムベケレドモ寧口早ク嚴禁ニナリタキ



御披露

一 散髮撫育湯

さんむつあで  
ふりぞー茶

功能

オ一臭氣を去り送上を鎮め不垢を除去光澤  
増一頭瘡并風をのぞく都て兒童用ひて  
尤宜一

用方熱湯にて振出し附る尤茶氣の失る  
までハ幾度ともゆり出し用て可なり完化の  
良業として徳用無類なり

一袋價七厘 大阪勘助島舟津甲

完業所

官浪新七

酒 完  
業 所

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ然テ此ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ  
旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓ムレドモ私ノ遺恨等々以テ人ヲ誘リ或  
ハ不平心ニ托シ非テ理ニ書飾シ且無報ノ流説等ニテハ損善ニ  
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フマシ尤社中心得道ニテ紙上ニ其名ヲ  
記セス上梓ノ上立ハ悉ク燒棄可申候若文中粗語ノ事ニテ公明  
ノ討論ヲ述べ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ自ニ裁論  
相互スルトモ當社ニハ關係致サス候

物價日表

|     |     |         |      |        |
|-----|-----|---------|------|--------|
| 米   | 堂嶋澤 | 開商社商品時價 | 黑砂糖  | 四角三十七  |
| 振津  |     | 酒拾貳     | 綿    | 阪上七百五十 |
| 肥後  |     | 塩百俵     | 本綿   | 四十二    |
| 筑前  |     | 茶百斤     | 純銅百斤 | 二十一    |
| 見南石 |     | 干鰯      | 生糸   |        |
| 水油  |     | 干鰯      | 昆布   |        |
|     |     | 晒鱈      | 寒天   |        |

伏テ其ノ四方同好ノ子何事ニヨラヌ勸諭異聞アハ  
 本局及ヒ撰集明工寄ヒ社中、素志ヲ助ケ至ハ事ヲ出シ  
 投票ハ必ス顯名ニテ可被進志ト是社ノ心得進テ出候後ハ  
 煉菓可申候 ○望ニヨツテ出候スル件ハ請テ買取ル候事  
 本局 長春片池濱  
 撰集所 青湖堂  
 大阪 村上勘兵衛  
 東京 村上勘兵衛  
 下村 上出 店

隔日發兌

大阪新聞

第六十五號

布令

皇靈御追祭御式年左之通被改候事

- 一年 三年 五年
  - 十年 二十年 三十年
  - 四十年 五十年 百年
- 以後百年毎ニ祭之  
 壬申 十一月

大政官

右之通被仰出候間管内無洩相達ルモノ也

明治五年十月廿五日  
 西曆一千八百七十二年十二月廿五日

明治五年十月廿五日  
 大阪新聞第六十五號

壬申十一月

大坂府權知事渡邊昇

布令

僧侶ノ儀ハ布教傳道ノ任ニ堪ヘ候者一寺一院ノ住職タルベキ筈ノ処窮民貧者施物ヲ以粘ロニ充ヌ又爲メ頂髮ヲ剃シ法衣ヲツケ自宅ヲ庵室ナドヨビ做シ教道ノ何事タルヲ知ラズシテ傲然自ラ庵主ト稱スルモノ又ハ免許ヲ得ザル者ニシテ寺院仮寓シ自ラ住職住持ト稱スル者等間々有之趣ニ付此度住職ノ始末取調べ候間管廳之許可弁ニ本寺本山ノ免狀寫相添其宗之年番ニテ取纏來ル廿五日限り當府工可差出事

但寺院數多ニシテ年番壹人ニテ難行届向ハ其最

寄<sup>ヨリ</sup>寺院之内年番之差圖ニテ可取計事

右之趣管内寺院工無洩相達ルモノ也

壬申十一月 大坂府權知事渡邊昇

○ 廳聞 摂州西成郡第一區勝間村東山ノ町

山口六土姪六郎

其方儀幼年ヨリ兩親ヲ亡ヒ伯母六土方エ身ヲ寄<sup>ヨレ</sup>居候処同人從來宿<sup>ス</sup>入ノ上近年病氣ニテ兩手相龜<sup>カ</sup>難<sup>ナシ</sup>澁<sup>シ</sup>イタシ候付テハ飲食浴湯衣類爲<sup>キセカ</sup>着替等ニ至ル迄深切世話イタシ相働右被<sup>ヤ</sup>雇<sup>コ</sup>中モ時間ヲ計リ立帰リ食事等不自由ナク伯母ヲ養ヒ縁談有之モ右養育方心ニ不任ヲ

以相断伯母大切致シ候志神妙ニ候依之爲褒羨金千足遣之候事

○ 投書

遊女營業規則中ニ藝妓ノ賣淫ヲ禁ヒラレタルハ從來京撰ノ藝妓ハ藝ハ兼務ニシテ本務ハ娼妓ト同シケレバナ  
ルベシ左モアラン然レドモ此事其實容易ニ行ハレ難ク已ニ解放以前座着ト唱フルモノ賣淫セサル事トナ  
リシモ唯癩毒検査ヲ免レン爲ニテ一時規則ヲ設ケタ  
レド是迄仕馴レシ賣淫ノ方勝手能ク第一淫情ヲ恣ニ  
シ生活ノ爲ニモヨク一舉兩徳ノ業ナレバ動モスレバ

復古ノ念ヲ生スト雖モ又検査ハ否ヤナリ兩ツ十カラ  
全キヲ得ル事難ク或日妓等三四輩集議シ此困難ヲ脱  
セン事ヲ計ルヲ聞クニ一老妓ノ云ナンデモ是ハオカ  
、リノ御役人ニ和姦ヲ勸メ事成就シタラバ自然ト此  
窮屈ハヤマルニ相違ナカル可シト耳語頻リニシテ一  
同ウナヅキ散乱スルヲ見受タリ老妓ノ奸智可恐景シ  
テ此術中ニ陥ル人アルベシト思ヒシニ或樓ニ於テ此事  
行ハレタルノ明々瞭々タル證ヲ得タリ思フニ如此上  
官負ヨリ規則ヲ破リ彼藝妓等ノ術中ニ陥ル様ニテハ  
此度ノ御規則モ甚覺束ナク又犯セシトテ下ヲ咎ムル

理ナカルベシ實ニ老妓可憎官員ノ拙又可笑斯ク投書  
スル主意ハ一ツニハ老妓等ノ奸ヲ世ニ知ラシメ官員  
ノ拙キヲ戒メン爲ナリ其姓名ヲ知ラント欲スル人ハ  
其趣新聞紙ニ記載アラハ姓名廓名樓名妓名トモ記載  
シ再ヒ投書スベキモノ也

遊廓近傍ノ住

探實樓主人記

○  
備中國上房郡高粱第二區酒造商人佐藤久太郎留主中  
エ本月十五日夜三字頃盜賊謀ビ入色々品物ヲ奪ヒ荷  
作りシテ後一間ニ入苗主番ノ男ニ對シ髻ニ短尺一枚

ク、リ付丈レニ一首ノ發句アリ

世ニモチキ人モアラス馬鹿且那

右様ニ書記シ置立出ントセシ折柄不圖老人目ヲ覺シ  
盜人ヨ、ト呼聲ニ驚キ盜品ハ其俵捨置逃去レリトゾ

○  
余三十年前江戸ニ遊ヒ尔後僻境ニ消光シテ開化ノ何  
物タルヲ知ラズ今年偶々上京シテ開化ノ実景ヲ目撃  
シテ始テ旧習ヲ洗濯セリ歡喜ノ餘リ一絶ヲ賦ス不知  
世間余カ喜ビニ同シキ者幾人アリヤ

今日廟堂參議臣 往時渾唱攘夷人  
笑吾痴夢一朝覺 始作文明開化民  
山陽南夢隱士

投書

通用紙幣之中聊カ磨滅或ハ墨付等アル共其品質製ナ  
ラズハ滞<sup>トコ</sup>ナク通用致ス可シト再三官達<sup>カ</sup>アリシニ尚ホ  
両替業ノ者コレヲ用ヒズ僅<sup>ツ</sup>カ一二点ノ汚穢<sup>ヨ</sup>アルモ取  
引セサルヨリ一般ノ差支エトナレリ真ニ官令ニ悖<sup>モト</sup>レル  
ト謂可シ何卒嚴令アリタキ事也

揭示 拾物之寫

一 織物金入申三分札三枚貳分札四枚一朱札五枚土月十七日  
暮六時頃慶町三丁目ニテ拾取新出ル  
一小倉男帶一筋 土月十七日夕六時久空寺町渡辺筋ニ拾取新出

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ終テ世ニ益アル事ニシテ自然勸善懲惡ノ  
旨趣ニ適フモノハ弊テ上梓ムレドモ私ノ遺恨等ヲ以テ人ヲ謗リ或  
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書飾シ且無根ノ流説等ヲテ人ノ損害ニ  
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ王フベシ尤社中心得達ニテ紙上ニ其名ヲ  
記セズ上梓ノ上立ハ悉ク燒棄可申候若文中粗語ノ事アラバ公明  
ノ討論ヲ述べ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ目ニ議論  
相生スルトモ當社ニハ關係致サス候

社中告白

明治五十年 九月 親民 第百五十五号

明治五年壬申年十二月廿七日  
 西曆一千八百八十七年十二月廿七日  
 本晴 寒暖計 三十度

隔日發兌 大阪新聞 第六十六號

布令

隱賣女嚴禁之儀ハ追々相達有之処府下ノ陋習トシテ  
 貧家娘子又ハ寡婦之類奸婆點媪ノ媒今ヲ以間々密賣  
 ノ所業相働候由甚以不埒ノ儀也全體賣色ヲ欲スルモ  
 ノハ誰彼ヲ不論願出鑑札貫受檢査相濟候上夫々免許  
 ノ場所ニ才イテ公然營業可致事ニ而此般解放ノ遊妓  
 四方ニ分散致候ニ付而ハ別而密賣嚴禁之旨趣輒底不致  
 時ハ第一風俗ノ紊乱ヲ釀シ且ハ驅懲施設ノ手支リト

物價表

|     |     |         |     |        |
|-----|-----|---------|-----|--------|
| 米   | 堂鳩濱 | 開商社商品時價 | 黑砂糖 | 四角三十七  |
| 投津  | 酒拾駄 | 銘五十兩    | 綿   | 阪上七百五十 |
| 肥後  | 塩百俵 |         | 赤綿  | 四十二    |
| 筑前  | 茶百斤 | 大頭六十枚   | 純綿  | 二百一    |
| 水油石 | 干鰯  | 一系十二    | 生糸  | 七百五    |
|     | 羽鰯  | 同二十     | 昆布  | 三系十七   |
|     | 鮭   | 九十七     | 寒天  | 四百二    |
|     | 晒鱈  | 百斤      |     | 七百二    |

伏テ黄一四万同好ノ子何事 コラム新説異聞アテハ  
 本局及ヒ撰集明工寄ヒ仕中 素志ヲ助ケモハ、車ヲ止メ  
 投書ハ必 願名ニテ可被遺志ニ昇社ノ心得也此紙候ハ  
 味兼可中版 (望ミヨリテハ極スル所) 辨臣賣買ハ親居候  
 △御セテ集會等引札 大に世間ニ被譽ル所ニシテ  
 本局 本局 本局 本局 本局 本局 本局 本局 本局 本局  
 撰集所 長春青池濱東 青湖堂  
 取 八取 西取 西取 西取 西取 西取 西取 西取 西取  
 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

取五 申年  
モ相成事ニ付當人ハ勿論媒介人迄モ向後見當次第可  
処嚴罰候各町内ニ於テモ互ニ氣ヲ付合可申若等閑ニ  
打過候時ハ品ニヨリ五人組之者モ可為越度事  
右之趣管内無洩相達ルモノ也

壬申十一月 大阪府權知事渡邊昇

○ 投書

過日新聞雜誌ニ牧牛ニ船來ノ馬肥シト云草皇國ニ澤  
山有之由揚致之有之候工共馬肥如何ノ物品ナル哉  
本草家ニ尋問シ真寫ヲ以余輩同様未タ実草ヲ不知者  
ニ廣告致シ度シ田舎間此事不叶故ニ貴社ニ託ス諸君

實草知ル入真圖ヲ以廣告ヲ希フ

右投書ニ報ス

本文ノ品當府下東大區船越町二丁目百六十二番屋  
敷ニ寄留文部省附屬同所元醫學校菜園懸リ三角有  
儀ニ質問セシニ左ノ通答ニ來レリ

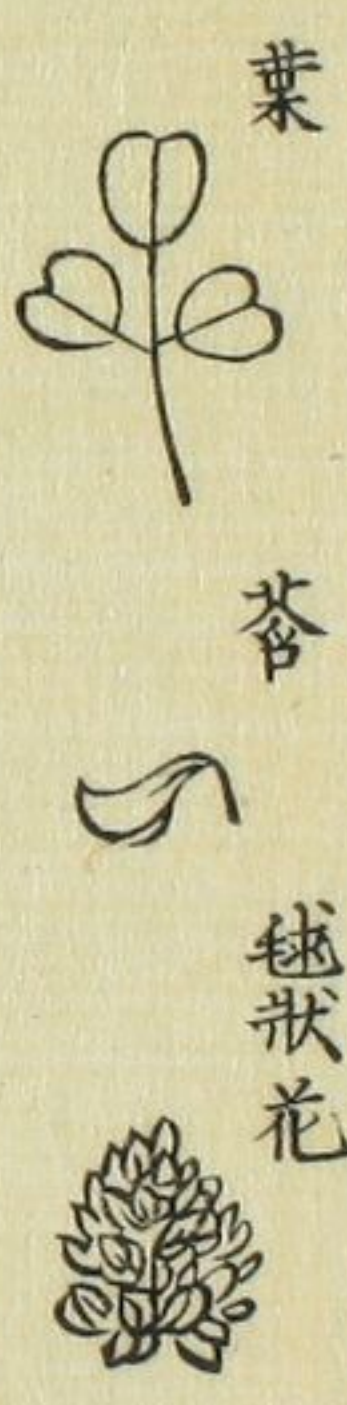
一 ムマゴヤシ 漢名昔昔菰 英名クロー。ウア

原野ニ多シ一 根叢生地ニ塌シテ蔓ノ如シ一枝三  
葉胡枝ニ似テ大サ四五分ソノ色深緑三月頃葉間  
ニ三五穗ヲ抽テ黄花ヲ開ク形ヲ百脉根ニ似テ大  
ニ後ニ莢ヲ結ブ事扁圓一種數花球狀ヲナス者ア



リ近頃ノ洋種紅花ニテ葉ニ斑アル者ヲ傳裁スベシ共ニ牛馬ヲ飼養スルニ宜シ其他詳ナル事ヲ知ント欲セハ前書有儀方ニ往テ問ヒ給ヘシ

畧圖



○ 島下郡第二區六番村某ト記レ投書ノ終ヲ記ス

此度地券御渡シ方願面ノ地代價立法村々確定不仕余輩其儀ニ關係致候身分ニハ無之候工共疑迷ノ愚意左ニ諸君高論ヲ仰ク我近隣村ニ多分從前ノ石高取米ト下作宛米トノ作間ヲ以代價相立居候左候ハ、以前高

價ニ買求ノ候下々田繩延地等ノ作間多キ地所ハ價貴高ニテ又ハ以前上々田繩縮等ノ作間少キ地所ハ價下低ニテ以後ノ税金モ些少ニ相成以前ニ上下相反シ至當平均ノ場合ニ不立至哉ニ存候

此度ノ御規則ハ全ク新聞雜誌五十一号ニ載スル租稅頭陸奥公ノ建白ニ寄候ハ、從前上下田畠石高ノ多少ニ不拘現今實地有畝步ニ地性水利ノ弁不弁宛米ノ石數ヲ以元價相立候様并兼仕候我愚意非ナラバ弁解教諭ヲ以テ余輩同様疑迷ノ者ニ給リ度又是ナリトセバ今一應府廳ヨリ一般地性現今宛米ヨリ代價相立候様

御布令有之度懇願ス

余文盲ニシテ文意拙ク候間此論取ル所アラバ貴

社ニテ御漆削ノ上出版仰所ニ候

○摂津名塩村一寺院ノ西京客何某年三拾餘バク儼毒ヲ患  
ヒ養生センカ爲ニ來寓セリ時ニ二老婦齡六十七ナル  
者ト七十五ナル者トヲ雇テ湯藥ノ用ヲ辨セシム然ル  
ニ某恒ニ多情病憊ノ身ヲモ顧ス共ニ二老婦ヲ密淫セ  
リ依之最初懇親ナリシニ二老婦相嫉ウラヤミ相爭アライヒテ云吾ノ狎ル  
ハ汝ニ先タツ車若干日我ノ接スルヤ汝ニ後レサル  
車若干夜ト舌戰數日某心ニ忍ヒサレトモ固ヨリ和義  
ナクナリ

セシム事能ハス村民コレヲ聞テ朝笑セサル者ナシ某  
慚愧ニ堪エズ遂ニ二老婦ヲ棄病未タ愈サレトモ西京  
ニ脱歸リシトゾ

○高槻ヨリノ郵便書状新聞函工投入セシハ脚夫ノ者  
奔走ノ勞ヲ偷ムナラント當新紙五十三号ニ記載セシ  
ハ全ク高槻ヨリ來リシ人ノ郵便箱ト思違工投入セシ  
趣ニテ脚夫ノ罪ニハアラザルナリ脚夫ノ失ナラント  
記セシハ新報社ノ探搜不行届ナレバ斯ニ記シテコレ  
ヲ謝ス

廣白

一 五十韻の原由 加藤祐一先生著 全一冊

附横文字五十韻 村田海石先生書

刻成

此書ハ手取りハ本々始め五十韻と大書一次に五十韻  
のたゞき、或示一國語の正しき筋を説き今人との  
常いふ詞とくとも聊うも規則よしとくふとまき妙  
用のまげを言みとりく俗の手本文のごとくつりて學問  
をまづ我國の事よりして學ぶべき道理をおし人たる書  
るていろはを替て知童かまづ習ひおべき書なり

浪華書肆

柳原喜兵衛

弘通

書籍會社

廣告

投書ハ奇事新説ヲ始メ總テ世ニ益アル事ニテ自然勸善懲惡ノ  
旨趣ニ適フモノハ擧テ上梓ムレドモ私ノ遺恨等ヲ以人ヲ謗リ或  
ハ不平心ニ托シ非ヲ理ニ書飾シ且無根ノ流説等ニテ人ノ損害ニ  
關ハル事件ハ一切上梓致サス候

投書ハ向後著名ニテ投入シ玉フベシ尤社中心得迄ニ紙上ニ其名ヲ  
記セズ上梓ノ上ニハ悉ク燒棄可申候若文中粗野ノ事アラバ公明  
ノ討論ヲ述べ顯名ニテ報答アラバ早速出版スヘシ統テ投書ニ付テ議論  
相互スルトモ當社ニハ關係致サズ候

社中敬白

物價日表

|     |     |         |     |        |
|-----|-----|---------|-----|--------|
| 米   | 堂嶋濱 | 開商社商品時價 | 黑砂糖 | 四角三十七  |
| 糖   | 拾貳  | 銘       | 五十兩 | 阪上七百五十 |
| 酒   | 拾貳  | 銘       | 五十兩 | 四十二    |
| 塩   | 百俵  | 大頭      | 六十枚 | 二十一    |
| 茶   | 百斤  | 大頭      | 六十枚 | 二十一    |
| 干鰯  | 箱   | 一       | 十二  | 七百     |
| 干鰯  | 箱   | 同       | 二十  | 三      |
| 干鰯  | 箱   | 九十七     | 七   | 三      |
| 晒鱈  | 百斤  | 寒天      | 千本  | 四      |
| 生糸  | 百斤  | 生糸      | 百斤  | 二十一    |
| 純銅  | 百斤  | 純銅      | 百斤  | 二十一    |
| 本綿  | 百斤  | 本綿      | 百斤  | 四十二    |
| 綿   | 百斤  | 綿       | 百斤  | 四十二    |
| 本局  | 青湖堂 | 本局      | 青湖堂 | 四十二    |
| 撰集所 | 青湖堂 | 撰集所     | 青湖堂 | 四十二    |
| 大阪  | 青湖堂 | 大阪      | 青湖堂 | 四十二    |
| 西京  | 青湖堂 | 西京      | 青湖堂 | 四十二    |
| 村上  | 青湖堂 | 村上      | 青湖堂 | 四十二    |
| 下   | 青湖堂 | 下       | 青湖堂 | 四十二    |
| 店   | 青湖堂 | 店       | 青湖堂 | 四十二    |

伏テ貸マ四方同好ノ 子何事ニヨラス新説異聞アハ  
 本局乃ヒ撰集明ノ寄ヒ計中 素志ヲ助ケ至ハハ事ヲ但ニ  
 撰集ハ心ニ願名ニテ可被遺尤ト是村ノ心得追テ出被撰ハ  
 撰集可申候 ○望ニヨツテ出版スル件△諸君貴買△新書開  
 △觀テモノ集會等引也 其他諸君貴買△新書開  
 △觀テモノ集會等引也 其他諸君貴買△新書開

本局 青湖堂  
 撰集所 青湖堂  
 大阪 青湖堂  
 西京 青湖堂  
 村上 青湖堂  
 下 青湖堂  
 店 青湖堂

子

